

平治物語

現代語訳

目次

上巻
中巻
下巻

上巻

「第一章 信頼信西不仲のこと」

ひそかに考えてみると、古代中国の（三皇五帝は国を治め、四つの山に囲まれ）、八人の善人に恵まれた民を慈しんだのは、みな（役人たちが）器量をみて官職に任命され、自身を反省して褒美を受けていたからである。君主は、臣下を選んで官職を授け、臣下は、自分（の分限）をはかって職任を受けるときには、任務を細部にわたって行い成功を収めるのは、勞しなくて果たされるといえる。そのために、航行する船が、海を渡るのは、必ず撓んだ楫のおかげであるし、鴻鶴の（ように併称される）鶴が、雲を凌ぐ（ように空高く飛ぶ）のは、必ず羽翼のおかげである。（同じように）帝王が国を治めるのは、必ず輔佐の臣下の助けによると云々。国の輔佐はかならず忠義で良いものを求める。人を任用するとき（的確な）人を得ていれば、天下は自然と治まると思われる。

古代から現在にいたって、王者が臣下を賞するのは、和漢両朝同じく文

31 16 1

武二道を優先する。文によっては万機の政治を輔佐し、武によっては四方の野蛮人が乱れるのを鎮める。天下を保ち国土を治める政略は、文を左にし武を右にすると思われる。喩えるならば人の両の手のように、片方が欠けてもかなわない。両者があるときに、天下には風波が立つ恐れもなく、国の果てまで民衆が愁うこともない。そもそも末世に及んでは、人々は傲って朝廷の威勢を軽蔑し、民衆も荒々しく野心をさしはさむ。よく用意しなければならぬ。とりわけ多数の中から選んで誉めるべきなのは勇士である。だから唐の太宗文皇帝は、髭を焼いて功臣に賜い、血を含んで瘡を吸って戦士を慈しんだので、（戦士の）心は恩義のために仕え、命は忠義によって軽いものであつたので、自身を殺すことも恐れぬ。ただ死に至ることをだけ思っていたということだ。（皇帝は）自身で手を下し、自分から戦えなくとも、人に誠意を施せば、人は皆（皇帝に）帰した。また讒佞のやからは国を損なう害虫である。栄華を朝夕争い、勢力や利害を市井や朝廷で競う。そのこびへつらいの姿から、忠賢（な臣下）が自分の上位にあることを憎み、その姦邪なところさしをもって、富貴に自分が先に至らないことを恨む。こうしたことは皆愚者のすることであり、手控えるべきことといふのはこうしたことである。

ここに近頃、権中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣信頼卿という人がいた。人臣の祖天津児屋根命の末裔で、中関白道隆の八代の子孫、播磨三位基隆の孫、伊予三位忠隆の子である。ではあるが文（に秀いでているわけ）でもなく、武（に秀いでているわけ）でもなく、能力もなく、芸才もない。ただ朝廷の恩にだけ誇つて、昇進には関わらない。父祖は諸国の受領だけを経て、年をとり老齢になつてから、ようやく従三位にまで至つた。（ところが）この男は近衛司、蔵人頭、皇后宮の「権」大夫、宰相中将、衛府督、檢非違使別当、これらを僅かに二、三年の間に歴任して、歳二十七で中納言右衛門督に至つた。撰関の嫡男などならば、このように昇進しなされるのに、凡人ではいまだこのような例を聞かない。又官職だけでなく、俸禄もやはり心のままである。このようにすでに過分であつたけれども、まだ不足して、（信頼の）家系に絶えて久しい大臣大将に望みをかけて、およそ身の程を知らない振る舞いをした。だから見る人は目をふさぎ、聞く者は耳を驚かす。（春秋の世の衛にいたつた）微子瑕にも過ぎ、（唐朝の）安祿

山にも超えな(ことである)。余桃の罪をも恐れず、ただ栄華の恩を誇った。その頃、少納言入道信西という者がいる。山井三位永頼卿の八代の子孫、越後守季綱の孫、鳥羽院のご治世の、進士蔵人実兼の子である。儒家の家に生まれたのに儒家の業を伝えないといって、諸学を学んで諸事に暗くなく、九流百家にいたる、当世に並ぶもののない宏才博覧である。後白河天皇の乳母、紀伊二位の夫であることから、保元元年からこのかた、天下の大事小事を心のままに執り行つて、絶えた跡を継ぎ、廃れた学道に興し、延久の例に従つて大内裏に記録所を設置し、訴訟を評議し、是非を判決する。聖断には私情をはさまなかつたので、人の恨みも残らない。世を善良素朴に戻し、君主を堯舜になし申す。(優れたご治世と評判の)延喜・天曆の二朝にも恥じず、(藤原)義懐、(藤原)惟成(が輔佐した花山天皇)の三年にも越えるものだった。

大内裏は久しく修造されていなかったため、御殿の建物は傾き、樓閣は荒廢して、牛馬の牧場、雉や兎の棲家となつてしまつていたのを、一、二年のうちに造営し終えて、(天皇を)お戻し申す。外郭を重ねた大極殿、豊樂院、諸司八省、大学寮、朝所(あいたんどう)にいたるまで、花のような垂木、雲の肘木、大きな建物の構え、(このような)成風の功を(なすのに)、歳月をかけずに日ならず、民に負担もかけず、国の費用もなかつた。(正月の)内々の宴、(文月の)相撲の節会(など)、久しく絶えていた行事を興し、詩歌管弦の遊びを、折々に催す。宮中の儀式は昔を恥じず、万事の礼法は往古の通り。

去る保元三(一一五八)年八月十一日、主上は退位されて、お子である皇子に讓位された。二条天皇である。しかし信西の権威もますます威勢を振るつて、飛ぶ鳥も落ち、草木もなびくほどである。また信頼卿の寵愛もやはりますますひどくなつて、肩を並べる人もいない。それであれば両雄は必ず争うならいであるうえに、どのような天魔が二人の心に入つたのだろうか、その仲は悪くて、ことに触れて不仲のことが評判となつた。信西は信頼を見て、どのようにもこいつは天下を危うくし、国家をも乱すであろう人だと思つたので、どうにかして失脚させたいと思つたが、当時無双の寵臣であるうえ、(朝廷)人の心もわからなかつたので、うちとけて談合するような仲間もいず、(またの)機会があつたならばと躊躇つていた。信頼もまた何事も(自分の)心のままになるのに、この入道が自分を拒んで

(いるので)、恨みをもつ相手は彼であるはずだ、と思つていたので、どのような計略でもめぐらして、失脚させようと企んだ。

ある時、信西にむかつて(後白河)上皇が仰つて、信頼が大将を望むのはどうだろう。必ずしも代々清華の家柄ではないけれども、時によっては(そつした者も大将に)することもあつた、と伝え聞くが、と仰つたので、信西は、さあこの世の中、今はさてと嘆かわしくて、申し上げるには、信頼などが大将になつてしまえば、誰が(今の政治に)望みをかけましようや。君主の政治は、中央官職の任命を先途とするものです。叙位や(官職任命の)除目にまちがいがございませぬならば、上は高大な天に背き、下は人々の誹りをつけて、世の乱れの始まりとなります。その例は中国にも本朝にも繁く多くございます。ですからでしょう、阿古丸大納言宗通卿を、白河院が、大将にしようとお思いになられましたが、寛治の聖主(といわれました堀河天皇)はおゆるしになりませんでした。故中御門藤中納言家成卿を、旧院は、大納言にしたいものだ』と仰いました。諸大夫が大納言になることは、絶えて久しくなつております。中納言に至りましたことですから、過分でございますものを』と諸卿が諫め申し上げたので、思いとどまりなさいました。せめてのおこころざしからでしょう、年初の勅書の上書きに、中御門新大納言殿へ』とお書きになられたそうです。これを拝見して、(中御門中納言家成は)ほんとうになさるにしても、やはり過ぎた面目だなあ。おこころざしのほどががたじけなく、と、老いの涙を拭い兼ねたと申します。まして近衛大将です。三公に列しても、大将を経ない大臣もあるのです。撰関家の子息や、優れた才覚の持ち主も、この職を出発点とします。信頼などの身によつて大将を汚しますならば、いよいよ驕りをきわめて、謀逆の臣となり、天のために滅ぼされましようことを、どうして不憫にお思いになられませんか』と諫め申し上げたが、その通りと(上皇が)お思いになつていらっしゃる様子はない。信西はあまりの不甲斐なさに、唐の安祿山が傲つていた昔(の姿)を絵に描いて、巻物三巻を作つて院に差し上げたけれども、上皇はやはりその通りとお思いになられることもなく、ご機嫌は他へと向いた。

信頼卿は、道憲(通憲)入道が散々に(自分のことを)申し上げたことを漏れ聞いて、心安からぬことだと思つたので、つねに所勞と称して出仕

せず、伏見の源中納言師仲卿をかたらつて、彼の所領に籠つて、馬に乗り、馳引、早足、力持など、ひとえに武芸を稽古なさつた。これはしかしながら、信西を滅ぼすためである。

「第二章 信頼卿が信西を滅ぼすことを議すること」

(信頼卿は)子息新侍從信親を、大式清盛の婿にして近づいて、平家の武威をもつて本意を遂げようと思つたが、清盛は太宰大式であるうえ、大國をたくさん頂いて、一族が皆朝廷の恩顧をこうむり、怨みもあるまいので、まさか同意しまいと思いとどまる。左馬頭義朝は、保元の乱以後、平家に(朝廷の)おぼえも劣つて、心安からず思つている者と思われ、近づいて熱心に志を通わした。つねに会つたたびに、信頼がこのようにございませぬので、国も庄も望み、官位階も申すのに、主上もまさか異論はございませぬまい」とおっしゃる。このようにお心をおかけくださることは、この身にとつて大いなる慶びです。どのような大事でもうけたまわつて、一方はかためましよう」と(義朝は)申し上げた。それだけでなく、今上陛下のご外戚の、新大納言経宗をもかたらい、中御門藤中納言の三男、越後中将成親朝臣は、上皇の寵愛厚い者であるとかたらい、養育係の別当惟方も頼みとした。中でもこの別当は、母方の叔父であつたのを、自分の弟尾張少将信俊の婿にして、特別に深く結んだ。このように準備をめぐらして、隙をうかがつていたところ、平治元(一一五九)年十二月四日、大式清盛が宿願があると、嫡子の左衛門佐重盛を連れて、熊野に参詣することがあるその隙をついて、信頼卿は義朝を招き、信西は紀伊二位の夫であることから、天下の大事小事を心のままに執り行い、子供たちにも官職位階を好き放題に与え、信頼のほうを見ると、火の呪い(をも水)の呪い(をも行)う、讒佞至極のやからです。この入道が長い間天下にあつて(政権を握つて)いては、国も傾き世も乱れる災いのもです。上皇もそのようにはお思ひになつたけれども、機会がなかつたので、ご懲罰もなかつたのです。いやはや、貴殿もずつとどうでした。大式清盛も彼の縁者となつて、源氏の人々を貶めようとしているなど聞いています。(本来ならば)よいように取り計らわれるべきなのに」と語ると、義朝が申し上げるには、六孫王から七代、

弓矢の芸で、今に叛逆のやからを懲らしめ、軍略の術を伝えて、兇徒を退けております。それなのに去る保元に、一門の者たちが多く朝敵となつて、親類はみな首を晒されて、義朝一人になつてしまいましたので、清盛も内々に(さぞ)源氏を貶めるように(計ら)つたことですよ。これらはもとから覚悟の上のことです。あなたも驚くほどのことではございませぬが、このように頼みになさつて仰るうちは、好機がございませぬれば、一門の浮沈をも試みようと思ひます」と申したので、信頼は大いに喜んで、怒物作りの太刀を一振り自身で取り出して、悦びの始まりであると引き出物としてお授けになつた。義朝が謹んで受け取つて出たところ、白いのと黒いのとなかなかの様子馬二匹が、鏡鞍を置いて引いてあつた。夜陰のことであつたので、松明を振り上げさせてこの馬を見て、合戦の準備に、馬ほどの大事はございませぬ。近頃の馬でございませぬ。この龍蹄をもつて、どのような強陣であつても、どうして破れないことがございませぬ。合戦は軍勢によらず、謀略によつてすると言ひますが、小勢で大勢には敵わないとも申しますので、(兵庫頭源)頼政、(出雲守源)光泰、(光保)その弟伊賀守(光基)、(周防判官源)季実らをもお呼びなさいませ。そのうえこれらを始めて、源氏たちは、内々、申し上げたいことがあると聞いております」と申し上げて出たので、信頼卿が数ヶ月にわたつて日頃用意しておいた武具であるので、威を立てたばかりの(新しい)鎧五十領を、追うように遣わされた。信頼はすぐに人々を呼んで、頼みにするとおっしゃつたので、一門の中の大将がすでに従いますうちは、どうこう言つに及びませぬ」といつて(諸將は)帰つたので、(信頼は)大いに喜んで。

「第三章 三条殿を出発並びに信西の宿所を焼き払ふこと」

同九日の夜、子の刻ほどに、信頼卿、左馬頭義朝を大将として、その軍勢は五百騎以上で、院の御所(東)三条殿に押し寄せ、四方の門をかため、右衛門督(信頼卿)は、馬に(乗り)ながら南の庭に立つて、長年ご寵愛をこうむつてまいりましたが、信西の讒言によつて、信頼をお討ちになるといふことをお聞き申しましたので、しばしの命を助けるために、東國のほうへ下向いたします」と申し上げたので、上皇は大いに驚きなさつて、何

ものが信頼を滅ぼそうとするというのだ」と、途方に暮れてしまわれたので、伏見源中納言師仲が車をさし寄せて、急いでお乗りになられるように申し上げたので、諸將は「早く御所に火をかけよ」と、声々に申しした。

上皇は慌てて車にお乗りになつたので、お妹「姉」の上西門院も、一つ御所にお移りになつていたが、同じ車にお乗りになつた。信頼、義朝、光泰「光保」、光基、季実らは、前後左右を囲んで、大内裏へとお入れして、一本御書所に押し込め申す。すぐに佐渡式部大輔「大夫」重成、周防判官季実が、近くにお控えて上皇を守護し申す。それにしてもこの重成は、保元の乱の時も、讃岐院の、仁和寺の寛遍法務の坊にお移りになつたのを、守護し申して、讃岐へのご配流された時も、鳥羽まで「一緒に」参つた者である。どうしたためであろうか、一代の君を守護し申すのは」と、人々は言い合つた。三条殿の様子は言いようもないくらいである。各門を武士たちが固めているところに、所々に火をつけてしまつた。猛火が虚空に満ちて、暴風が煙雲をあげる。公卿、殿上人、局の女房にいたるまで、これも信西の一族であるのだらうかと、射伏せ斬り殺すので、火に焼けまいと「東三条殿の」外に出れば矢に当たり、矢に当たるまいと帰れば火に焼け、矢を恐れ火を避けようとする者たちは、なんと井戸に多く飛び込んだ。それも「安穩なのは」しばらくのことで、下にいる者は水に溺れ、中ほどにいる者は仲間に圧されて死に、上にいる者は火に焼かれた。造り重ねた殿舎が、はげしい風に吹きたてられて、灰燼が地にほとばしつたので、どのような者が助かることができるだらうか。あの「秦の」阿房宮の炎上は、后妃、采女の身を滅ぼすことはなかつたのに、この仙洞御所の火災には、公卿や殿上人たちが命を落としたというのはあきれ果てることだ。左兵衛尉大江家仲、右衛門尉平康忠は、ここを最期と防戦したが、ついに討たれてしまつたので、家仲、康忠両人の首を鉾の先に貫き、大内裏に馳せ参じて待賢門にさしあげて、うめき叫んだほかは、しでかしたことはなかつた。

同日丑の刻に、信西の宿所、姉小路西洞院へ押し寄せて火をかけたので、女童が慌てて迷い出てきたのを、信西が姿を変えて逃げようとしているのかも知れないと、多くの者を斬りふせたという。

保元の乱以後は、治世は安楽で、都も田舎も戸締りを「する必要を」忘れ、歓楽遊宴をして、上下のものたちは屋を並べたのに、火災の延焼で、民

家が多く焼亡したので、これはどのようになつてしまつた世の中だらうか。この二、三年は洛中はことさら平穏で、甲冑を着て、弓矢を持つた者もなかつたから、たまたま持ち歩く人も「人目を」遠慮する様子であつたのに、今は武士たちが、京や白河に満ち満ちてしまつた。この後どのようになるのだらうか」と、嘆かない人はなかつた。

「第四章 信西の子息闕官のこと」

少納言入道信西の子息五人が闕官させられる。嫡男新宰相俊憲、次男播磨中将成憲、権右中弁貞憲、美濃少将長憲、信濃守惟憲「の五人」である。「解官決定の」上卿は、花山院大納言忠雅、職事は蔵人右少弁成頼ということである。

そうしているうちに、太政大臣「藤原宗輔」、左右大臣「左大臣は藤原伊通」、内大臣「藤原公教」以下、公卿が参内なさつたので、詮議があつて、信西の子供たちを聴聞すると、播磨中将成憲は、太宰大弐清盛の婿であるので、もしかしたら命が助かるのではと、六波羅に落ち延びていたのを、宣旨と、内裏から立て続けに召喚されたので、力及ばず出頭された。博士判官坂上兼成が迎えに行き、成憲を受け取つて内裏に参上したので、尋ねたことがあると、兼成に預け置かれる。権右中弁貞憲は、鬚を切つて法師になつて、そばで潜んでいたのを、「惟」宗判官信澄が尋ね出して、別当に申したので、これも信澄に預けられた。

すぐに除目が行われる。信頼卿はもともと望みをかけていたので、大臣大将を兼ねてしまつた。左馬頭義朝は、播磨国を賜つて播磨守となる。佐渡式部大輔「大夫」重成は信濃守になる。多田蔵人大光源頼範「頼憲」は摂津守となる。源兼経は左衛門尉となる。康忠は右衛門尉となる。足立四郎遠元は右馬允となる。鎌田次郎政清は兵衛尉になつて、政家と改名する。次の合戦で勝つたならば、上総国を賜るであらうことをおっしゃつた。

ここに義朝の嫡子鎌倉惠源太義平は、母方の祖父三浦介のもとにいたが、都に騒ぐことがあると聞いて、鞭をうって馳せのぼつたが、今度の除目にちようど参内した。信頼は大いに喜んで、義平がこの除目にたまたま参内したのは幸いであるなあ。大国か小国か、官も位階も、思いのままに進め

ることができず。合戦でもまたしつかりとお仕えしろよ」とおっしゃると、義平が申すには、「保元に、叔父鎮西八郎為朝が、宇治殿の前で蔵人にされたので、あまりに急な除目であると、辞退し申したのは道理です。義平に軍勢を下さいます。安辺野のあたりに駆けつけて、清盛の戻ってくるのを待つて、熊野参詣歸りの（浄衣だけで上洛するところを、真ん中に取り込めて、ひとときに討つべきです。もし命を助けたいと思えば、山林に逃げこみますでしょう。そうすれば追いつめて捕らえて首を刎ね、獄門にかけて、その後信西を滅ぼし、世も鎮まつてから、大国も小国も、官も位階も昇進させていただきましよう。目立つたこと「成果」もないのに、あらかじめなつて何になるでしょうか。ただ義平は、東国で武士たちに呼ばれなれてございますので、もとの悪源太でございます」と申した。信頼は、「義平の申すことは乱暴なことだ。そのうえ安辺野まで、馬の足を疲れさせてどうするのだ。（清盛めを）都に入れて、中に取り込めて討とうというのに、そんなことが必要だろうか」とおっしゃるので、みなこのやり方に従った。（それというのも、ひとえに）信頼方の（運が尽きたためであろう。

大宮太政大臣伊通公、その頃は左大將、左大臣）でいらつしやうたが、才能も学問も優れていて、御前でもいつも機知に富んだことを申されていたので、上皇も諸臣も大いにお笑いになり、（管弦の）遊びも素晴らしかった。内裏でこそ、武士たちはしでかしたこともなかつたけれども、思いのままに官位階を加えましたなあ。人を多く殺しただけで、官位階を進めるのであれば、三条殿の井戸こそが多くの人を殺しました。どうしてその井戸には官を進めないのでしょうか」と笑われた。

「第五章 信西出家の由来並びに南都落ちのこと」

そうしているうちに、通憲入道を探したけれども、行方はまつたくわからなかつた。あの信西と申す（人）は、（藤原）南家の博士（であつたが）長戸守高階経俊の養子である。大きな事業も遂げず、儒官にも入ることができず、代々（の家系）ではないのであると、弁官にもならず、日向守通憲として、何となく御前で召し使われていたが、出家した理由は、御所に参内しようと鬢をかいたところ、鬢水兵（映つた）人相を見ると、寸の首が剣

の先にかかつて、身を滅ぼすという相である。大いに驚いていた頃、宿願があるので、熊野へ参詣した。切部の王子の御前で、人相見に行き逢つた。通憲を見て人相を占つて言うには、「あなたは諸道に通じた才人なあ。ただし寸の首が剣の先にかかつて、露命の草上に晒すという人相があるのはどうしたことだろう」と言つて、いちいち占つたが、将来はわからず、過去は何事も間違つてなかつたので、「通憲もそう思うぞ」と嘆き悲しんだが、「それをどうしたら逃れることができるでしょうか」と、人相見に「言つて、さあ出家したら逃れることもできるでしょうか。それも七十代を越したら、どうなるでしょうか」と言つた。

そうして下向して御前へ参り、（鳥羽上皇に）出家の志がございしますが、日向入道と呼ばれるのは、無性に情けないと存じます。少納言（の官）をお許しただけでいいでしょうか」と申し上げたので、「少納言は撰関がなつたりもして、簡単には与えられない官である。どうしたものか」とおっしゃられたのを、いろいろに申し上げてお許しをいただいて、すぐに出家して、少納言入道信西と言つた。子供たちはある者は中将や少將に至り、またある者は七弁の中に並んで、並々ならなかつたが、ついに墨染の袖に様を変えても、露の命を野辺の草葉に置きかねたのは、昨日の楽しみが今日の悲しみ（となる例で）、諸行無常がただ眼前に現れたのであつた。（人の）吉凶というものもより合わせた縄のようだ、というのも道理である。

信西は、九日の午の刻に、白い虹が日を貫くという天変を見て、（信頼勢が）今夜御所に夜討ち入るようだとはかねてから知っていたのだろうか、院の御所に参内したところ、ちょうど上皇主催の管弦の遊びで、子供たちがみな御前に伺候していたので、その興を醒まし申すのも無骨であるので、ある女房に事情を申し伝えて、退出した。宿所に帰り、（妻の）紀伊二位に、「こういうことがある。子供たちにも知らせなさい。信西は思うところがあつて、奈良のほうへ行くことにする」と言つたので、尼君も同道をと嘆かれたが、さまざまに言いなして留めて、武士四人と一緒に連れて、秘蔵していた月毛の馬に乗つて、舎人成澤を連れて、南都のほうへと落ち延びたが、宇治路にかかつて、田原の奥、大道寺という所領に行った。

石堂山のうしろ、信楽峰を過ぎてはるばると分け入ると、また天変がある。木星の寿命が亥にあり、大伯が經典を侵す時は、忠臣が君にかわり申

すという天変である。信西は大いに驚いて、もとより天文を推察する道はきわめていたので、自らこれを考えると、強い者は弱く、弱い者が強いという様子がある。これは君主が威勢を振るう時には、臣下が弱く、臣下が威勢を振るう時には、君主が弱くなるということである。今、臣下が威勢を振るって君主が弱くなられている。忠臣が君主にかわるというのは、おそらく私のことであろうと思つて、翌十日の朝、右衛門尉成景という武士を呼んで、「都のほうではどうなつてゐるか、見て戻つてこい」と差し遣わす。成景が馬に乗つて馳せてゆくうちに、小幡峠で、入道の舎人武澤という者が、院の御所に火がかつた後、入道殿が奈良へ（行かれた）と聞いたので、このことを申し上げようと走つていたのに行き逢い、これこれの事情を語り、「姉小路の（入道殿の）ご宿所も、焼き払われてしまいました。これは右衛門督（信頼）殿が左馬頭（義朝）殿を語らつて、入道殿のご一門を滅ぼされようとする陰謀だとお聞きします。そのことをお告げ申そうと、奈良へ参上します」と申すので、召使いにいらつしやるところを知らせてはまずいだらうと（成景は）思つたので、「お前はよくぞ参つた。（入道殿は）春日山の奥、これこれの所である」と教えて、成景は京に上る様子をして、田原の奥に帰り、入道にこのことを申し上げると、「だからこそ、信西が見たことは、まず違ふまいと思つたのだ。忠臣が君主にかわり申すのであるので、及ばずながら、命を失つてご恩に報じ申そう。ただ息が通つてゐるうちは、仏の御名を唱え申そうと思つたので、その用意をせよ」と、穴を深く掘り、四方に板を立て並べ、入道をお入れして、四人の武士たちも髻を切つて、「最後のご恩に法名をいただきたい」とおのおのが申したので、左衛門尉師光は西光、右衛門尉成景は西景、武者所師清は西清、修理進清実は西実と付けられた。その後で大きな竹の節を通して、入道の口にあつて、髻を添えて掘り埋める。四人の武士は墓の前で嘆いたけれども、叶わないことなので、泣く泣く都へ帰つた。

「第六章 信西の首実験のこと」

舎人成澤も同じく京都へと上洛したが、（入道殿が）最後に乗られた馬である、紀伊二位にお見せしようと、（主を失つた）空しい馬をひいて帰ると

ころに、出雲前司光泰（光保）が五十数騎で、信西の行方を捜しに来たのに、小幡山で行き逢う。（光泰は）馬も舎人も見知つていたので、捕まえて尋ねると、はじめは知らないと言つたけれども、結局はありのままに申した。すぐにこの男を先に追い立てて行くうちに、新しく土を掘つたところがある。「あれが、そうです」と教えるので、すぐに掘り返して見ると、まだ目も働き息も通つていたので、首をとつて帰つた。

出雲前司光泰が、信頼卿にこのことを申すと、同十四日に、別当惟方と同車して、光泰の宿所の、神楽岡へ行つて、この首を実験する。（実験の結果信西の首であるのは）確實であるので、すぐに翌日大路を渡し獄門にかけるべきであると定められたので、京中の者たちは身分の高低に関わらず、河原に市をなして見物する。信頼、義朝も車を出してこれを見る。十五日の午の刻のころ、晴れた天がにわかになく、星が出た。これを不思議といつてゐるところに、この首が信頼、義朝の車の前を通るとき、そつと頷いて通つた。見る人はみな、「今に敵を滅ぼしてしまつたらう、恐ろしいことだ」と言つた。朝敵ではないのだから、勅命でもなくて、首を獄門にかけられるのも、前世の宿業とは申すものの、去る保元（の乱後）に、絶えて久しい死罪を執り行つた報いだらうか」と人々は申した。

その一方で、紀伊二位の思いは深く、偕老同穴の契りも深かつた入道に後れてしまわれた。僧俗の子供たち十二人を召喚され捕らえられて、死生もまだ決まらない。頼みとなる院も、押し込められていらつしやつて、月日の光すらしつかりとご覧にならない。自分は女ではあるが、信頼のところへ連れてゆかれて、命をとろうと言つのであれば、結局は逃れられまいと嘆かれた。

「第七章 唐僧来朝のこと」

その紀伊二位と申すのは、紀伊守（藤原）範元の孫、右馬頭（藤原）範国の娘である。八十島下りで三位に叙され、すぐに従二位になつて紀伊二位と申した。信西の妻室となつて、不思議が多かつた中でも、唐僧が来て、生き身の観音であると拝んだことがある。それは、久寿二（一一五五）年の冬頃、鳥羽法皇が、熊野山にご参詣なさつたが、その頃熊野の（那智山

に唐僧がいる。名を淡海沙門という。この僧は異国で、自分はこの身を捨てず、生き身の観音を拝み申そうという願を起こして、天を仰いで一千日のあいだ祈請する。千日が満ちた夜に、お前が生き身の観音を拝もうと思ふのなら、日出づる処へと渡つて那智山というところへ行け」と、天のお告げをこつむつて、渡海の本望をとげて、かの山に参籠していたのである。

法皇はこのことをお聞きになつて、唐僧をお呼びになると、御前に参つて、和尚和尚」と礼する。唐僧であるので、言葉を聞き分けられる者がいない。ただ鳥がさえずるようであつたのを、信西が末座に控えていたが、禅加此法設除淨精でいらつしやつたのか」と尋ねると、唐僧が答えて、そうではございません。弘誓破戒設除大精で参りました。それで唐僧は、信西の言葉を聞いて、才学の程度を量ろうと思つたのだらうか、異国のことを問ひかけた。震旦、中国の長安城から、天竺、インドの舍那大城へは何万里

でしょうか」と、唐僧が尋ねると、十万余里です」と、信西が答える。遺愛寺という寺はどこにございませう」と、唐僧が尋ねると、天台山から西に行くこと七百里、白樂天が世を遁れたところとか、聞きます」と、答えるので、今度は、唐僧は難しいことを尋ねようと思つたのか、中国古代の名医、扁鵲の門には何がございませうや」と訊く、すると、延命という草を植えてありました。これを見る者は、善を招き悪を避け、寿命が長く延びます」といふ。女陽の門には何がございませう」と尋ねると、信西が答えて、乱樹という木があります。三十年に一度、片方の枝に花が咲いて、もう片方の枝に実がなります。これをとつて食べる者は、酩酊すること百日余り、その味わいは西王母の桃にも似てございませう」と、

長良国とはどちらでございませうか、都城から巽の方角へ行くこと二百里です。梵王が建てられた三百尺以上の瑪瑙の塔があります。この塔の下には、摩訶曼陀羅華、摩訶曼殊沙華などの、四種の天の華が開いております。釈尊が燃燈仏のもとで、髪をおろされたところですよ。大雪山には何がございませうか、薬寿王という木があります。その木の葉を鼓に塗つて、撃つ音を聞く者は、不老不死の徳を得ます。西山には何がございませうか、波珍という虫がおります。頭にさまざまな財宝を戴き、いつも仏を供養し申す思いがあります。長山には何がございませうか、三重の滝があります。この滝の水を飲む者は、大変怒る感情をもちます。しかし

竹馬に鞭をうつて、道心に目覚めるともいいます。瓠火琴を弾かせます」と、どうなりませう、四方の鱗をもつた生き物)がすべて陸に上がります。鈴宗笛を吹かせますと、どうなりませう、天人が袖を翻します。唐の太宗はどのような方でしょうか、鷹のそばで、天下を治める相があります」と、いちいち答えたので、唐僧は、私の国から渡つてきた方ですか、それとも(この国から)私の国に(来て学んだ方ですか)と尋ねたので、信西は、もともと自分は、この国の出身ですが、もしかして遣唐使として渡ることもありませうかと、天竺、震旦、高麗、新羅、百済をはじめとして、五、六年のあいだに、上は皇帝から下は庶民の言い換えた言葉まで、学んだのです」と答えたので、自分は生き身の観音を拝み申そうと、天のお告げを受けてここまで来ました。あなたが生き身の観音です。自分の願いはむなしくなりませんでした」と、信西を三度礼拝し、さまざまな引き出物を捧げた。その後信西は、わが国の言葉で、このことを奏上したので、主上をはじめとして、供奉の人々は、みな不思議な思いをされた。

「第八章 叡山物語のこと」

また保元(一一五六)年の春の頃、比叡山に(鳥羽上皇が)御幸された。山門には大師の禅定を修行するための道具がある。道具の(名字をお尋ねになられたが、大衆たちは、公家の才学を量ろうと思つたのだらうか、

我が山の秘宝でございませうのですが、本当に名字を知っている者はございませぬ」と、一同に申したので、鳥羽(法皇は、先年熊野で信西が不思議の才学を發揮したので、もしかしたらこれも知っているだらうかと、お呼び出しになつたので、御前に参上してかきこまる。まず一つ目の箱の修禅定の道具の中に、大きさは手鞠ほどで音がする物がある、これはなんだらうか)とご下問があつたので、禅鞠と申します。天台止観の第四巻にあります。たとえば大師禅定のときに、眠気があればこれを頭上に置きます。眠ると自然と頭上から禅鞠は落ちます。落ちますと音がします。そのため眠気が醒めるというわけです。また二尺四、五寸ほどの木の先に、大きさが大きな蜜柑ほどで柔らかい物(がついている物)がある、大師修

禅定のときに、身体が苦しいことがございましたらば、これで抑えます。抑えれば、苦しみもやみます。これを禅杖といいますが、一尺ほどの木を、糸を巻き取る、かせ木のように互い違いにして、先ごとに絹をかけて塗った物がある、大師座禅で胸が痛むときに、これで抑えます。抑えれば、痛みもやみます。助老とこれをいいます。また枕に似ている物がある、その名を頭子と言います。くわしくは、梵網經にありませう。これらの禅杖、禅杖、助老、頭子)を四種の物といいますが、十九番目の箱は、下野国宇都宮の御殿に収められています。乙護法使者です。明神は自分勝手でございますので、人はどうして知ることもないのですが、あるものには宇賀神の法を籠め、あるものには陀天の法を籠め、大師の手印で封ぜられているとか云々。不空羂索(如来の)人骨の念珠も、この箱にあるとか。およそ延暦寺は(伝教)大師最初の伽藍です。大講堂は深草の天皇(仁明天皇)のご願で、延命院、四王院は文徳天皇、朱雀天皇のご願で建てられたものです。法華堂には、大師三代のお経もございませう。五台山のお香の火、清涼山の土もあります。前唐院には、大師の(使われた)ご脇息、香炉もあり、肖像もございませう。そのほか弘仁五(八一四)年の春に、大師が九州宇佐の宮に参詣され、法華の真文を講演なされたので、宇佐の八幡(大菩薩自身が齋殿を開き、お手づから大師にお授けになられた紫の袈裟には、光明赫々として、八幡様が三所もいらつしやいます。天竺の多羅葉、法全法師の独鈷、焦熱地獄からとり伝えた泗濱石も、当山にございませう。それだけでなく、三十番神が守護なされる根本の楢の洞穴、飯室の五つ坊の谷まで、うちならず鐘の響きがしたということからも、人がいるとは知られませう」と、三塔の秘事をいちいちに申したので、法皇を始めとして、叡山の(三千衆徒は奇異な思いをした。

法皇ご帰還の後も、公卿や殿上人たちは、信西の才学が広いことを感じ申したことに、四方山話をなされた。それにしても、双六のサイコロの目で、一が二つでたのを置一といい、二が二つでたのを重二という。五や六も置五、置六と申す。これらはみな重なるという意味なのに、三、四だけは朱三、朱四というのはわからない。これを質問なされてください」と申したので、法皇もなるほどと、信西をお呼びになつて、このことを下問なされたので、そうです。昔は、ほかの出目と同じように(重三、重

四と申してましたのを、唐の玄宗皇帝と楊貴妃とが、双六をなさつたときに、重三の目が必要で、朕が思うように出たら、)重三の目を(五位にしよう)とおふりになると、重三の目が出ました。楊貴妃がまた重四の目を願つて、私の心のままに出ましたら、一緒に五位にしましよ」とおふりになると、重四が出ました。そこで天子に二言はない、同じく(二つの目を(五位にしよう)と)五位の位に(おつけになりましたので、何を(五位になつた)しるしにしようかという)と、五位は赤衣を着るので、重三、重四の目に朱をさされて、以来、朱三、朱四と呼ぶことだそうでございます」と奏上したので、諸卿はみななるほど感じ入つた。

だから凡人ではないのだろうか、死んで後、手には日記を提げ、口には筆を含み、閻魔の役所でも、第三の冥官に連なつていて、人の夢にも出てきた。このような人が、今首を獄門にかけられたのも、保元の合戦で、宇治の悪左府(頼長)のご墓所は、大和国添上郡河上村、般若野の五三昧であつたのを、信西の命令によつて、勅使を立てて掘り起こし、死骸をむなく棄てて辱めたのが、中二年あいて、平治元(一一五九)年に自分から埋め隠されたけれども、結局掘り起こされて首を斬られたというのは恐ろしいことだ。昨日の他州の心配は、今日は我が身の被害とは、このようなことを申すのでしよう。

「第九章 六波羅より紀州へ早馬を立てられること」

そうしているうちに、十日の明け方に、六波羅から立つた早馬が、切部宿で(清盛たち一行に)追いついた。清盛が、どうしたのだ」と尋ねなされると、去る九日の夜、三条殿に夜討がありまして、御所がみな焼き払われてしまいました。少納言入道の宿所も焼き払われました。これらはすべて右衛門督(信頼卿)が左馬頭(義朝)殿をかたつて、当家を滅ぼし申すうとの謀略だと聞き及びます」と申し上げたので、清盛は、急いで下向しないといけないだろうか。ここまで参つて、熊野権現への(参詣をとげないのも残念である。どうしたものかな)とおっしゃるので、左衛門佐(平)重盛は、熊野参詣も、主上の当世安穩無事を祈願なされるものでございませう。そのうえ、主君が逆臣に捕われていらつしやるのです。急いで

下向なさるべきでしょう」と申し上げられたので、みなこの意見に同意した。それにしても、敵に向かつて帰洛しようというのに、武器が一領もないのはどうしたらいいのだ」と（清盛が）お嘆きになられるところに、筑後守（平）家貞が、長櫃を五十合、重たげに持たせてきたのを取り寄せて、五十領の鎧、五十腰の矢、そのほかの武具をとり出してさし上げる。弓はどうする」とおっしゃると、大きな竹の負い棒の中に、節をつけて入れてあつたので、そのまま五十張の弓を取り出した。そのまま家貞は、重目結いの直垂に洗革の鎧を着て、太刀を脇挟み、大将をお勤めする者は、このように用意するものです」と申し上げるので、武士たちも、立派な手柄だ」と感じ入った。熊野別当湛増が田辺にいたのに、使者を立てなさると、武士二十騎をさし上げる。湯浅権守宗重が、三十騎以上で馳せ参じたので、かれこれ百騎ほどになった。

ここで悪源太（義平）が、三千騎以上で安部野で待つという報が入ったので、清盛は、この無勢で、多勢に遭つて討たれるのは残念である。まずこれから四国に渡つて、軍勢を募つて後日に都に入りたい」とおっしゃるので、重盛がふたたび申し上げられたのは、それもそうでございますが、事態が長引くと、きつと当家を追討するように、諸国へ院宣諭旨が下されるでしょう。そうして朝敵となつてしまつた後では、後悔しても役に立ちません。多勢で無勢を討つのは、普通のことです。あえて弓矢の傷をつけるような手柄）にはなりません。ですから無勢であつてもかけ向かつて即座に討死してしまえば、後代の名声も優れたものになるでしょう。どう思つか家貞」とおっしゃると、筑後守は、六波羅にいるご一門衆もこれこそ不安に思われていらつしやるでしょう。お急ぎください」と申し上げたので、清盛も、その通りだな」と都をめざして帰洛する。

大将以下みな浄衣の上に鎧を着、敬礼熊野権現、今度の合戦に差し障りなく勝たせて下さいませ」と祈請して、かけらせかけらせ進むうちに、和泉と紀伊国の境である鬼の中山で、茸毛の馬に乗つた者が、早馬らしく、急ぎに急いでやって来た。さあ悪源太の使者かと、人々はみな落ち着きを失つたが、源氏の使者ではなくて、六波羅からの早馬である。それでは六波羅はどうなつた」と、清盛が（お尋ねになると、昨日の夜半ほどに出ました時までは、何事もございませんでした。播磨中將 藤原成憲）殿が頼つてお出で

になりましたが、内裏から宣旨であると、頻りに呼ばれましたので、仕方なく十日の暮れ頃にお出し申し上げました」と申し上げたので、左衛門佐は無性にどうしようもないことをなさつた方々だなあ、六波羅に残つたのは、当家を頼つて来た人を、敵の手に渡すということがあるか。これでは味方の勢力も尽きてしまつてはないか」とお怒りになった。それはそうと悪源太が、安部野に待つているというのはどうなのだ」とお尋ねになると、そのようなことはございませんでした。伊勢国の住人の伊藤の武士たちが、都へお入りになれるならば、お供申そうと、三百騎以上でお待ち申してございませ」と申し上げたので、敵の悪源太ではなくて、よい味方がございますようですな。行けものども」と、人々はみな気色を取り戻して、我先がちに進むうちに、和泉国大鳥宮に到着された。重盛が秘蔵される飛鹿毛という馬に、白い鞍を置いて神馬として贈られたので、清盛ゆゑ 詠まれた）一首の歌がある。

かひこそよかへりはてなばとびかけり育みたてよ大鳥の神

（我々を救つてくれた甲斐として、帰り着いたならば飛んで空を駆けてしまつこの飛鹿毛をさしあげますよ、しっかりと育てて下さい、大鳥宮の神よ）

「第十章 光頼卿参内のこと、並びに許由のこと」

内裏では、同十九日に、公卿僉議が催された。勸修寺左衛門督光頼卿はこの頃は信頼卿の振る舞いは過分であると、不参でいらしたが、参内してお聞きしようと、とくに鮮やかな束帯を用意して、蒔絵の細太刀を落着いた感じで帯（は）かれ、乳母子の桂右馬允範能に、素肌お腹巻を着けさせて、雑色の装束で出発させ、何かあつた場合には人の手で首をとらせるな、お前が手にかけて、光頼の首を急いでとつてくれ」と、自身の近くにおき、そのほか見目形のよい雑色を四、五人引き連れて、大規模な軍陣を張つて、ところどころの門をかたく守護しているのもものともせず、先払いの声も高らかにいらして入りなかつたので、武士たちも大いに恐れ申して、弓を控え矢を隠して通し申す。

紫宸殿の後ろを経て、殿上をめぐってご覧になると、信頼卿が上座に座っていて、その座の（本来の）上位の貴族たちはみな下座についていらつしやる。光頼卿は、「これは不思議なことだなあ。他人がどう振舞おうが、あいつは右衛門督で、自分は左衛門督なのだから、下座にはつくまいよ」と思われたので、左大弁宰相長方卿が、末座の宰相でいらつしやるのに、「今日のご座席は、ひどくだらしく見えますなあ」と挨拶して、しつしつと歩みより、信頼卿の上座にむんずとおつきになる。光頼卿は信頼にとつては母方の伯父であるうえに、力も強い剛胆な人であるので、とくに恐れて見られていた。（信頼は）右の袖の上に座られて、伏目になって気色を失われたので、着座している諸公卿たちは、なんと驚いたことだとご覧になると、光頼卿は下襲しもがさねの尻を直し、衣紋をとりつくり、笏を取り直して改まった顔で、「今日は衛門府の督が上座すると見えますねえ。お呼びになつたのに参内しないものを、死罪にするとかお聞きしまして、参内しましたのです。が、そもそも何を議定なさるのでしようか」と尋ねられたけれども、信頼は一言もおつしやらず、着座する公卿たちも一言の返事もされなかつたので、ましてや僉議の沙汰もない。しばらくして、光頼卿はすつと立つて、「参るべきではなかつたようですな」と、しつしつと歩いて退出なさつた。（内裏の）庭に満ち溢れた武士たちは、これを見て、「ああこの殿は豪胆な人だなあ。去る十日から、多くの人が出仕されたけれども、右衛門督殿の上座につく方は、一人もいらつしやらなかつたのに、なさつてしまつたなあ。門をお入りになつてから、少しも臆した様子も見えない。ああこの人を大将に合戦をしたらば、どれほど頼もしいだろうに」と申したので、隣の者が「むかし頼光、頼信といった、源氏の名将がいらつしやつた。その頼光をひつくり返して、光頼とお名乗りになつているのだから、これもまた剛の人でいらつしやるのだろうよ」といふので、また隣から、「どうしてその頼信をひつくり返した信頼と名づけられた右衛門督殿は、あれほど臆病でいらつしやるんだらうなあ」といふので、「壁に耳あり、天に口ありというぞ。恐ろしいことだ、聞くまいよ」と言いながら、みなこつそりと笑つた。

光頼卿はこのように振舞われたが、急いで退出されず、殿上の小部の前や、見参の坂を、高らかに踏み鳴らしてお立ちになつて、荒海の障子の北萩の戸のあたりに、弟の別当惟方がいらつしやつたのを招かれて、おつしやるには、「公卿僉議が催されるので、参内したけれども、議定することもない。実際、光頼も死罪にされる口なのだろう。（死罪にされるといふ人を）伝え聞くところでは、その人らはみな当代の有職故実に通じた、相当の人々ではないか。その中に入るといふのはなかなか名譽なことであるう。それはそうと先日右衛門督の車のしりに乗つて、少納言入道の首実験のために、神楽岡へ向かわれたのはどうしたことか。もつてのほかのやつてはならぬい振る舞いだぞ。近衛大将や、檢非違使別当は、他とは違つ重職だ。その職にいながら、人の車のしりにお乗りになること、先例も聞いたことがないし、行つた場所も大いなる恥辱だ。そのうえ首実験はとても穩便なことではない」とおつしやるので、別当は「それは主上のご命令でしたので」と赤面なさつた。

光頼卿は重ねて、「これはどうしたことか勅命であるからといつて、どうして存する旨があると一議申し上げないのか。私たの先祖勸修寺内大臣藤原高藤（二条右大臣藤原定方）らが延喜の聖帝にお仕えして以来、天皇もすでに十九代、臣下もまた十一代、受け継いできたのは皆徳治である。一度も悪事には従わない。当家は大了な英雄家ではないけれども、ひとえに道に従つた臣下と共に、讒佞の仲間には入らなかつたために、昔から今にいたるまで、人に後ろ指をさされるようなこともなかつたのに、あなたをはじめて暴悪の臣にかたられられて、累代の美名を失つてしまふのは、口惜しいことだ。大式清盛は、熊野参詣を遂げないで、切部の宿から馳せ上るといふ話だが、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人たちが待ちうけて馳せ加わり、大勢になるぞつた。信頼卿がかたつた武士たちは、どうにもなるまい。平家の軍勢が大勢押し寄せて攻めるには、時刻をはかるだろう。もしまた火など放つてしまえば、主上もどうして安穩にお移りすることができらるうか。（この京が）灰燼の地となつてしまふだけでも、帝室のお嘆きの種となるだろう。それがそのうえ、君臣ともに万一のことがあつたらば、天下の椿事、王道の滅亡というのは、この時にあるだろう。右衛門督は、あなたと大事小事を相談し申すと聞く。用意して隙をうかがい、はかりごとをめぐらして、（天皇と院の）尊いお体に差し障りがないようにお考えになるべきだ。それで主上はどちらにいらつしやるのか」と尋ねられると、惟方は「黒戸の御所に」。上皇は「と尋ねると」「一本御書所に」。内侍所

は「温明殿に」。剣璽はどくに「夜の御殿に」と、左衛門督がいちいちにお尋ねになったので、別当はこのように答えられた。

また、「(内裏内の)朝食の間のほうから人の物音がして、櫛形の穴から人影が見えるのは、何者か」とおっしゃると、「そちらには右衛門督がお住まいになっていきますので、その女房たちの、人影が見えるのでしょうか」と申し上げられたので、光頼卿は最後まで聞けず、「世の中は、今はこのようになってしまったものだ。主上がいらいらっしゃるはずの朝食の間には、信頼が住まい、主君を黒戸の御所に移し申したのだ。末代ではあるものの、さすがに日や月は地に落ちられてはいないのに、天照大神や、正八幡宮は、王法をどのように守られているのだろうか。異国ではこうした例もあるというが、わが国ではまだこのような先例は聞かない。前代未聞の不思議だなあ」と、いまいましてうに憚るところもなく説得なさったので、惟方は人が聞くかも知れないと、世にもぞつとしたように立つたが、かたや(光頼卿は)悲しんで、「自分はどうした宿業で、このような世に生まれて、辛いことばかり見聞きするのだろうか。昔の(中国にいた)許由でないが、今の内裏の様子を見聞きする者は、耳も目も洗ってしまうべきでしょう」と、上衣の袖をしぼるほど泣かれた。信頼の上座につかれた時には、そうはいつても立派に見えなさったが、主君のことを悲しんでうちしおれてご退出された。

本当に中国の許由は、富貴のことを聞いてすら、心からいやだと思つため、悪いことを聞いてしまったと耳を洗った。ましてやこの光頼は、帝室の諫臣として、悪逆無道の振る舞いを見聞きなさつて、耳や目を洗つてしまふべきだと思われるのも道理である。たとえば、帝堯が天子の位にいらつしやつたこと七十年、すでに年老いて、誰に天下を譲るべきだろうかと、賢者をお探しになつたが、大臣たちはみな諂つて、「皇子が幸いにいらつしやいます。(皇子)丹朱に継がせられては」と申し上げるので、堯がおっしゃるには、「天下は一人の天下ではない。どうして太子だからといって、器でない者に継がせて人民を苦しめていいだろうか。丹朱をはじめとして九人の皇子は、一人としてその器ではない」と、あまねく賢人をお捜しになつたが、箕山の中に許由という者が、身を修行して隠遁しているとお聞きになつて、勅使を通じて、位をお譲りになるとおっしゃったが、許由は結局勅使に答えを申し上げないで、そのうえ富貴尊榮のことを聞いて、穢れたと

頼川の水で耳を洗うところに、同じ山中に住む巢父という賢人が、牛を牽いてこの川に来て、水を飲もうとしたが、耳を(許由が)洗っているのを見て理由を聞くと、そのことを語る。巢父が言うには、「賢人が世を遁れるのは廻生木のようなものだと言うそうだ。この木は、深い谷や、険しいところに立っているもので、下からも道がなく、上からも(木に至る)手段がない。だから大きな家の梁にもならず、大工がこれを測ることもない。お前も世を遁れようと思うならば、もつと深い山に籠るべきなのに、どうして牛馬の棲家に交わつて、(川の水を)普通よりも濁つてしまふのか。穢れてしまった。それならば牛にも飲ませられない」と空しく牽いて帰つたのである。

信頼卿は、小袖に赤い大口、冠に巾子紙を入れてお召しになる。ひとえに天子の振る舞いの方である。大式清盛は、まず稻荷社に参り、杉の枝をとつて、鎧の袖にさして、六波羅へと到着した。大内裏には、きつと今夜攻め寄せようと、兜の緒を締めて待ち明かす。

「第十一章 信西の子息が遠流に減刑されること」

明くる二十日、殿上で公卿僉議を行おうと、大殿(藤原忠通)、関白(近衛基実)、太政大臣師賢(藤原宗輔)、左大臣伊通公以下が、おのおの参内しなされた。これは少納言入道の子息、僧俗あわせて十二人の罪を、おのおの決定しようというためである。左大臣伊通公が減刑を主張し申したため、死罪一等を減じて遠流に処せられる。俗人は位記をとどめられ、僧となつていたもの(は)は度縁をとつて還俗させられる。まず新宰相俊憲は出雲国へ、播磨中将成憲は下野国、右中弁貞憲は隠岐国へ、美濃少将長憲は阿波国へ、信濃守惟憲は安房国へ、法眼浄憲は丹波国へ、法橋寛敏は上総国へ、大法師勝憲は安芸国へ、澄憲は信濃国へ、憲耀は陸奥国へ、覚憲は伊予国へ、明遍は越後国へと定められた。

この俊憲は、鳥羽院から春八青花ノ中ニ生ズという勅題をいただいて、清濁ヲ悲シム駒八、十年ノ風ニ嘶キ、香ル上林ノ花ヲ、鳳八肝心ノ露ニスルと書いた手跡はまた達筆で、末世にまで伝わった。(また)澄憲の説法には、龍神も感心して、甘露の雨を降らせ、明遍が菩提心を祈つた夢枕には、宝

蓮華が下つて、目覚めたらば、實際にもある。すべてこの一門に關わつて
いる人というのは、賤しい女房にいたるまで、才知が凡人を超えていた。

「第十二章 院の御所が仁和寺に移されること」

同月二十三日、また大内裏の武士たちが、六波羅から攻め寄せてくると、
騒いだがそのようなこともない。去る十日以来ずっと、日々夜々、六波羅で
は内裏から攻め寄せてくるとひしめき、大内裏では六波羅から攻め寄せる
と、武士たちが右往左往に馳せあい、源平両家の軍兵たちは、京都と白河
とを往復する。年もすでに終つてしまおうとするが、歳末年始のことを始
めめせず、ただ合戦の評定ばかりをするのである。

二十六日の夜更け、藏人右少弁 藤原成頼が、一本の御書所へ参上して、
「主君はどのようにお思いになつていらつしやいませうか。世上は今夜
も明けないうちに、乱れるようでございます。経宗、兄の、惟方が申し上
げたことはございませんか。天皇も、他所へお移りなさいました。急いで
どちらへもお移り下さいませ」と奏上なさつたので、上皇は驚かれて、仁
和寺のほうへと思うので準備せよ」と、殿上人の姿に身をやつされて、紛
れて出発なさる。

上西門の前で、北野 天満宮のほうを伏し拝みなさうて、それから馬にお
乗りになつた。供奉する公卿も殿上人も一人もいないので、車でなく馬で
お移りである。まだ夜半のことなので、夜明けの月も出ていなく、北山お
ろしの音が冴え渡つて、空がかきくもつて降る雪で、御幸の道も見分けられ
ない。木や草が風にそよぐのを聞きになつても、逆徒が追いかけてきたか
と、肝を冷やしなさる。そうしてある年、讃岐院が如意山にお逃れになつた
ことまでも、思い出された。その時には敗軍ではあるが、家弘、光弘以下がお
仕えして供奉したので、頼もしく思われた。しかし、こちらは相応な武士一
人もお供しないので、お心細さのあまり、一首このように思いつけなかつた。

なげきにはいかなる花のさくやらん身になりてこそ思ひしらるれ

(嘆きの木にはどんな花が咲くのだらうか、嘆くような身になつてこそ

思い知られるものだ。)

頼もしく話しあうような人もいないままに、ご心中にさまざまご願を
お立てになられる。世が鎮まつてから、日吉社に御幸になつたのも、その時
のご立願ということだ。どうかして仁和寺にお着きになる。このことを
おつしやると、御室は大変喜ばれて、座をしつらえてお入れして、お食事な
どをお勧めするなど、かいがいしくもてなし申した。保元に崇徳院がお入
りになつたのを、御室は、寛遍法務の坊へとお移しして、ごうまでのお心
遣いもなかつた。崇徳院は鳥羽院第一皇子、この上皇は第四皇子で、御室は
第五皇子でいらつしやるので、どちらも同じ兄上のごことではあるけれども、
これほど大切になさつて、いささかの支障もなくお移りになつた。上皇の
ご運のほどは珍しいものだなあ」と、人々はみな申したとかいふことだ。

「第十三章 主上が六波羅に行幸されること」

主上は北の陣に車を出発させて、女房の飾りをおつけになつて鬘をお召
しになる。同様に宝物もお移し申そうと、内侍所の唐櫃も、大床まで出した
が、鎌田の郎等が怪しんで、お留めして、伏見源中納言師仲卿にお問い合
わせて、まず坊門の局の坊城の宿所へお移した。中宮も主上と一緒に
お車にお乗りになる。別当惟方、新大納言経宗は、直衣に柏挟みをしてお
供し、藻壁門からお出になろうとすると、この門を金子、家忠、平山、季
重(が)門を)守っている。家忠は、何の車ですか」とお聞きすると、別
当は、上臈女房たちがお出になるのだ。惟方がいるのだぞ。別に支障もあ
るまい」とおつしやるが、金子はそれでも怪しんで、弓の筈で簾をかきあ
げて、松明をふり入れて見ると、二条院はご在位のはじめで、十七歳にお
なりになるうえ、お顔ももともと美しくいらつしやるが、この時は、華や
かな、女房の、衣をお召しになられて、まことに目も迷うほどの女房に見
えた。中宮はいらつしやるが、下々の武士に、どうして見咎められようか、
問題なくお通し申した。清盛の郎等伊藤武者景綱が、黒糸威しの腹巻の上
に、小張を着て雑色になる。館太郎貞廉は黒革の腹巻の上に、牛飼いの服
を着てお車を動かす。

上東門をそうつと抜け出すと、土御門を飛ぶようにお行きになる。左衛門佐重盛、三河守（平）頼盛、常陸守（平）経盛が三百騎以上で、土御門東洞院で待ち受け申し、お車の前後を守護して、六波羅へお入れ申した。支障なく行幸が成就したので、平家の人々が、勇躍するのは限りないほどだ。すぐに蔵人右少弁成頼を介して、「（主上は）六波羅を皇居とされた。朝敵とはなるまいと思う者は、急いで馳せ参じなさい」と触れさせられたので、大殿、関白殿、太政大臣、左大臣、内大臣以下、公卿・殿上人たちは、われもわれもと参上なさつて、内裏へと心ざして馳せ参じる武士たちも、このことを聞いて、我さきにと急いで参上したので、六波羅の門前には、馬や車が動けないほど込み合つて、晴れがましく着飾つた（公卿や殿上人たちの）下部に、鎧をまとつた武士たちが立ち混じつて、雲霞のように、河原前まで満ち満ちた。清盛はこれを見て、「家門の繁盛、弓矢取りの面目」となることだなあ」とお喜びになつた。

「第十四章 源氏勢揃いのこと」

信頼卿は（このよつな事態を）夢にも知らず、いつものように酔いに沈んでいたので、このよつな一大事である乱（を思い立つたのに酔つ払つて女房たちに、「ここを叩いてくれ、あつちをさすつてくれ」とお休みになつていたが、越後中将成親が二十七日の明け方に走つて来て、「どうしてこのよつ（な）ありさま（で）いらつしやるのか。（主上は）他所へ行かれてしまつたぞ。今は残り留まる公卿も殿上人も一人もいらつしやらない。もはやご運もここまでと思われます」とお告げになつたので、信頼は、まさかそんなことはあるまいに、経宗、惟方にかたく言い含めてあるのだから」とおつしやると、「あなた信頼している（その人たちが）凶つたと聞きますぞ」と申し上げられたので、急いで一本御書所へ参上したが、上皇もいらつしやらない。上皇がお出でになつた時、北面の武士平左衛門尉泰頼は、気骨のある者であるので、お呼びになつて「ご寢所にお置きになつたが、言われたことを間違わずに申し上げたのである。（上皇が）遙かにお逃げになられたと思われたときに、ご寢所を三度拜んで（泰頼は）出て行つた。このよつな不思議なことがないならば、泰頼程度の下身の身分のものが、どうしてご

寢所に参ることができようか」と申した。（信頼は続いて）黒戸の御所へ参上したが、主上もいらつしやらない。手を打つて走り戻り、このことを他言なさいませぬよ」と、中将（成親）の耳に囁かれるのも哀れである。そして別当（惟方）をお捜しになつてもいず、新大納言（経宗）もいらつしやらないので、こいつらに出し抜かれたと、大の男で肥つたのが、怒りに怒つて、躍り上がつて地団太を踏んだが、板敷きだけが響いて、「逃げ去つた者たちが」出てくることもない。

別当惟方はもともと信頼卿の親類で、契りも深かつたが、あの日兄の左衛門督（光頼）の諫言に、身にしみて感じ入つたので、このように主人を盗み逃がし申したのである。この人は生来からだつきが小さくいらしたので、小別当と人々は申した。（そうした彼が）そのうへ信頼卿にくみして、院主上を押し込め申す仲立ちをし、今度はまたこつそりとお逃がしする仲立ちをなさつたので、当時の人々は中小別当と言つた。大宮左大臣伊通公は、「このちゆうは、仲立ちの仲」ではなくて、忠臣の「忠」であるのだらう。光頼の諫めによつて、たちまちに誤りを改め、賢者の薫陶の余りを受けて、忠臣の振る舞いをしたのだから」とおつしやつた。

悪源太義平は賀茂に参つてしたが、道中このことを聞いて、急いで馳せ帰り、義朝に向かつて、「（主上が）行かれたのは六波羅、（上皇が）行かれたのは仁和寺とお聞きしましたがどうしますか」とお聞きしたので、「そう今このように聞いたのだが、右衛門督（信頼）のほうからなんと申つてこない。とはいえ源氏のならいとして、心変りはもつてのほかだ。籠もる軍勢を挙げよ」と、内裏の軍勢を挙げられた。大将に悪右衛門督信頼、その子息新侍従信親、信頼の実兄兵部権大輔基家、民部権少輔基通、弟の尾張少将信俊、そのほかに伏見源中納言師仲、越後中将成親、治部卿兼通、伊予前司信員、吉岐守貞知、但馬守有房、兵庫頭頼政、出雲前司光泰、光保、左馬頭義朝、嫡子鎌倉悪源太義平、次男中宮大夫進朝長、三男兵衛佐頼朝、義朝の叔父陸奥六郎義隆、義朝の弟新宮十郎義盛、従兄弟の佐渡式部大輔（大夫）重成、平賀四郎義宣、義信、郎等では鎌田兵衛政清、正清、後藤兵衛実基、佐々木源三秀義、熱田大宮司太郎は、義朝には小舅なので、自身は上洛しないが、家子郎等を派遣する。三河国の住人からは重原兵衛の

父子、相模国からは波多野次郎義通、荒次郎義澄、山内須藤（首藤）刑部丞俊通、その子の滝口俊綱、武蔵国からは長井斎藤別当実盛、岡部六弥太忠澄、猪俣小平六範綱、熊谷次郎直実、平山武者所末重（季重）、金子十郎家忠、足立右馬允遠元、上総介弘経（広常）、常陸国からは関次郎時貞、上野国からは大胡、大室、大類太郎、信濃国からは片切小八郎景重、木曾中太、弥中太、常葉井、樽、強戸太郎、甲斐国からは井澤四郎信景をはじめとして、主だった武士二百人、従う軍勢は二千騎以上と記された。

六波羅の官軍が攻め寄せるといふことなので、人々は武具を着けた。悪右衛門督信頼は、赤地の錦の直垂、紫下濃の鎧で、菊の裾金物を打つたものに、金作りの太刀を帯び、白星の兜に鍬形を打つたものを猪頸にかぶつて、紫宸殿の額の間、腰をかけておいでだ。生年二十七、大の男の容姿も優れたのが、美麗な武具をつけていらつしやるというのは、内心こそわかないもの、あつばれ大将だと見えた。馬は奥州の（藤原）基衡が奥州一の馬といつて秘蔵していたのを、院に献上したものである。肥つて逞しい黒い馬で、八寸ほどであるのに、沃懸地の金覆輪の鞍を置いて、左近の桜の木のおそばに、東向きに頭を向けて引いておいた。越後中将成親は、紺地の錦の直垂、萌黄匂の鎧で、鴛の裾金物を打つたものに、長覆輪の太刀を帯び、龍頭の兜をかぶつている。白葦毛の馬に白覆輪の鞍を置いて、信頼卿の馬の南側に、同じ向きに引いておいた。成親はこの年二十四歳で、容姿も、人に優れて見えられた。武士の大將左馬頭義朝は、赤地の錦の直垂に、黒糸威の鎧に、鍬形を打つた五枚兜の緒を締めて、怒物作りの太刀を帯び、黒羽の矢を背負い、節巻の弓を持つて、黒鶉毛の馬に黒鞍を置いて、日花門に引いておいた。年三十七、眼差しも面魂も他の人とは違つている。嫡子悪源太義平は、生年十九歳、練色の魚綾の直垂、八龍といつて、胸板に龍を八つ打つてつけた鎧を着て、高角の兜の緒を締めて、石切という太刀を帯び、石打の矢を背負い、滋籐の弓を持つて、鹿毛の馬ではやり立つのに、鏡鞍を置いて、父の馬と同じ向きに引いておいた。次男中宮大夫進朝長は十六歳、朽葉色の直垂に、澤瀉威といつて、澤瀉威にした代々伝わる鎧に、星白の兜をかぶり、薄緑という太刀を帯びて、白篋に白鳥の羽で作つた矢を背負い、所籐の弓を持つて、葦毛の馬に白覆輪の鞍を置き、兄の馬にそえて引いておいた。三男右兵衛佐頼朝は十三歳、紺の直垂に、源太が

産衣という鎧を着て、星白の兜の緒を締めて、髭切という太刀を帯び、二本さした染羽の矢を背負い、滋籐の弓を持つて、栗毛の馬に、柏と木菟を摺つた鞍を置いて、これも（兄たちと）一緒に引いておいた。

この産衣、髭切は源氏に代々伝わる武具の中で、とくに秘蔵の重宝である。八幡殿（義家）の幼名を源太と申した。二歳のとき、院に参上せよ（義家を）見てみたい」と仰せを受けられて、わざわざ鎧を緘し、袖に置いてご覧に入れた。それから（この鎧は）源太の産衣と名づけられた。胸板には天照大神、正八幡大菩薩を鑄つて、左右の袖には、藤の花が咲きかかっているところを緘しているのである。そして髭切と申すのは、八幡殿が（安倍）貞任、宗任を攻められた時に、たびたびに生け捕つた者千人の首をうつと、みな髭もともに切れたので、髭切と名づけた。奥州の住人の文寿という鍛冶の作品である。昔から嫡男たちに相伝されてきたので、悪源太にお伝えになるべきなのに、三男であつても頼朝が授かりなかつたのは、最後には源氏の大將となられるしるしである。兵衛佐は、父義朝、兄義平のほうを見回して、平家が、もう向かつていますでしょう。他人に先手をとられるより、まず六波羅へ攻め寄せましよう」と申されたのは、ご立派なことといふことだ。鳳凰は卵の中で、境を越すほどの勢いが、もうあつて、龍の子は小さいといつても、雨を降らすことができるといふのは、こういう事を申すのであろう。時は平治元（一一五九）年十二月二十七日、辰の刻ほどのことであるが、昨日の雪が消え残り、（内裏の）庭には玉を敷いたようになつておられるところに、朝日の光が映じて、武具の金物が輝きわたつて、ことに素晴らしく見えたといふ。すべてこうしたことは、天竺や震旦（のような外国）はともかくとして、日本の我が王朝においては、義朝の一代に勝ることができるような武士は、あり得るようにも見えなかつた。だといふのに頼政、光泰、光基も心変りして見えたので、義朝は討つてしまいたいと思われたのだが、大事の前の小事、敵に利益を与える発端となるので、思いとどまられた。義朝がおつしやるには、このたびの合戦に、もし負けるならば、東国へ馳せ下り（関東）八力国の家人たちを召集して、再び都へ攻め上り、平氏の一族を滅ぼすことに、何か支障はあるだろうか」と申されたので、この（変心している）人々は皆、保元に多くの弟たちを滅ぼしただけでなく、まさに父の首を刎ねた人であるから、わからないも

のだが、これが運の尽きであろうよ」と、内々に申されたが、主上が六波羅にお行きになったという後は、朝敵となつてしまつたことを悲しんで、ついに皆変心してしまつたのである。だから頼政は平家（方）に加わつてから、六波羅から新手として駆けてできたので、義朝が、名を源兵庫頭と呼ばれながら、言い甲斐もなく、伊勢平氏につきなかつたものだなあ。あなたに二心によつて、当家の弓矢（の名声）に疵がついてしまつたのが悔しいものだ」と言いかけられた返事に、累代の弓矢の芸を失うまいと、十善の君につき申すのだ。ちつとも二心ではない。あなたが信頼という日本の不覚人に同意して、誤りを改めないことのほうが、よっぽど当家の恥辱だろつよ」と申されたのである。

「第一章 待賢門のいくさのこと」

六波羅の皇居では、公卿僉議があつて、清盛をお呼びになつた。紺の直垂に、黒糸威の腹巻に、左右の籠手をつけて、折烏帽子を立てて大床にかしこまる。頭中将実国を通じて「命令を下されるには、王のすることが脆いということはないので、逆臣が滅びるのは疑いないことだ、ただたまたま（逆臣のいるのは）新造の内裏である。もし火災があるなら、朝廷や天皇家にとつて一大事になるだろう。官軍が偽つて退くふりをすれば、凶徒はきつと進み出てくるだろうか。そうしたら官軍を（内裏に）入れかえて、内裏を守護させ、火災がないように配慮しなさい」と命令が下つたので、清盛はかしこまつて、「朝敵であるうえは、逆徒の誅戮は掌中にございます。時間を経たせてはいけません。そうしますときつと狼藉が起るでしょうから。火事がないようにせよということ、難しい命令でございます。そうはいつても、（古代中国の）范蠡が呉の国を覆し、張良が項羽を滅ぼしたのも、みな智謀によつてですから、力の及ぶ限りの武略をめぐらして、皇居に何事もないように成敗申しませう」と奏上して、お立ちになつた。

主上がおいでだったので、皇居の守りに、清盛をおとどめになる。大内裏へと向かう軍勢では、大將を左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、武士たちでは筑後守家貞、子息の左衛門尉貞能、主馬判官盛国、子息の右衛門尉盛俊、与三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎経遠、同三郎経房、妹尾太郎兼安（兼康）、伊藤武者景綱、館太郎貞康（貞保）、同十郎貞景をはじめとして、都合その軍勢は三千騎以上、六波羅を出発し、加茂河を馳せ渡り、西の河原に控えた。

左衛門佐重盛は、生年二十三、今日のいくさの大將であるので、赤地の錦の直垂に、櫛匂いの鎧に、蝶の裾金物を打つたものに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥という太刀を帯び、切符の矢を背負つて、滋籐の弓を持つて、黄鶉毛の馬に、柳と桜を摺つた貝鞍を置いてお乗りになつた。重盛がおつ

しやるには、年号は平治である、都は平安京である、私たちは平氏であるのだから、三つのことが（平ということに）応じている。敵を平らげることは、何の疑いがあるか。誰がここで樊噲・張良の勇猛さを奮わないだろうか」と、三千騎を三手に分けて、近衛、中御門、大炊御門から、大宮面に駆け出して、陽明門、待賢門、郁芳門に押し寄せた。

大内裏では、三方の門を固めて、東面の陽明門、待賢門、郁芳門を開いた。承明門、建礼門の脇の小門もともに開いて、大庭には馬を多く引いた梅壺、桐壺、竹の壺、籬の壺、紫宸殿の脇の壺まで、武士たちがひしひしと並び居た。これは皆源氏の軍勢であるので、白旗が二十あまり流してあつた。大宮面には、平家の赤旗三十あまり流しさしあげて、勇み進む三千数騎が、一度に鬨の声をどつとあげたので、大内裏でも、呼応して、ひびきわたつておびたらしい。鬨の声にはつとされて、ちよつと今まで立派に見えていた信頼卿は、顔色が変わつて草の葉のようで、（紫宸殿の）南面中央の階を降りられたが、膝が震えて折られぬ。ほかの人と同じように馬に乗ろうと、（馬を）引き寄せさせたけれども、肥りきつた大の男が、大鎧を着ている（うえに）、馬は大きいものである、（なかなか）乗りかねるうえに、（馬は）主人の心にも似ないで、逸りきつた逸物であるから、さつと出てゆこうとしたのを、舍人七、八人が寄り合つて馬を抱え込んだ。放てば天にも飛んでいってしまうだろう。（古代中国の）穆王の八匹の天馬のような馬も、こんなだろうかと思われるほどで、乗りあぐねていらつしやるどころに、武士が二人すつと寄つてきて、「早くお乗りください」といつて押し上げた。あまりに押し（すぎ）たのだろうか、左手のほうへ乗り越して、伏せるようにどつと落ちる。急いで助け起こしてみると、顔に砂が一面について、鼻血が流れて見苦しかった。義朝はこの有様を見て、日頃は大將と遠慮なさつていたが、はたと睨んで、「あの信頼という不覚人は、臆したな」といつて、日花門を出て、待賢門に向かわれたので、信頼も鼻血を押しぬぐつて、どうにかして馬にかき寄せられて、待賢門に向かわれたが、役に立つようにも見えなかつた。

左衛門佐重盛は、五百騎を大宮面に残し置いて、五百騎で押し寄せて、呼ばわりなさるには、「この門の大將は、信頼卿と見えるのは間違いか。こう申すのは桓武天皇の末裔、太宰大貳清盛の嫡子、左衛門佐重盛、生年二十

「三」と名乗りかけたので、信頼は返事もできずに、それ防げ、武士たちよ」と引き退く。大将がお引きになるのに、防ぐ武士は一人もいない。我先にと逃げたので、重盛はますます勇んで、大庭の棕の木の下まで攻め入った。義朝はこれを見て、「悪源太（義平）はいないか、信頼という大臆病者が、待賢門をもつ破られてしまったぞ。あの敵を追い出せ」とおっしゃったので、「承知いたしました」と、義平は「駆け出した。続く武士には鎌田兵衛（政家）、後藤兵衛（実基）、佐々木源三（秀義）、三浦荒次郎（義澄）、山内（須藤（首藤）刑部（丞俊通）、長井斎藤別当（実盛）、岡部六弥太（忠澄）、猪俣小平六（範綱）、熊谷次郎（直実）、波多野次郎（延景）、平山武者所（季重）、金子十郎（家忠）、足立右馬允（遠元）、上総介八郎（広常）、関次郎（時員）、片切小八郎大夫（景重）、以上十七騎が、轡を並べて馳せ向かい、大音声をあげて、この手の大将は誰か、名乗りを聞いてやろう。こう申すのは清和天皇の九代の後胤で、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉悪源太義平と申す者だ。生年十五の年に、武蔵国大蔵のいくさの大将として、叔父の太刀帯先生義賢を討つてから以来、たびたびの合戦で一度も不覚の汚名を受けず、年を重ねて十九歳、見参する」と、五百騎のまんなか割つて入り、西から東へと追いまくり、北から南へと追いまわし、たてざま横ざま十文字に、敵をさつと蹴散らして、木つ端武者どもに目をくれるな。大将を組んで討て。櫓匂いの鎧に、蝶の裾金物を打って、黄月毛の馬に乗っているのが重盛だ。押し並べて組んで向かい、生け捕りにしろ」と下知するので、大将と組ませまいと、ふせぐ平家の武士たちは、与三左衛門（景安）、新藤左衛門（家泰）をはじめとして、百騎ほどが中に隔てるようにした。悪源太（義平）をはじめとして、十七騎の武士たちは、大将を目指して、大庭の棕の木を中にして、左近の桜、右近の橘を七、八度ほども追いまわして、組もう組もうと、平家の軍勢を「揉んだ。十七騎に駆けたてられて、五百騎はかなわないと思ったのだろうか、大宮面へとさつと引く。大将左衛門佐（重盛）は弓を杖がわりにしてもたれて、馬の息をつかせていらつしやるところに、筑後守（家貞）がつつと参つて、ご先祖の平將軍がふたたび生まれかわりなさつた君のようだ」と、向こうざまに誉め申したので、もう一度かけていって、家貞に見せようと思われたのだろうか。前の五百騎をとどめ置いて、新手の五百騎を引き連れて、また大庭の棕の木のところ

まで攻め寄せた。

また悪源太（義平）が駆け向かい、見回して言った、「今向かつてきたのは、みな新手の武士だ。ただ大将はもとの大将重盛だ。先ほどは討ち洩らしたが、今度は討ち洩らすまい。押し並べて組んで捕らえよ、武士たちよ」と下知すると、勇みに勇んだ十七騎が、我先にと進んだので、今度は難波次郎（経遠）、同三郎（経房）、妹尾太郎（兼康）、伊藤武者（景綱）をはじめとして、百騎あまりが中で邪魔をしたのに、ものともせず、悪源太（義平）は弓を小脇にかき挟んで、鎧をふんばつてつと立ちあがり、左右の手をあげて、幸いに義平は源氏の嫡男である。あなたは平家の嫡男だ。敵として何の不足があるう。寄つてこい一騎打ちだ」と言いながら、さきのように、大庭の棕の木のもとを追いまわして、五、六度ほど（敵勢を）揉んだ。重盛は一騎打ちできそうにもないと思われたのか、また大宮面に引いて出た。悪源太（義平）が二度までも敵を追いまくり、弓にもたれて馬に息をつがせていると、義朝がこれを見て、須藤滝口（俊綱）に、「おまえがしつかり防がないから、敵はたびたび駆け入ってくるのだから。そらさつさと追い出してしまえ」と伝えさせたので、俊綱が馳せてこのことを言つと、「承りました。進めものども」と、先ほどと変わらない十七騎で、お宮面に駆け出て、敵五百騎の中に、わき目もふらずに割つて入る。そびえ立つ（ような）軍勢だったので、（平家勢は）馬の足を立てかねて、大宮を下つて、二条を東へと引き退いたので、我が子ながら義平は、よく駆けたものだなあ。ああ、よくほんとうに駆けた」と誉められた。

大将重盛、与三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主従三騎は、軍勢から（孤立して、二条を東に引き退いたので、悪源太（義平）は鎌田にきつと目をあわせて、ここに落ちて行くのは大将のようだ。返せ返せ」と追いかけた。すでに堀河で追い詰めたが、左手のほうに材木が多くみちみちているのに、悪源太（義平）の馬はまだうまく馴れていない馬で、材木に驚いたのか、右手のほうへと駆け出して、小膝をおつてどうつと伏せた。鎌田兵衛は逃すまいと、十三束の矢を取つてつがえ、よく引いてひょうつと射る。重盛の射向けの袖に、はつと当たつてはねかえる。すぐに二の矢を射たので、押付にちよんと当たつて、（矢の）籠が砕けて跳ね返つた。悪源太（義平）は「これが有名な唐皮という鎧なんだろう。馬を射て落馬したところを討て、

と命令されたので、またよく引いて追いかげずに、筈が隠れるくらいに射込んだ。馬は屏風をひっくり返したように倒れたので、(重盛は)材木の上にはね落とされて、兜も落ちておおわらわになられる。鎌田は堀河を馳せ渡つて、重盛に組もつと落ち合つた。重盛は(鎌田に)近づかれてはかなわないうらうと思つたのだから、弓の筈で鎌田の兜の鉢をちようと突く。突かれて揺らぐあいだに、兜をとつて着けて、緒を強く締められた。与三左衛門が駆け寄つて、(鎌田の)邪魔をして申すには、漢の紀信は高祖の命にかわつて、ケイ(螢の虫の部分に水)陽の囲みを出し、ついに天下を保たせた。主が辱められるときに、臣は死ぬというのではないか。景安がここにいる、近く寄つて一騎打ちしろ」といいながら、鎌田兵衛と組んで、取つておさえたところに、悪源太(義平)が馬を引き起こして、これも堀河を馳せ渡つて、重盛に組もつ飛びかかつていたが、鎌田を助けようか、大將を討とうかと思案したが、大將はまたも攻め寄せればいいが、(鎌田)政家を討たれてはかなわなうと思つて、与三左衛門に落ち合つて、刀三ふりで首をとる。重盛は頼みにした景安を討たれて、命があつても何にならうと、さあ悪源太(義平)と一騎打ちしようとなさつていたのを、新藤左衛門が馳せ来て、家泰がなくなりましたのに、大將のお命を捨ててよいものでしょうか。お逃げください」と、自分の馬を引き向けて、間に入つて悪源太(義平)とむんずと組み合う。政家は重盛と組もつとしたが、主人が討たれてはかなわなうと思つたので、新藤左衛門に落ち重なつて取り押さえて首を斬る。このあいだに重盛は虎口を逃れて、六波羅まで落ち延びた。二人の武士がいなかつたならば、助かるのも難かつた命である。十二月二十七日の巳の刻ほどであるが、村雨がさつと降つて、風が激しく吹いた。武器もみな凍つて滑つた。鎌田の鞍の前輪にも、氷柱ができたので乗りかねる。悪源太(義平)はこれをご覧になつて、手がかりを作つて乗るんだ」とおつしやつたので、武器抜いて、つぶつぶと手がかり)となるような具合に鞍)を切つて乗つた。鞍に手がかりをつけることは、これから始まつた。

三河守頼盛は、郁芳門へ押し寄せて、この陣の大將は誰か。名乗られよ」とおつしやつたので、こちらの大將は、清和天皇九代の後胤、左馬頭源朝臣義朝」と名乗つて、悪源太(義平)は二度も敵を追い出したというぞ。進め若者よ」とおつしやつたので、中宮大夫進(朝長)、右兵衛佐(頼朝)、新宮十郎(義盛)、平賀四郎(義信)、佐渡式部大輔(大夫)重成をはじめとして、我も我もと駆けて行つた。右兵衛佐頼朝は、生年十三」と名乗つて、敵二騎を射落とす、一騎に傷を負わせて、とくに進んで駆けていかれた。左馬頭がおつしやるには、なんといつても、若武者たちがいくさをするのはまばらに見えるぞ。義朝が駆けていつてみせよう」と、真つ先に進まれたので、一人当千の武士たちは、(義朝を)囲んで戦つた。頼盛はしばらくは支えられたが、門から外に追い出される。義朝が続いて攻めたので、大宮面に引いてしまつた。平家が馬の息をついで駆け入ると、源氏は大宮面に引き籠もり、(今度は)源氏が馬の足を休めて駆け出ると、平家は大宮面に引き退く。平家は赤旗赤標、あかじるし)、日に映じて輝いた。源氏は大旗腰小旗、みなおしなべて白かつたが、激しい風に吹き乱されて、勇み進む様子は、ほんとうにぞつとするように思われるものだ。源平の武士たちは、互いに命を惜しまないので、目の当たりは(仲間が)討たれても顧みず、主人より先に進もうと、ここを大事と戦つた。

悪源太(義平)は、左衛門佐(重盛)を討ち洩らして、鎌田に向かつておつしやるには、郁芳門のいくさはどうなつていよう。さあ(左馬)頭殿(こうのとの)義朝)の先駆け申そう」と、一緒に駆けてきて、また最前線に進まれた。ここで鎌田の下人に、八町次郎という大力の持ち主で勇敢な者で、走りも早く腕も立つものがいた。(かつて)馬で従うべきだが、かえつて走つたほうがいいだろう、手柄を立てるよ」と(鎌田が)言つたので、一年も腹巻に小具足をつけて、真つ先に進んでいたが、敵の馬武者が遙かに先行して落馬したので、八町のうちに追い詰めて引き摺り下ろして首を取つたので、そこから八町次郎といった。そんな者なのでこの者は、三河守(頼盛)が有名な早駆けする名馬に、両方鐙をあわせて(全力で)駆けられたのに、少しも劣らず追いついて、兜のてっぺんに熊手をひっかけようと、続いて走つたので、頼盛も熊手に引つ掛けれられないように(兜を傾け傾け、あしらつたので、五、六度はかけたり外したりしたのだが、ついに)八町次郎が頼盛の兜の)てっぺんにひっかけて、えいやつと引いたので、三河守(頼盛)はもう引きずり落とされてしまひそうに見えたのだが、帯びていた太刀を引き抜いてぴしゃりと斬る。熊手の柄を手元2尺ほど残して、つと切つて落としたので、八町次郎はのきぞりざまに倒れ

て転んだ。京都の若者たちはこれをみて、「いやはや太刀よ、びっくりしたものだなあ。三河殿もよく斬ったものだ。八町次郎もよくひっかけたものだ」と感じ入った。頼盛は兜に熊手をひっかけながら、取り捨てもせず、後ろも振り返らないで、三条を東に、高倉を下つて、五条を東に、六波羅までひっかけたまま落ち延びられた。かえって優雅に見えたものだ。名高い抜丸であつたので、よく切れたのも道理である。

この太刀を抜丸というわけは、故刑部卿忠盛が、池殿で昼寝していらつしやつたときに、池から大蛇があがつてきて忠盛を飲み込もうとする。この太刀が枕の上に立っていたが、自らするりと抜けて、蛇にかかつていつたので、蛇は恐れて池に戻つた。太刀も鞘に帰つたので、蛇はまた出てきて（忠盛を）飲み込もうとする。太刀がまた抜け出て大蛇を追つて、池の水際に立つた。忠盛はこれをご覧になって、抜丸と名づけられたという。この（池殿の）腹の愛子であつたので、頼盛がこれを相伝しなされたので、清盛と不仲になつたとかいふことだ。伯耆国大原の眞守（さねもり）の作だとか云々。

三河守（頼盛）を逃そうと防ぎ戦つ侍には、大監物、少監物（成重）、藤左衛門尉助綱、兵藤内の子の、藤内太郎家継をはじめとして、われもわれもと戦つた。兵藤内家俊は、もともと大臆病者の評判な者であつたが、どうしようもなく大勢の中に蹴立てにれて、心ならず駆けて行つたが、馬を射られて幸いと思つたのか、小屋の中に逃げ込んでしまつた。その子の家継は、父には似ない勇猛な者で、散々に戦い、敵を沢山討ち取つて退いたが、父の馬は射られて倒れているし、主人はいない、生け捕られてしまつたかと無念なので、家継が生きてどうしようかと、ただ一人とつて返し、多くの敵を切り伏せて後に、ある武士と組んで落ちて、刺し違えて死んだのを、家俊は目の当たりに小屋の中で傍観してしまつたので、無念で悲しくて、走り出ようと思つのに、戦場なので怖くて、子が討たれるの見届けなかつた。後日六波羅に出奔したのを見て、憎まない者はなかつた。

平家は勅命の定めにかかせて、みな六波羅に引き返す。源氏ははかりごととも知らなかつたのだらうか、大内裏を捨てて、追いかけて追いかけて小路で攻め戦う。そのあいだに官軍がかわりに入り、諸門をかたく防いだので、源氏は内裏に入れずに、なんとなく六波羅へ攻め寄せた。斎藤別当

（実盛）と後藤兵衛（実基）は、多くの敵を追い返して、東三条のあたりに控えていたが、武者が二騎駆けて来た。実盛がまず一騎の武者に駆けていつて、「あなたは誰か」と尋ねると、「安芸国の住人東条五郎」と名乗るところを、よく引いて射落とし、その首を取つて、「これはどうだ、後藤殿」と言うので、実基も一騎の武者に駆け寄つて、「あなたは誰か」と尋ねると、「讃岐国の住人大木戸八郎」と名乗り終わらないうちに、頸の骨を射落としてその首をとつて、「これをご覧なさい斎藤殿（左馬）頭殿（義朝）に入れられるだらうか、捨ててしまおうか」と言つたので、「今朝から乗り回している馬に、生首をつけてどうしようというのだ。さあ捨ててしまおう」と言つて、二条堀河まで駆けて来て、材木のうえに二つの首を置いて、いくさを見ていた在地の者たちに預けて、「この首をなくしてしまうなよ」と言い含めて、駆けて行つたので、無くなつてはまずいだらうと、（その在地の者は）日が暮れるまで、震えながら守つていたのである。

右衛門督信頼は、今朝待賢門を破られてからは、いくさのことは思いもよらず、隙を見て、落ち延びよう落ち延びようとなさつていた。義朝が駆け出て行つてからは、内裏で我慢していられずに、味方の軍勢の後について、おずおずと河原まで出られたが、六波羅には攻め寄せず、反対に河原を上つて逃げなされた。金王丸はこれを見て、「右衛門督殿がお逃げなされた。追いかけて申しましようか」と申し上げたので、義朝は、放つておけ。あのような不覚人がいると、かえつていくさができないものだ」と、河原を下つて攻め寄せられた。

「第二章 義朝が六波羅に攻め寄せられること」

六波羅では、五条の橋を壊させ、かいたて搔楯を垣にして待つところに、源氏がすぐさま押し寄せて、鬨の声をどつとあげたので、清盛は鬨の声にはつとして、武器をつげられたが、兜を取つて逆さまに着けられたので、侍たちは、兜がさかさまでございます」と申し上げたので、臆して見られているだらうとお思いになつたので、「主上がいらっしゃるのだから、敵の方へ向かえば、君を後ろにし申すことを怖れるので、さかさまに着けたのだ」とおっしゃつたので、重盛は、なんとおっしゃつても、臆しているように見え

ますよ。さあ行者ども」と、五百騎で駆け向かわれる。

兵庫頭頼政は、三百騎ほどで六条河原に控えていた。悪源太（義平）が鎌田をお呼びになって、「あそこにいるのは頼政か」と尋ねる。「そうでございませう」憎い振る舞いだなあ。我が負けたらば平家につこうと、時機をはかっているようだ。さあ蹴散らして捨ててしまおう」と、五十騎ほどで駆け向かい、あなたは兵庫頭（頼政）か。源氏が勝つたらば、一門だから内裏に参ろう。平家が勝つたらば、主上がいらいしやるので六波羅に参ろうと、いくさの勝負をつかっているように見えるのはどういふことですか。武士というものはみな一心があるのを恥とする。とくに源氏のならいではそうではないですか。寄つてきなさい、組んで勝負をつけましよう」と、真十文字に駆け破つて、追い立て追い立て攻め戦う。あれほど勇んでいる渡辺党、日頃は百騎にも向かい、千騎とも戦うと騒いでいたが、悪源太（義平）に手痛く駆けられ申して、馬の足をたてられなかつたので、組む武者は一騎もいなかつた。

頼政の郎等下川辺藤三郎行吉（行義）が放つた矢に、相模国の住人山内須藤（首藤）滝口俊綱の頸の骨を射られて馬から落ちそうになつていたので、父刑部丞（俊通）がこれを見て、矢一筋でそれほど弱るか」と激励したので、弓を支えに乗り直そうとしていたのを、悪源太（義平）はこれを見て、「滝口（俊綱）は急所を射られてしまつたぞ。敵に首を取られるな」と命令されたので、斎藤別当（実盛）が太刀を抜いて走り寄つた。俊綱は「あなたは味方ではないのか」と尋ねるので、実盛は、御曹司（義平）の命令で、これほどの武士を、敵に首をとらせるなど承つたので、味方がとるのだ」と言うので、俊綱も合点がいつて、「若い大将でいらつしやるので、これほどまでお心ばせがあるとも存じなかつたが、これほどの温情を深くおかけになつたものだなあ。安心して臨終できる」と、西に向かつて手を合わせ、首を伸ばして討たれた。弓矢をとる身のならいほど哀れなものはない。生まれは相模国、ついに中国の（雍州）のような（都）の外の、河原の土になつてしまつた。父刑部丞（俊通）はこれを見て、「一命を軽んじていくさをしてきたのも、滝口（俊綱）を一人前にしようとするためである。俊綱が討たれて、この命を生き長らえてどうしようというのだ。討死にしよう」と駆けていつたので、御曹司（義平）は、惜しい武士、刑部 俊

通（を）討たせるな、者ども」とおつしやつたので、味方の武士たちが駆けいつて邪魔して制したので、力なく涙とともに引き返す。それにしても頼政は、無闇と義朝の敵になろうとまでは思わなかつたけれども、悪源太（義平）に攻め立てられて、ここ幸いと、六波羅勢に加わつた。実に悪源太（義平）の若氣がいたしたことだつた。兵庫頭（頼政）は、勝負を両陣営にうかがうために、平家にころがあるといつても、源氏にとつては本當の敵ではない。一人であつても、平家勢にあつて死んだほうがいいのに。意味もない同士討ちに、惜しい武士たちを討たれたのは無念なことだ」と人々は申したとか。

異国でもそうした例がある。漢の高祖と楚の項羽と、国を争つこと八九年、戦いに及んだこと七十二度、毎回項羽が勝利したといつても、政治は紊乱していたので、民衆は服しない。高祖は戦いではつねに弱かつたが、民衆を安撫する徳があつたので、人びとはこちらについた。ここに王陵というものがいる。城を築き兵を集めながら、両方の勝負を待つていたので、楚にも組みせず、漢にも敵対せず支えていた。名将であつたので、項羽がしきりに呼んだが、虞美人の行状を顧みて参らないでいるので、（項羽は）兵を派遣して攻めたが、城は堅固でちつとも落ちない。かえつて味方の軍勢を損なう。そこで楚王は大いに怒つて、はかりごとをめぐらして、彼の母を捕らえて、楯の前に縛り付けて攻め寄せたらば、王陵は孝行第一の者なので、きつと弓をひけずに、降伏するに違いない。そうしたら奴を生け捕つて首を刎ねろ」と提案されていたのを、（王陵の）母がこれを漏れ聞いて、まことに王陵は無双の孝子なので、私が楯の前に伏していたら、必ず楚に降伏するだろうと思つたので、ひそかに使者を遣わしてこのことを告げ、「天下は結局漢王に服するだろう。おまえも必ず高祖の臣となり、何があつても決して楚に降伏してはならない。だから私は、もう死なんぞ怖くはない」と、そのまま剣に伏して亡くなつてしまつた。これで、王陵はやたらと項羽に怨みを含んだから、すぐさま高祖の臣になつて、命を軽んじて亡くなつたという。

これも漢がほんとうの正敵である。高祖さえ討つてしまえば、千万の傍敵がいても、自然と降伏するだろう。ほんとうに大事の前の小事である。だから大きい行いは小さな謹厳さを顧みないというのだ。たいてい武の道は、

強いものに敵対して命を失うのも、弱いものを助けて身を滅ぼすのも、みなそういう法則なのであろう。悪源太（義平）も義をもつて和解していたならば、頼政も名将なのだから、きつと見捨てなかつたろうに。義平は自分が武略に通曉していて、討てばすぐに降参し、攻めればきつと服属すると思つていたので、人の不義をとつて我が身の仇としてしまわれた。人は和合しなければ、結局は勝てないものだ。兵書の言葉にいわく、天の時は地の利に及ばない、地の利は人の和合には及ばない」という。もつとも配慮しなければならぬことである。

「第三章 六波羅合戦のこと」

悪源太（義平）がそのまま六波羅に攻め寄せられると、一人当千の武士たちは真つ先に進んで戦つた。金子十郎家忠は、保元の合戦でも、為朝の陣に駆け込み、高間の三兄弟と組み討ちして、八郎御曹司（為朝）の矢先を逃れて名をあげたが、今度も真つ先に駆け入つて戦つた。矢もみな射尽くして、弓も引き折り、太刀すらも折れたので、折れ太刀をひつさげて、ああ太刀さえあればなあ、もう一度合戦するのにと思つて、駆け回るところに、同国の住人、足立右馬允遠元が駆けて来たので、これをご覧なさい足立殿、太刀が折れてしまいました。脇差がございましたら、恩に着ますよ」と申したので、ちょうど脇差はなかつたのだが、あなたのお願いが健気なので」と、先行している郎等の太刀を取つて、金子に与えた。家忠は大いに喜んで、また駆け入つて敵をたくさん討つた。（太刀を取られた）足立の郎等が申し上げるには、日頃から大事のお役に立つような者ではないと思いだからこそ、いくさの中で太刀を取つて、人にお与えになつたのでしよう。このたびは、最新のお供とこそ思つておりましたが、このように見限られましては、先立つより他にはごさいますまい」と、すぐに腹を切ろうと、上帯を押し切つたので、遠元は馬から飛び降りて、おまえが恨み言を言うのももつともなことだ。だが金子の願いを黙つて見過ごすわけにはゆかなかつたので、お前の太刀を取つたのだ。いくさをするのも主君のため、討死する仲間にも太刀を請われて、与えぬ者がいるだろうか。漢朝の季札も、徐君に剣を請われては、惜しまないと聞く。しばらく待て」というところに、

敵が三騎来て、足立を討とうと駆け寄つた。遠元は真つ先に進んでくる武者を、よく引いてひょうつと射る。その矢は外れずに内兜に立つて、（武者は）馬から真つ逆さまに落ちたので、残り二騎は馬を惜しんで駆け寄らなかつた。遠元はすぐに駆け寄つて、吊るしていた太刀を引き切つて押し取り、おまえが恨むところはもつともだ。ほら太刀をやるぞ」と、郎等に与え、引き連れてまた駆け込んだ。

悪源太（義平）がおつしやるには、今日六波羅に攻め寄せて、門の中まで入らないのは悔しいことだろうよ。進め者ども」と、屈強の武士五十数騎、鏝を傾けて駆け入るので、平家の武士たちは防ぎかねて、はつと引いて入つた。義平はとりあえずの望みを果たしたと喜んで、うめき叫んで駆け入りなかつた。清盛は北の台の西の妻戸の間に、いくさの命令を下していらつしやつたが、妻戸の扉に、敵の射る矢が、雨の降るように当たつたので、清盛が怒つておつしやるには、防ぐ武士に恥ある侍がないからこそ、ここまで敵が近づくのだろう。出会え出会え駆けあえ」と、紺の直垂に黒糸緘の鎧を着て、黒漆の太刀を帯びて、黒母衣の矢を背負い、塗籠籐の弓を持つて、黒い馬に黒鞍を置かせてお乗りになつた。上から下まで、落ち着いた様子でお出でになつたが、鎧を踏ん張り大声をあげて、寄せ手の大將は誰か。こう申すのは太宰大式清盛である。いざ見参するぞ」と駆け出されたので、御曹司（義平）はこれをお聞きになつて、悪源太義平ここにありうまく攻め入つたぞおう」と叫んで駆ける。平家の武士はこれを見て、筑後守（家貞）父子、主馬判官（平盛国）、菅親子、難波（経遠・経房）、妹尾（兼康）を始めとして、屈強の武士五百数騎が、（義平らの）真つ先に駆け塞がつて戦つた。源平互いに入り乱れて、ここを最新ともみ合つた。（古代中国の名兵法家）孫子が秘したところ、（名軍師として名高い）子房が伝えたところ、互いに知っている道なので、平家の大勢が、陽に開いて困もうとしても困まれず、陰に閉じて討とうとしても討てず。千変万化して、義平は三方をまくり立て、面もふらずに斬つて回つたが、源氏は今朝からの疲れ武者たち、息も継がずに攻め戦つている。平家は新手を入れ替え入れ替え、城にかかつて馬を休め、駆け出て駆け出て戦つたので、源氏はいいに負けて、門より外に引き退き、すぐに河を駆け渡つて、河原を西に引いてしまつた。

義朝はこれをご覧になって、義平が河から西に引いてしまったのは、家名の疵と思われる。今となっては何を思い残そうか。討死にしよう」とと駆けられると、鎌田が馬から飛び降りて、轡を取り押さえて申し上げるには、

「昔から『矢をとつて源平どちらも勝ち負けはないと申しますが、とくに源家を、人みな勇猛なことだと申しております。たとえて言うならば梅檀の林にいらぬ木などなく、崑崙山の土石はみなことごとく美玉であるように、源氏に属する武士まで、弓矢を取つては名を得ております。それに今朝からの合戦で、馬は苦しがり人も疲れて、武器は故障も多くなり、矢種も尽きて刀も折れ、残る軍勢も過半は負傷しております。今たとえ敵に駆け寄せたとしても、大したこともできず、つまらない者の手にかかり、遠矢に射られて討たれることは、歎いても歎ききれない悲しみです。ましてや大将のご遺体を、敵軍の馬蹄にかけられるようなことはなおのことです。しばらくはどちらにでも落ち延びなされて、山林に身を隠しても、武名だけは残しおいて、敵を不安にさせるといふのも、一計ではないでしょうか。今ここで討たれてしまいましたならば、敵はますます利を得て、諸国の源氏はみな力を落とすし尽くして、あつという間に敵に服属してしまひましよう。たとえ逃れられずに自害なさつたとしても、深く隠し申して、東国の味方が（大将が生きていると）期待するようにこそ、お計らいなさるべきでしょう。（漢朝でも）死せる孔明、生ける仲達を走らすということをお願いしますから、むざむざと敵に討ち取られてしまわれたらば、実に子孫の恥辱となることではございませう。御曹司もきつと何かお考えがあつていらつしやるでしよう。さあ落ち延びましよう」と申し上げるので、東へ行けば逢坂山、不破の関、西海に行けば、須磨、明石を通らないといけない。弓矢をとる身は、死にどこを逃すと、かえつて最期の恥もあるものだ。（やはり）ただここで討死にしよう」と進みなさるので、（鎌田）政家が重ねて申し上げるには、これは「命令とも思われませんことですなあ。死を一途に決めるのは近くて容易なことですが、謀を万代に残すのは遠く困難なことと申します。どうにもならないところで切腹なさることに、何の義がございませうや。（漢朝では）越王は会稽に下り、漢の高祖は滎陽を逃れましたが、みな謀をなして望みを遂げたものではございませうでしたか。身をまっとうして敵を滅ぼすしてこそ、良将と申します。さあさあ早くお逃げ

ください」と、お馬の口を北のほうへと押し向けたので、鎌田がとりついたのに力づいて、武士たちが沢山（馬から）降り立つて（義朝を）駆けさせまいとしたので、仕方なく河原を上つて落ち延びられた。

「第四章 義朝敗北のこと」

平家が追いかけて攻めたので、三条河原で鎌田兵衛が申して、（左馬）頭殿（こうのどの）は、当てがあつて落ち延びられるぞ。よくよく防いで矢を浴びせかけろ」と言つたので、平賀四郎義宣、義信が引き返し、散々に戦われたので、義朝はかえりみて、ああ源氏は鞭さすすらも、愚かな者はいないのだなあ。惜しい武士平賀を討たすな、義宣を討たすな」とおつしやつたので、佐々木源三（秀義）、山内（須藤刑部 丞俊通）、井澤四郎（信景）をはじめとして、我も我もと真つ先に駆けていつて立ち塞がって防いだ。佐々木源三秀義は、敵二騎を斬つて落とし、我が身も負傷したので、近江を指して落ち延びていった。（山内）須藤刑部俊通も、六条河原で滝口（俊綱）とともに討死にしようと思ひ出たのを留められども、ここで敵三騎を討つて、ついに討たれてしまった。井澤四郎信景は、二十四（簾に）さした矢で、今朝の戦いで敵十八騎を射落し、先ほどの合戦で立派な敵四騎を射殺したので、簾には二本残つていた。そのあとは刀になつて奮戦したが、痛手を負つて引き退いた。東近江に落ち延びて傷を療治し、弓の弦を切つて杖にして、山伝いに甲斐の井澤まで行つたといひ。

このように面々が戦う間に、義朝は落ち延びなされたので、鎌田をお呼びになつて、おまえに預けた姫はどうした」とお尋ねになつたので、私の娘に申しおいてお世話しております」と申し上げたところ、いくさに負けて落ちて行くときに、どれほどのことを思つたろう。かえつて殺して帰れ」とおつしやつたので、（鎌田は）鞭をあげて、六条堀河の宿所に馳せ来てみると、いくさに怖れて人ひとりもないところに、持仏堂のほうから人の物音がしたので、行つて見ると、姫君が仏前に経を読んでいらつしやるが、政家をご覧になつて、まあいくさはどうなりましたか」とお尋ねになるので、頭殿はお負けになつて、東国へと落ち延びなされていきますが、姫君のことをだけ心配なさつてございませう」と申し上げると、きつと私たちも今

に敵に探し出され、これが義朝の娘だ、などと取りざたされ、恥を見るのが心配なのでしょね。ああ高い身分のものでも低い身分のものでも、女の身ほど悲しいことはないですね。兵衛佐殿は十三歳ですが、男なのでいくさに出てお供をなさるのですの。私は十四歳になつても、女の身だからといって残しておかれ、自分の身の恥を見るだけでなく、父のご遺骸を汚すことになるでしようのが悲しいものです。兵衛（政家）よ、すぐに私を殺して、頭殿にご覧にいれなさい」とお説きになられたので、頭殿もそのようにおっしゃられました」と申し上げると、それは嬉しいことですね」と、お経を巻き納め、仏に向かつて手をあわせ、念仏をお唱えなさつたので、政家はつとと参つて、殺し申そうとするが、産屋のうちからお抱き申して養つてきた方で、今までお育て申してきたので、どうして哀れみの気持ちで起きないだろうか。涙にくれて、刀のうちどころもわからず泣いて座り込んでしまつたので、姫君は、敵が近づいてきてしまいますよ。さあ早く」と急かされたので、仕方なく三度刀を刺してお首を取り、ご遺骸を深く埋めて馳せ戻り、頭殿のご覧に入ると、ただ一目ご覧になつて、涙に咽ばれて、東山あたりにご存知の僧のところに、この首をお遣わしになつて、弔つて下さい」と頼まれて落ち延びられた。

そうしているうちに、平家の軍兵が（京中に）散開して、信頼、義朝の宿所をはじめとして、謀叛者の家々に押し寄せて、火をかけて焼き払つたので、その妻子眷属は、東西に逃げ惑い、山野に身を隠した。方々に落ち延びて行く人々は、自分の行く先もわからないが、後ろの煙をかえりみて、敵はもう近づきようだ、逃げや逃げと揉み合つた。比叡山では信頼、義朝が負けて、大原口へと落ち延びてゆくと噂だったので、西塔の法師たちがこれを聞いて、さあ落人にとどめをさそう」と、二、三百人が千束の崖に待ち構えた。義朝はこのことを聞いて、都でどうにかしていればよかつたのに、鎌田がつまらないことを申すから、ここまで来て山門大衆の手にかかつて、無駄死にするのが悔しいことだ」とおっしゃるので、斎藤別当（実盛）が申し上げるには、ここを実盛がお通し申しませう」と馬から降りて、兜を脱いで手に引っかけ、乱れ髪を顔にふりかけ、（山門大衆に）近寄つて言ったのは、右衛門督（信頼）、左馬頭（義朝）殿以下お供の人々は、みな大内裏、六波羅で討死になさつてしまつた。ここにいるのは諸国から駆り集め

られた武者が恥も知らず、妻子と会うために、本国に落ち下ろつていくるものです。討ちとどめて罪作りは何をなさろうといつのでしょ。具足をお取り上げになるのでしたらば、武具をさしあげましょ。通してくださいませ」と申したので、まことに大将たちではないのだなあ。木っ端武者どもを討ち取つても何にもならん。具足さえ脱げば通してやろ」とと僉議したので、実盛は重ねて、衆徒は大勢いらつしやいます。我々は小勢です。草摺鎧を切つて分けてもそれでも皆様には足りません。投げるので取り合つてくださいませ」と言つので、正面を固めていた若大衆たちは、それもそうだと集まる。後陣にいた老僧たちも自分も負けまいと一緒に寄つて、競い争つところに、三十二騎の武士たちが、刀を抜いて兜の鍔を傾けて、がばつと駆け入り、蹴散らして通つたので、大衆はにわかに長刀をとりなおし、逃すまいと追いかけたので、実盛はおおわらわになつて、大きなくさ用の矢をとつてつがえて、敵も敵によるぞ。義朝の郎等の、武蔵国の住人長井斎藤別当実盛だ。止めようと思つたらば寄つてくるがいい。手柄のほどを見せてくれよう」と、取つて返したので、大衆の中に弓使いは少しもない。敵わないと思つたのだらう、みな引き退いて帰つた。

義朝は八瀬の松原を過ぎられたが、後方から、やや」と声がしたので、何者だらうとご覧になると、遙かに先に逃げたと思われた信頼卿が追いついて、もしいくさに負けて東国に落ち延びるときは、信頼を連れて逃げてくれると申さなかつたか。心変りしたのか」とおっしゃるので、義朝はあまりの憎さに腹を据えかねて、日本一の不覚人め、こんな大事を思いついて、いくさすらししないで、自分の身も滅び他人まで巻き込みよるとは。どの面さげてそんなことを言えるのだ」と、持つていた鞭で、信頼の左の頬先をしたたかに殴つた。信頼は返事もなさらず、実に臆したような様子で、しきりに鞭のあとを撫でさすつていた。乳母子の式部大輔（藤原）（助吉）（資能）はこれを見て、何者の方際で督殿（こうのとの）をこのように申すか。おまえたちは心が勇猛だというのならば、どうしていくさに勝てずに、負けて東国に下るのか」と言つたので、義朝は、あの男に口を聞かせるな。討ち捨てる」とおっしゃつたので、鎌田兵衛（政家）は、どうして今そんなことをなさいますよるか、敵が追つております、お逃げください」と言つて行くところに、また横川の法師が身分の高いものも低いものも四、五百人、

信頼、義朝が落ち延びるとか聞く、討ちとどめようとして、龍下越に逆茂木を引いて、搔楯をかけて待ち構えた。

三十数騎の武士たちは、おのおの馬から飛び降りて、てんでに逆茂木をもともしないで、引き寄せ引き寄せ通つて行くところに、衆徒たちの中から矢を次々とつがえて引いて散々に射てきたので、陸奥六郎義隆が頸の骨を射られて、馬から真つ逆さまに落ちた。中宮大夫進朝長も、左腿をひどく射られて、鎧を踏むこともできないので、義朝は「大夫、朝長」は矢に当たつてしまったのだな。ずつと鎧を押さえている。敵に後ろに回られるな」とおっしゃつたので、その矢をかなぐつて捨て、そうではございません。陸奥六郎（義隆）殿のほうに痛手を負われていらつしやいます」と、何もないような様子で馬を早められた。六郎（義隆）殿が討たれなかつたので、首をとつて、義朝がおっしゃるには、弓矢取りの身のならいだ、いくさに負けて落ち延びるのは普通のことだ。それを僧侶の身で、助けよとまではいなぬが、ついに討ちとめようとして、武器を剥ごうとするのは奇妙ではないか。憎い奴らめ、後代の例となるように、一人残らず討てよ者ども」と命令されたので、三十数騎は轡を並べて、駆け入つてつつけ回し追い回し、攻めよせ詰めより斬りつけたので、山徒はあつという間に三十数人が討たれてしまったので、残る大衆もおおかた負傷して、ほうほうの体で谷へ逃げ戻り、この落人を討ちとどめようなどと、誰が言い出したのだ」とあれこれと口論しあううちに、同士討ちをはじめて、また多く死んだ。ほんとうに出家の身で、落人を討ちとどめ、武器を奪い取るうとして、僅かの落ち武者に駆けたてられて、多くの人を討たれ、さらに同士討ちをして、たくさんの方徒を失うのは、僧侶の法にも恥辱なことだ。（まして）武芸のうえでは瑕瑾である。だから神慮にも背き、神明からも見放され申したと思われる。この敵も追い散らしたので、龍下のふもとにみな下りて、馬を休めたが、義朝は、後藤兵衛実基をお呼びになつて、お前に預けておいた姫はどうだ」とおっしゃるので、私の娘によくよく申し含めてございますので、ご心配には及びません」と申し上げた。それは安心だが、おまえはこれから都へ帰洛して、姫を育てて尼にでもして、義朝の後世菩提を弔わせよ」とおっしゃつたので、まずはどこまでもお供申して、どうにかおなりになつた様子を、見届け申してから帰洛申したいのです」と申し上げた

が、思うところがある。さあ早く戻れ」とおっしゃるので、仕方なく都へ帰り、姫君をお育て申して、ここかしこに隠して、源氏の時代になつたところで、一条二位中将能保卿の北の方にし申し上げた。実基は鎌倉殿（頼朝）の時代に、世に出たとかいふことだ。

「第五章 信頼降参のこと並びに最期のこと」

そうしているうちに、信頼卿は見棄てられて、八瀬の松原から取つて返された。それまでは侍たちが五十騎ほどもいたが、この殿は人に頬を叩かれて、返事すらなさらなかつたから、侍の主人には到底なれない。将来もそれまででらつしやろうよ」と、散り散りになつて落ちて行つてしまったので、乳母子の式部大輔 藤原資能（だけになつてしまった。あまりに疲れていらつしやるように見えたので、ある谷川で馬から抱き下ろして、干し飯をあらつてさし上げたけれども、今朝の鬨こゑの聲に驚いてからは、胸がふさがつて唾すらもしつかりと飲み込めないくらいでいらつしやつたので、ましてや）食べ物などは、一口も召し上がることはできなかった。

また馬にかきあげて乗せて、どちらへお入りになりましようか」と尋ね申すと、仁和寺殿へ」とおっしゃるうちに、蓮台野に出た。ここで山法師が死んだのを、埋葬して帰る者たちに出くわしてしまった。法師たちはこれを見て、この夜中に忍んで通るのは、落人が帰つて来たのに違いあるまい。討ちとどめて武器を剥ぎ取れ」と騒いだので、式部大輔 資能（はとりあえず、我々は六波羅から落人を追つて長坂へ向かつているのですが、敵はもう落ち延びてしまひまして、帰りますところ、暗くて暗くて、味方の軍勢に遅れてしまひます」と答えたので、そういうこともあるのだらうと思つたのだらうか、もう通そうというようだったのに、法師の一人が笠じるしを見たいと思つたのだらうか、本当なのか、野伏もないのに」と、松明をふりあげて近づいたので、信頼はさきに進んでいたのだが、あわやと驚いて、落ちる間もなく馬から下りて、武器を脱ぎ捨て、鎧や直垂から小具足、太刀、刀、馬、鞍まで取り捨てて、命ばかりは助けてください」と、手を合わせられたので、式部大輔（資能）も身包み剥がれた。それからは大白衣でほうほうの体で仁和寺殿に参り、仁和寺にいらつしやる

後白河院に）昔のご寵愛の名残であるのでお助けもあるだろうかと、首を伸ばして参ったことを、申し入れられた。それだけでなく、伏見源中納言師仲卿も参り、越後中将成親も参った。

（すでに仁和寺にいらつしやつた）上皇はもとも目をかけていらつしやつた人々であつたので、傍らに隠しおかれて、まず主上に、信頼を助けてください」と、お手紙をさしあげなかつたけれども、全然返事もなかつたので、重ねて、愚老を頼みに参つた者たちなので、まげてご助命お願いいたしまし」と申し上げなされる。ご使者もまだ帰らないうちに、三河守頼盛、淡路守教盛が、二人とも大将で三百騎余りで仁和寺に押し寄せて、信頼をはじめとして、上皇を頼み申して参集した謀叛の者たち、五十人余りを捕らえて帰つた。

越後中将成親朝臣は、鳥摺の直垂の上に縄をつけて、六波羅の厩うまやの前に引き据えられていらつしやつた。すでに死罪に決まつていたのを、重盛が今回の勲功の賞に引き換えて、預りなかつたのである。この中将は、院のご寵愛深い人で、院中のことを沙汰してきたが、重盛が出仕するたびに、親切を尽くされていたためであるということだ。だから人は情けがあるべきだということではないだろうか。

信頼卿を門前に引き据えて、左衛門佐（重盛）を通じて謀叛の仔細をお尋ねになる。一言の解答にもならず、ただ、天魔の勧めなのだ」と歎かれた。自分の重罪もわからず、今度だけは、何としてもお助けくださいませ」と、頭を垂れ伏して熱心に申し上げたので、重盛は、あのような不覚人は、お助けになつたとしても、何ほどのことがございませうかと申し上げられたが、清盛は、今度の謀叛の首謀者だ。上皇が助命を請われたが、主上はお聴きなされないのだ、どうして私情が入り込めるだろうか。すでに死罪とさだまつた。早く斬つてしまえ」とおつしやつたので、左衛門佐（重盛）は、このうちはもうどうしようもないと席を立たれた。

すぐに六条河原で、すでに敷皮の上に引き据えたけれども、覚悟ができず、ああ重盛は、あれほどの慈悲者という話なのに、どうして信頼の助命をなさらないのだろうか」と、起き伏し歎いて、悶え焦がれなされるので、松浦太郎重俊が執行人であつたが、太刀の当てる場所もわからないので、押さえつけて首を掻ききつた。見苦しい有様であつた。長年院の寵臣で、諸

人の追従を受け、去る十日から内裏にいて、さまざまの曲がつたことをなかつたので、百官は龍や蛇の毒を恐れ、万民は虎や狼の害を歎いていたのだが、今日のありさまは、乞食や非人にすらもなお劣つていたと、見物した人々は申しあつた。あの、左納言右太史、朝に恩を受けて夕に死を賜ると、白居易が書いたのも、道理だなあと思われた。

ここに年齢七十ほどになる入道した、柿色の直垂に、文書袋を首にかけたのが、平足駄を履いて、鹿杖をつき、市のように込み合つた多くの人を、かきわけかきわけ、信頼卿の亡骸のほうへと）行つたので、右衛門賢（信頼）の長年の下人が、主人の死骸を収めようというのだろうかと見ているところに、そうではなくて、骸をはたと睨んで、おまえは」と、持つている杖で二打ち三打ち打つたので、見物の人々は、これはどうしたことが」と尋ねると、この入道が言つには、相伝の所領を無理におまえに横領され、多くの家来を失い、我が身をはじめとして子孫たちに、飢えと寒さの苦痛を味あわせたのは、お前の仕業ではないのか。このような曲がつたことが積りに積もつて、今すでに首を斬られ、入道の前で恥を晒しているのだ。魂がもしあるのなら、たしかにこの言葉を聞くがいい。大式（清盛）殿の嫡子左衛門佐（重盛）殿は、人の道になつた方と評判でいらつしやるので、この文書をご覧にいれて、本領を安堵するのを、お前は草の陰で見ているがいい。思えばなおも憎い奴め」と、また一杖打つて帰つた。

温かな野に骨を拜まれる天人は、平生からの善よしのおかげであること）を喜び、寒々しい林に屍を晒す霊鬼は、前世の悪わるの報いであること）を悲しむというのは、こういうことを申すのだろう。この老人は丹波国の在庁官人で、監物入道某という者である。無念に思つていたろうことはそれはそうであるが、あまりな振舞いだと、憎まない者はいなかつた。執行人が帰つてきたので、人々は信頼の最期のさまを尋ねられたが、哀れな中でおおかしかつたのは、いくさの日に、馬から落ちて鼻の先を突いて掻いた跡だとか、八瀬で義朝に打たれた鞭目が、左頬先にあざになつているのとか、見苦しかつた」などと面々取り沙汰したのを、大宮左大臣伊通公がお聞きになつて、一日の猿染に鼻を欠く、という世俗の言葉があるけれども、信頼の場合は一日のいくさに、鼻を欠いたなあ」とおつしやつたので、人々はみな面白がつた。

「第六章 官軍除目を行われること」

伏見源中納言師仲は、「私はかえつて、褒美をこつむるような身でございませぬ。信頼卿が内侍所を取つて、東国へ下向なさうとしていましたところを、娘の坊門局の宿所、姉小路東洞院に隠し置き申したので、朝敵に組みしなかつた証左は明白でございませぬ。ただ信頼が時々伏見に來たのも、権勢に畏れて心ならぬ交際でございませぬ。叛逆の企てについてはいまだ存じませぬ。よくよくご納得くださいませ」と弁明申し上げた。河内守(源)季実、その子の左衛門尉季盛は、逃れるところがなくて、父子ともに誅せられる。

すぐに叙位除目が行われて、大貳清盛は正三位に叙し、嫡子左衛門佐重盛)は伊予守に任じ、次男大夫判官基盛は大和守、三男宗盛は遠江守となる。清盛の弟三河守頼盛は尾張守になる。伊藤武者景綱は伊勢守に補する。上卿は花山院大納言忠雅卿、職事は藏人(藤原)朝方ということだ。

信頼卿の兄(弟)兵部権大輔基家(家頼)、兄)兵部権少輔基通(基成)、弟尾張守少将信俊(信説)、子息の新侍從信親、播磨守(源)義朝、(その子)中宮大夫進朝長、(右)兵衛佐頼朝、佐渡式部大輔重成、(但馬守)源有房、鎌田兵衛政家以下、七十三人の官職を止められる。この内二人がすぐに尋ね出されて、民部権少輔基通は陸奥国へ、尾張守少将信俊は越後国へ流された。そのほかあるいは誅せられた者も、後日にも多かつたとか。昨日まで皇室の寵愛に(権勢を)誇つて、その余禄は一門に及んでいたけれども、今日は誅戮をこつむつて、一族に愁嘆をもたらず。朝に仕えて、樂しみを春の花の前に開き、たのも束の間のことだ、誠めを受けて、歎きを秋の霜のもとに表わす。夢の富は醒めての悲しみである。一夜の月は、はやくもさまざまな煩惱が渦巻く不定の雲に隠れて、朝の笑いも、夕には涙となる。一時の(咲いた)花も、むなしく無常転変の風に散る。盛衰のこわりというのは、目の前にある。生の世界の中で、誰がこの難を逃れることが出来よう。

それにしても堀河天皇の嘉承二(一一〇七)年に、対馬守源義親が討伐されて以来、近衛院のご治世の久寿二(一一五五)年に至るまで、すでに三十数年、天下は風も穏やかで、民衆も、(中国古代の明君)唐堯、虞舜の

仁恵)にまさるとも劣らない善政による安穩)を享受し、海内は波もおさまつて、国は、(本朝の聖主)延喜)の醍醐天皇)、天曆)の村上天皇)の徳治を楽しんでいたが、保元に合戦があつて、洛中がはじめて騒いだのは、あきれてしまふことだと思つていたのに、どれほどの年月も経たないのに、またこの争乱が起こつて人が多く滅んでしまつたので、世はずに末世になつて、国が滅んでしまふような時期にでもあるのだらうかと、心ある人々は歎きあつた。同月二十九日、公卿僉議があつて、このほど大内裏で、叛徒たちが殿舎に宿して、狼藉を数多行つた。清められずに帰還あそばすのは、ふさわしからぬと、議定があつた。

「第七章 常葉の注進」

ここに左馬頭義朝の末子たちが、九条院の雑仕常葉の腹に三人いる。兄は今若といつて七つになり、まん中は若といつて五つ、末は牛若といつてこの年生れた。義朝はこの子たちのことが心配に思われたので、金丸丸を道中から返して、合戦に負けて、どこへともなく落ちて行くのだが、心は後ろを振り向いて、行く先を全然考えられない。どこにいても、落ち着き次第、迎えるつもりだ。それまでは深山にでも身を隠して、私の知らせを待つていてください」と申し遣わしたので、常葉は皆まで聞かず、(衣を)頭からかぶつて伏し沈んでいるようだ。幼い子たちは口々に、父はどこにいらつしやるのです、(左馬)頭殿は「とお尋ねになる。ややあつて常葉は泣く泣く、それではどちらへと聞きましたか」と(金丸丸に)尋ねたので、譜代の御家人たちをお頼みになつて、東国の方へとおっしゃつていました。しばしも行く先がはつきりいたしませんので、(ここままで)お暇申し」と出て行つた。

少納言入道(信西)の子たち、僧俗十二人が流罪にされた。主君のため、決して不義をなさらなかつた忠臣の子どもなので、たとえ信頼、義朝に(すでに)流されて配所にいるとしても、今は赦免があつて召し返されるべきなのに、結局流罪に処される咎とはいつたいたんだらう。納得できない」と言つと、この人たちをもとのようにお使いになれば、信頼の一味となつた時のことを、主上がお聴きになるかも知れないと恐怖して、新大

納言経宗、別当惟方の申し進めであつたのを、天下の争乱に紛れて、主上も諸臣もお考え誤っているそつだ」と心ある人々は申ししたが、虚名は立たないものであるから、どれほどもなく召し返され、経宗、惟方の謀が顕れたのだらうか、結局は左遷の憂いに沈んだそつだ。

信西の子たちはみな、仏教にもそれ以外の諸教・学問においても知識が人並み優れ、和漢の才が身に備わっていたので、配所に赴くその日までもあちらこちらに寄り合つて、歌を詠み詩を作つて、互いに名残を惜しまれた。西海に赴く人は、とても長い海路を別れて行き、東国へ下る者たちは、千里もの山川を隔てる、その心中は哀れである。中でも播磨中将成憲は、老いた母（紀伊二位）と幼い子を振り捨てて、遙か遠くの辺境に赴かれたが、せめて都の名残惜しさに、ところどころで休んで、なかなか行けないでいらしたが、粟田口のあたりで馬を止めて、

道野辺の草の青葉に駒止めて猶古郷を振り返るかな

（道のほとりの草が青く茂っているところに馬を止めて、やはり故郷京都を振り返つて見てしまうものだなあ）

こうして近江の国を過ぎて行くと、歌でも有名な、どうなる身なのだらうか」と言われる尾張国（の鳴海の塩干潟）、三河国（二村山、宮路山、高師山）、遠江国（浜名の橋を渡り、小夜の中山）、駿河国（宇津の山を見てゆくと、都で名前だけは聞いていたものをと、それらに心を慰めて、富士の高嶺を眺め、足柄山も越えてしまつて、どこが果てともわからない武蔵野や、掘兼の井も訪ねて行き、下野の国府に着いて自分が住むことになる室の八島だと見やりなされると、煙が心細く立ち昇つていて、ちよつと感涙を抑えがたく思われたので、泣く泣くこつおつしやつた。

我がためにありけるものを下野や室の八島に堪へぬ思ひは

（自分のためにあつたものが、下野よ、室の八島（の煙）に我慢できない望郷の思いを抱くのは。）

ここを夢にすら見ようとは思わなかつたけれども、今は住みかと定めて、馴れない草の庵（暮らし）は、喩えようにも全く喩えられない。

「第八章 朝が青墓に落ち延び着くこと」

そうしているうちに、左馬頭（義朝）は堅田の浦へ出て、義隆の首をご覧になる。八幡殿（義家）のお子様の名残は、この人だけいらつしやつたのに、（死に）遅れ申してしまつてはますます力なく思われるものだ」と、泣く泣く念仏を唱えて弔つて、湖に馬の太腹の部分まで浸るほど入り、この首を深く沈められた。すぐに舟を求めて渡ろうとなさるが、ちよつと波風が激しく行けそうにもなかつたので、そこから引き返し、勢多をさして落ちて行つたが、この人数が一緒では行き着けまい。道を変えて落ちるほつがよいだらう。運があれば東国で必ず参集しよう。（とりあえず）暇を取らせるぞ、者ども」とおつしやつたので、おのおの（の武士）は、どこまでもお供申し上げてこそ、どうにかなりましよう」と申ししたが、思うところがある、さあ早く早く」とおつしやつたので、仕方なく、波多野次郎義通、三浦荒次郎義澄、斎藤別当（実盛）、岡部六弥太（忠澄）、猪俣小平六（範綱）、熊谷次郎（直実）、平山武者所（季重）、足立右馬允（遠元）、金子十郎（家忠）、上総介八郎（広常）を始めとして、二十数名が暇を頂き、思い思いに国々へと下つた。義朝と一緒に落ち延びられたのは、嫡子悪源太義平、次男中宮大夫進朝長、三男右兵衛佐頼朝、佐渡式部大輔重成、平賀四郎義宣、義朝の乳母子鎌田兵衛政家、金丸丸、僅かに八騎である。

兵衛佐頼朝は、心は勇敢であるといつても、この年十三歳、武器をまとい一日中のいくさに疲れていらしたので、馬上で眠つてしまい、野路のあたりから、一行に遅れなかつた。頭殿（義朝）は篠原で、若い者たちは離れてしまつたのか」とおつしやつたので、息子たちは「おのおの、ここにございます」と答えられたが、兵衛佐（頼朝）はいらつしやつらない。義朝は、哀れなことよ、さがつてしまつたのか。もしや敵に生け捕られたのではないか」とおつしやつたので、鎌田が、捜して参りましよう」と引き返し、佐殿（頼朝）はいらつしやついますか」と叫び申ししたが、全然答える人がい

ない。頼朝はしばらくして目覚められると、前後に人影もなかった。十二月二十七日の夜更け方のことであるので、たいそう暗く、先も見えないが、馬にまかせてただ一騎、心細く落ち行かれる。森山の宿に入られると、宿の者たちは「こう」言った。今夜馬の足音がたくさん聞こえるのは、落人でもいるのではないか。さあ捕まえよう」と、人々がたくさん出てきた中に、源内兵衛真弘という者が、腹巻を取って着けて、長刀を持って走り出たが、佐殿（頼朝）を見つけ申して、落人を捕まえ申せと、六波羅よりご命令があります」と、すぐに抱き下ろそうとしたので、（頼朝は）髭切で抜き打ちにしたたかに討つたので、真弘が真つ向二つに打ち割られて、のけざまに倒れて死んだ。続いて出た男は、馬鹿なやつだなあ」と、馬の口に取り付いたところを、同様に（頼朝が）斬られたので、籠手の手覆いから先の腕を切り落とされてどいた。その後には近づく者もいなかったため、そのまま宿を馳せ過ぎて、野洲河原に出られると、政家に行き逢われた。それから連れ立って急がれたので、ほどなく頭殿（義朝）に追いつき申された。どうして今まで離れていたのか」とおっしゃったので、こうこうという理由を申し上げられると、たとえ大人でせあつても、どうやって今このようには振舞えるだろうか。よくぞやった」と感じ入りなされる。

鏡の宿も過ぎたので、不破の関は敵が固めてしまったと、小関にかかって、小野の宿から海道を右手にして落ち行かれると、雪は次第に深くなり、馬では行きかねるので、武器を着けていてはかえつてよくなかうと、皆鎧などを脱ぎ捨てられる。佐殿（頼朝）は馬上でこそ後れはなさらなかったものの、徒歩となつてはずつと離されて、ついに追いつけなくなつてしまわれた。義朝はどうにかして、美濃国青墓の宿に辿り着かれる。この宿の長者大炊の娘延寿と申すのは、頭殿（義朝）の寵愛深く、女子が一人いらした。夜叉御前といって十歳になられる。長年の御宿なので、そこにお入りになると、並々ならずもてなし申す。

義朝がここに来ておっしゃるには、義平は山道を攻めて上れ、朝長は信州に下り、甲斐、信濃の源氏たちを集めて上洛しろ。私は海道を攻め上るだろう」とあつたので、悪源太（義平）は、承りました」と、まだ知らぬ飛騨国の方へ、山の根に沿って落ち行かれたので、中宮大夫（朝長）は、信濃をさして下られたが、龍下で負傷されて、伊吹の裾の雪を押し分けて進ま

れると、傷がますます深くなつて先に進みがたくなつてしまったので、戻つて参られた。頭殿（義朝）はこのことをお聞きになつて、ああ年少であつても、頼朝ならばこつはなるまい」とおっしゃった。それならばお前はしばらく留まつている」とおっしゃったので、朝長は畏まつて、ここにございますと、きつと敵に生け捕られましよう。お手にかけて下さつて、ご安心なさつて下さい」と申し上げたので、お前は不覚な者だと思つていたが、やはり義朝の子であつたなあ。それならば念仏を申せ」と太刀を抜き、さあ首を打とうとなさると、延寿、大炊が、太刀に取り付いて、どうして目の前で、このような（悲しい目をお見せになるのです」と、泣いて説得されたので、あまりに臆していたので勇ましくさせるのだ」と、太刀をしまわれた。朝長が帳台に入られたので、女も内へと戻つた。その後、大夫（朝長）はどうしている」とおっしゃると、お待ち申しております」と、掌を合わせて念仏なさるので、胸元を三度刀で刺して首を取り、亡骸につなげて、衣類をかけて置かれる。都では江口の腹のご息女を、鎌田に命ぜられて殺され、頼朝はいなくなり、朝長をも自分の手にかけて失われたので、ひとかたならぬ悲しさに、さすがに涙も止まらない。

「第九章 義朝の野間下向のこと」

こうしてもいられないので、すぐに出立なさる。大炊は、ここでお過しになつて、ほとぼりが冷めてから（ひつそりと）東国へお下りなさいませ」と申し上げたが、ここは海道であるからまずいことになつてしまつたろう。朝長のことを見守つてやつてくれ」と、出ようとなさるところに、宿場の者たちが聞きつけて、二、三百人も押し寄せた。佐渡式部大輔（重成）がこれを見て、ここで重成が討死にして、お通し申しましよう」と、ある家に駆け込んで、馬を引き出して乗つかつて、狼藉だぞ、雑兵どもめ」と散々に蹴散らして子安の森に駆け入れ、向かう敵十数人を射殺し、左馬頭義朝が自害するぞ。自分の手につけて討ち取つたなどと主張するなよ」と、まず面の皮を剥ぎ、腹を十文字に掻き切つて、二十九歳であつたのに、ついに亡くなつた。寄せ手は、皆これが大将であると思つて帰つたので、夜に入つて（一行は青墓の）宿場を出立なさつた。

中宮大夫（朝長）が、夜明けまで出てこなかったたので、大炊が行つて見ると、亡くなつていらつしやるのに、小袖がかけて置かれていたので、見守りつてくれとは、「ご孝養申せということであつたのか」と、泣く泣く後ろの竹原の中に納め申した。

（一方義朝一行では）その後、平賀四郎（義信）にも暇をお与えになつて、軍勢を募つて攻め上りられようということをおつしやつたので、それでは、頭殿は（どちらをさして下向なさるのでしょうか）とお尋ね申したので、まず尾張の野間へ行き、長田庄司（忠致）に、馬と武具とを貰つてから通ろうと思つたので、長田は裕福な者で、立身出世を願つてゐる者だから、落人を隠し申すかどうかと申し上げたけれども、そうはいつても鎌田（政家）の舅であるのだから、何があるというのだと、おつしやるので、それならば義宣（義信）は、ご上洛の際に再会申しましよう」と別れた。

義朝は、鎌田（政家）をお呼びになつて、海道は宿場宿場で通ることが難しい。ここから海上を（通つて）内海へ着きたいと思つたのだがどうだろつ」とおつしやるので、鷲の栖の玄光（源光）と申す者は、大炊の弟です。有名な強盗で、誉有る勇猛な者でございます。頼りにしてご覧になつてはと申し上げたので、それならばと、このことをおつしやる、玄光は喜んで、「ごついでに何でもなければ、どんな頭殿（義朝）の御用を務められるでしょうか」と、小船で下るところ、府津に関所を設けて船までも搜索していたので、この船も（関所に）寄せると、「誰の船か」と誰何するので、「玄光だ」と言つて、玄光であるならば、どうして夜に通るのだ」と言つので、「今日明日だけが年の内であるから、夜も休めないのだ」と漕ぎ通る。同月二十九日には、尾張国智多郡野間の内海に到着なさる。長田庄司忠致がお引き受け申して、いろいろにもてなしたが、馬を用意せよ。急いで行きたいのだ」と（義朝が）おつしやるので、せめて（正月）三日の祝いを過ぎるから、ご出立なさつてください」と、しきりに留め申したので、仕方なく逗留なさる。

そうしてゐる間に、長田庄司（忠致）は、子息の先生景致を近寄せて、さてこの殿をお通し申したものが、ここで討ち申そうか。どう思つ」と言つと、景致が申すには、東国へご下向なさつても、まさか助力申そうとい

う人もおりませぬ。他人の手柄にされるよりは、ここで討ち申して、平家に見参に入れて、義朝の知行分でもいただければ、子孫繁盛でございますよ」と言つたので、それもその通りだ。ただ名だたる武将であるから、軍勢は小さいながらも打ち申すのは大仕事だなあ」と申したので、湯浴みをなさいますと、湯殿に騙して入れ申して、橋七五郎は、近隣に並びない剛力の持ち主ですので、組み手にしましよ。弥七兵衛、浜田三郎は手練れですから、刺し殺し申すのによいでしよ。鎌田（政家）を内にお呼びになつて、酒を無理矢理進めて、いくさの模様をお尋ねなさい。頭殿（義朝）が討たれなかつたと聞いて、走り出たらば、妻戸の陰に待ちうけて、景致が切り伏せ申しましよ。金丸と玄光法師は、よその武士たちの若い者たちの中に取り囲んで、引つ張つて、刺し殺してしまえば、何の問題がありませんしよか」と企んだので、湯殿を用意して、正月三日に、長田（庄司）（忠致）が、（義朝の）御前に参上して、都でのご合戦や、道すがらのご辛勞がございましよから、湯浴みをなさいますと申し上げたので、それもそうだと、すぐに湯殿にお入りになつたので、三人の者が隙をうかがつてゐると、金丸が刀を持って、垢すりに参つたので、まったく討つ隙がない。しばらくして、服をさしあげると言つたのに、人もいないので、金丸は腹を立てて、走り出た際に、三人の者が入れ違いに走り込んでさつと入り、橋七五郎がむんずと組み伏せ申したので、わかつたぞと取つて引き寄せ、押付けなるところを、二人の者どもが左右から駆け寄つて、脇の下を二度ずつ刀で差し申したので、心は勇猛であると申しても、鎌田は

いないか。金丸は「と、おつしやりながら、ついに亡くなられた。金丸は走り返つてこれを見て、憎い奴らめ、一人も逃さないぞ」と、三人ともに湯殿の入り口に斬り伏せた。

鎌田兵衛（政家）は忠致と向かい合つて酒を呑んでいたが、このことを聞いてすつと立つたところを、酌をしていた男が、刀を抜いて飛び掛る。政家を引き寄せて、その刀で二度刺したところに、後ろから景致が首の根元を打つて打ち落とす。鎌田はこの年三十八歳、頭殿と同年で亡くなつた。

玄光法師は、頭殿が討たれ申したと聞いて、これは鎌田（政家）の仕業であるのだらうと思つた。まず政家を討とう、長太刀を持って走り回つたが、鎌田もすでに討たれたと聞いて、それでは長田（忠致）の奴を討つて

やろうと、金王丸と二人で、わき目もふらず斬つて回り、沢山の敵を斬り伏せて、塗籠ぬりこめの入り口まで攻め入つたが、美濃、尾張の習慣として、用心が厳しくて、帳台の構えが頑丈に作つてあつたので、仕方なく、長田父子を討てないで、厩に走りこんで、馬を引き出して、飛び乗つて、止めようと思ふならば止めてみせよ」と呼ばわつたが、遠矢を少々射掛けてくる程度で、近づくと者もいなかったたので、玄光は驚の柩に留まり、金王丸は都へと上つていった。鎌田（政家）の妻はこのことを聞いて、討たれた所へ訪ねて行き、空しくなつた亡骸に抱きついて、私は女の身ではあるが、まつたく二心はないのに、夫は）どんなに恨めしくお思ひになつて居るでしょう。親子の間柄と申しても、私もそのように思いますよ。（夫との）限らない間柄には今日もはや別れてしまつた。情けない親と一緒にいると、またひどい目にあふことでしょう。同じ道に連れて行つて下さいませ」と、しばらくは泣いて座り込んでいたが、夫の刀を抜いて、胸元にあてて、うつ伏せに伏したので、貫かれて亡くなつた。忠致は、左馬頭（義朝）を討ち申したのは喜びであるが、最愛の娘を殺して、歎きに沈んだ。景致は、頭殿の首、並びに鎌田の首を取つて、亡骸を一つ穴に掘つて埋める。いかに勲功を望んだからといって、代々の主人を討ち、現在の婿を殺した、忠致の所業を憎まない者はいなかつた。

（中国唐朝の）安祿山が主君玄宗を衰えさせ、養母楊貴妃を殺し、天下を奪い取つたが、その子安慶緒に殺され、安慶緒はまた父を殺したことで、史思明に殺され、間もなく祿山の一党は絶えてしまつた。忠致も将来はどうなるだろうと、人は皆申しました。譜代の家人であつたうえ、鎌田兵衛（政家）も婿であつたので、義朝が頼られるのも道理である。情けないお考えだつたことだなあ。わからないのは他人の心である。だから、『白氏文集』に、天を推測することができ、地も推測することはできるが、ただ人だけは防ぐ事は出来ない。海底の魚も、天上の鳥も、高いが射落とすことはできるし、深い釣りが上げることができる。ただ人の心の様子に向かい合うときは、間近であつたも推し量ることはできない。陰陽神変はみな判じることができ、人の笑みは実は怒りであるという事を（はかることはできない）

それにしても、兵衛佐（頼朝）の様子はいたわしかつたものだ。十二月二十八日の晩に、父にも兄にも遅れて、雪の中をただ一人彷徨われていたが、小関のほうへ行きもしないで、小平という山寺の麓の里に迷い出られた。明け方のことであつたので、とある小屋に立ち寄りされると、男の声が出て、ああこの山にも落人が籠つて居ることだろうか。この雪ではどうやって働くことができましようか。一人であつても捕らえて、六波羅にさしあげたらば、勲賞に預からないということではまさかあるまい」と言うので、ここにはまずいだらうとお思ひになつて、足にまかせて抜ければ、浅井の北の郡にお休みになつていらつしやることを、老尼が見つつけ申して、家に連れて行つたので、老夫も同じくお世話申して、正月の間は隠しおきました。

ようやく雪も消えたので、また足にまかせてご出立なさつたが、はじめの小平のあたりをお通りになるが、人目を避ける身であつたので、道でもない谷川をたどつて行かれるところに、ある鶺鴒が見つつけ申して、存外に情があつて、人目を忍ぶことではいらつしやいますな、ありのままにおつしやつて下さい。どちらへでもお心の向くままにお送り申しませう」と申したので、ありのままに語つて、青墓に行きたいと思つたとおつしやつたので、それならば、このお姿ではできませんまい」と、女の姿に変装させ申し、お持ちになる太刀を、菅に包んで、自分が持つて、男が女を連れて居る様子で、青墓に下つた。大炊のもとに行かれると、頼朝だ」とおつしやると、延寿もひどく喜んで、夜叉御前のお部屋にお入れ申して、さまざまに世話を焼いたが、東国へ下向なさると、急いでご出立なさつたが、髭切を大炊に預け置いて行かれた。

下巻

「第一章 金王丸が尾張より馳せ上ること」

月日の流れは隙を過ぎつて走り去る馬のように追うのが難しく、喜んでも容易く移ろい、歎いてもまた留まるものでないので、驚きあきれるような年も暮れ、平治二年（一一六〇年）になった。一月朔日、年が改まつたが、内裏では元日元三の儀式も、事態がよくない、天慶の先例がある」といつて朝拜も留められた。院も仁和寺にお移りになつたので、拜礼もなかつた。こうしたところに、一月五日まだ早朝のことであるが、左馬頭（義朝）の召使う男の金王丸が、常葉のもとに来て馬から飛び降り、しばらくの間涙に沈んで、ややあつて、「この三日の明け方、尾張国野間と申すところで、長田四郎（忠致）のために討たれましたとございます」と申し上げたので、皆まで聞かず、常葉をはじめとして幼い子たちも、声々に泣き悲しまれるのはあわれなことである。その後、道中のことなども、詳しく語り申したところ、朝長がお亡くなりになつて、毛利六郎（義隆）が討たれなかつたこともお聞きになつた。陸奥六郎義隆は、相模の毛利荘を知行なさつていたので、毛利冠者とも申した。

常葉はこうしたことを聞いて、「あれほどのいくさの中からも、お前を介して、幼い者たちのことをご心配なさつて下さいましたのに、もうお亡くなりになつてしまわれた。それにしても、あのお子たちをどうすればいいのでしょうか」と伏し沈んだので、金王丸も泣く泣く申すには、「私もお供申して、どうにでもなつてしまいたかつたのですが、道中もお子様たちのことをだけ、ご心配なことだとおっしゃっていましたので、このようなことを、誰かが参上してお知らせしなければならぬと思ひまして、甲斐のない命を生き長らえて参上したのです。お子様たちも皆散り散りになつてしまわれました。鎌倉の御曹司（義平）も兵衛佐殿（頼朝）も、きつと敵に捕われてしまわれたのでしょうか。幼い（お子様たち）のはますます頼りない（ことでしょうか）。ですから菩提を、誰かが甲い申すべきですから、長年の旧恩から、私なりとも僧法師にでもなり申して、亡き跡を甲い申し

ましよう」と申し上げて、そのまま走り出ていったが、ある寺に入つて出家して、諸国七道で修行して、義朝の後世を甲い申したとかいうことは実に珍しい（忠義である）。

「第二章 長田が義朝を討ち六波羅に馳せ参ること」

同六日、院が仁和寺殿からお出になつたが、二条殿は去年焼けてしまったから、御所となるような所がないので、八条堀河の皇后宮大夫（藤原）顯長卿の宿所を、御所にしてお入りになられる。

翌七日、尾張国の住人長田四郎忠致、子息の先生景致が上洛し、前左馬頭義朝、並びに鎌田兵衛政家の首を持参して、次ぐものないゆうな賞をいただきたいということ、望み申し上げた。この者は昔の平大夫致頼の末裔で、賀茂次郎致房の子孫、平三郎行致の孫である。義朝代々の家人で、鎌田兵衛（政家）の舅である。そこで平大夫判官兼行と、五位の出納康道が、二条殿の千手堂に向かつて、二人の首を受け取つてそのまま首実検された。この日は重日であるといつて（獄門に）さらされなかつた。同九日、平大夫兼行、総（惟宗）判官信房、青侍義守、忠目範守、（三）善府生朝忠、清（原）府生季道、これらを始めとして検非違使八人が向かつて、首を受け取り、西洞院をのぼつてさらし、左の獄門の檣（おうち）の木に懸けた。どういふ者がしたのか、左馬頭（義朝）はもとは下野守であつたので、一首の歌をかきつけた。

下野は紀伊守にこそ成りけれよしとも見えぬあげづかさかな

（下野守は紀伊守ではなくて、獄門の木を守るものになつてしまつたなあ、義朝にとつてこれがよいとも見えない昇進ではあるけれども）

ある者はこの落書を見て申すには、昔将門の首を獄門にかけられていたのを、藤六左近という趣味人が見て、

将門は米かみよりぞきられたるたはら藤太がはかりことにて

(将門はこめかみから斬られてしまつた俵藤太秀郷のはかりごとによつて)

と詠んだので、しつしつとあざ笑つたのだ。

将門は桓武天皇の皇子、葛原親王から五代、上総介高望の孫、良将の子である。朱雀院のご治世の、承平五年(九三五年)二月に謀叛を起こし、伯父常陸大掾国香を討つてから、東国を従え、下総国相馬郡に都を立てて、平親王と自称したが、六年たつて天慶三年(九四〇年)二月に、藤原秀郷に討たれた首が、四月の末に京都に着き、五月三日に笑つたとかいう。義朝も名将であつたから、この首も笑つたりしたろうか。秀郷と、国香の子貞盛とが共に向かつて攻めたが、城が堅固で落とすのも難しかったので、秀郷が身をやつして狙つたが、将門は、容貌が自分と似た武士七人を伴つて、まつたく主従の間柄にないものには、さつぱり見分けがつかなかつたところ、ある時秀郷が新米を出した時に、将門を見破つて、ついにこれを討ち取つたという。それでこゝ詠んだのだらう。

同日、改元があつて永曆という。この兵乱によつてである。去年四月に保元を改めて、平治に定まつたので、平氏が繁栄して、天下を治めるといふ年号だらうか」と申したのが、果たして源氏が滅んで平家が世をとつた。その時大宮左大臣伊通公は、「この年号は感心しないものだ。平治とは、山もなく川もなく、平地である。貴賤はないのだらうか」と笑われたが、ついに皇居は武士の住処となり、主上は臣下の家にお宿りになられるといふのは不思議である。人の口ほど恐ろしいものはないものだ。

「第三章 忠致が尾州に逃げ下ること」

そうしている間に、永曆元年(一一六〇年)一月二十三日、除目が行われて、長田四郎忠致は吉岐守に、先生景致は「右」兵衛尉にされたのを、父子共に嫌がり申した。「義朝(鎌田)政家は、昔の将門、純友にも劣らない勇士です。もし万一東国に落ち下りましたらば、往古の貞任、宗任が十二年(叛乱を)保つたよりも、なお付き従う武士たちは多いでしょう。そうなつていましたらば大変な一大事になつていたところを、何事もなく誅し留めたのは抜群の軍功ではないですか。そのうえ、あの人々を

討ち申した者に、次ぐ者もないような賞を与える、とおつしやつていたではないですか。せめては彼の所領ですから、播磨国をもらいただし、左馬頭

にもされてこそ面目というものではないでしょうか。そうでなければ)私(本国ですので、美濃、尾張をいただいでこそ勸賞とも思われます」と申し上げたので、筑後守家貞が「あああいつらを、二十本の指を二十日に(分けて一本ずつ)斬り落とし、首を鋸で引き斬つてしまいたいものです、相伝の主と、真正正銘の婿を殺して、分に過ぎた望みを申すとは。余りに憎らしく思われますぞ。後代への例としてお裁きいただけないでしょうか」と申し上げたので、清盛も、本当にあいつの所行は放逸だ。私もそうは思うのだが、まだ朝敵の残党も多く、義朝の子たちもいるのに、今あいつの罪を問えば、残りの兇徒たちを誰が誅戮するだらうか。だからとりあえず形式通りに恩賞を行つたのだ。それを不足と思つても、許容してはいかんぞ」とおつしやつた。重盛も(父子を)憎まれているということの内々に伝わつてきたので、もう誅されるのではないかなどと噂がたつたのだらうか、面目を失うだけでなく、(自身の)進退すら危うくなつてきたので、急いで尾張へ逃げ下つた。その朝に、宿に狂歌を詠んで捨てていった。おちゆけば命ばかりは吉岐の守そのをはりこそきかまほしけれ

(落ち延びて行つたので、命ばかりは生き延び、どうにか吉岐守の地位だけは貰えた。とはいつても、尾張守の地位が欲しかったのだし、その後どうなるのかを知りたいものだ。)

「第四章 悪源太が誅されること」

同二十五日、鎌倉の悪源太(義平)が、近江国石山寺のあたりに忍んでいらつしやるのを、難波三郎経房の郎等が生け捕り申して、六波羅に連行してきた。去る十八日、三条烏丸にある所に身をやつしていらしたのを、平家の大軍勢がとりこめたが、打ち破つて落ち延びられたのである。その理由は悪源太(義平)は、父の教えに従つて、山道を攻め上ろうとして、飛驒

国に下られたが、軍勢が集まるのは並々ならないものであった。ところが義朝が討たれなかつたと伝わってきたので、皆心変わりして、自分ひとりになつてしまつたので、自害をしようとなさつたが、無駄に死ぬよりは、親の敵である清盛父子のうち、一人なりとも討つて、無念を晴らすと思ひ返して都に上洛し、六波羅に臨んで、機会をうかがつて行つたうちに、左馬頭（義朝）の郎等の、丹波国住人志内六郎景澄という者に行き逢ひ、お前は、長年のちぎりをどうしたのかとおっしゃるので、どうして忘れ申すでしょうか。しかしながら我が身は不肖で、見知つた者もないので、敵をだまして命を長らえようと思つて、知る者を頼つて、すぐに平家の部下となりました。お目にかかつたのが幸いです、どうなさいますのか」と言つたので、すぐさま景澄を頼んで主人とし、義平は下人となつて、太刀を帯び、武器を持つて六波羅に入り、敵に近づいて、隙をうかがつた。

景澄はいつも食事をしていたが、下人と一緒に、決して人に見せなかつたので、家主は不審に思つたのだろうか、なんとなく障子の隙間から見ると、景澄の膳を下人に据え、下人の食事を景澄が食べていたので、ああこの人は源氏の郎等（であつた）と聞いたが、間違いなく悪源太（義平）とやらを隠し置いて、六波羅を窺つていたのである。他所から注進があつては（我が身に）よくないであろうと、急いで平家にこのことを告げたので、取る物も取りあえず、十八日の酉の刻ほどに、難波次郎経遠が、三百騎余りで押し寄せ、四方を取り巻いて、鎌倉悪源太（義平）はいらうしやるか。六波羅から難波次郎経遠がお迎えに参りましたぞ」と呼ばつたので、御曹司（義平）は袴の裾を高く挟み、石切を抜きつ、源義平ここにあり寄ってくるがいい、武勇のほどを思い知らせる」と走り出て、真つ先に進んでいた武士四、五人を切り伏せて、小屋の軒に手をかけて、ひらりと上つて、家伝いにどちらともなくいなくなつたが、石山の辺りにいらつしやつたのである。

悪源太（義平）は六波羅でおつしやるには、私は敵（の隙）をうかがおつと、ある時は馬を控えて門にたたずみ、ある時は履物をさけて、縁に至つて近づこうとしたが、運が尽きたので本願を達せず、生きながら捕らえられたのは、仕方ない事だ。義平ほどの重要な敵を、しばらくも置くことはすべきではないだらう。さつさと誅されるとよからう」と、その後は物

もおつしやらない。すぐに難波三郎（経房）にお命じになつて、六条河原で誅されたのだが、敷皮の上に居直つて、ちつとも臆することなく申し上げられたには、敵であつたも、義平ほどの者を、白昼に河原で斬られるというのは遺恨となることだ。去る保元に、多くの源平の武士たちが誅されたが、昼は西山、東山のほとりて斬り、たまたま河原で斬られるのも、夜に入つてから斬られたのだ。弓矢とる身の習いは、今日は他人の身の上も、明日は己の身の上であるというものを、平家の奴らは、上の者も下の者もすべて情けなく、物も知らない者たちであることよ。去年熊野詣のときに、道中を追いかけて討とうと言つたのに、だましておびき寄せて一遍に滅ぼそうと、信頼という不覚人が言つたのに従つて、今日こんな恥辱を受けるのは無念だ。湯浅、藤代のあたりで取り囲んで討つか、安部野のほうで待ち伏せして、一人も残らず討ち取つていればよかつたのに」とおつしやると、難波三郎は、これは何と言つ最後のお言葉でしょうか」と申したので、悪源太（義平）はあざ笑つて、よくぞ言つた。実際自分のためには議論の余地もなく最後の言葉だ。やあお前は、義平の首を討つほどの者なのか。名譽なことだな、うまく斬れよ。まづ斬るならば、お前の頬に食いついてやるぞ」とおつしやるので、ばかなことをおつしやるものだなあ。どうして私が手につか申した首が、どうやってか頬に食いつきなさるうというのです」と申したので、本当にただ今食いつこうというのではないぞ。ついには必ず雷になつて、蹴り殺してやるぞ」と、特別に首を高らかにさしあげなかつたので、経房が太刀を抜いて、後ろに回ると、しつかりとやれ」と、振り返つて睨まれる眼差しは、まことに凡人とは見えなかつた。だからだらうか、ついには言に違わず雷神となつて、難波三郎（経房）を蹴り殺しなかつたのである。

「第五章 清盛出家のこと並びに滝詣」

仁安二年（一一六七年）十一月、清盛は病に冒され、年齢五十一で出家し、法名を浄海と申した。出家のためであるうか、病は次第に回復して、翌年の夏の頃に、一門の人々は、面々に（回復の）祝いごとをした。同七月七日、摂津国布引の滝を見ようと、入道（清盛）を始めとして、平氏の人々が

(京都より)お出でになつたが、難波三郎(経房)だけは夢見の悪いことがあると、お供をしなかつたので、同僚たちは、弓矢取る身が、どうして夢見だの、物忌みだの言うのか、そういう風に物怖じするようないふことがあるうか」と笑つたので、経房も本当にその通りだと思つて馳せ下り、夢(を恐れる気持ちも)醒めて参上したということを申し上げたので、かえつて面白くて、人々は滝を眺めて感じにいつていとるところで、天がにわか曇り、おびただしく神鳴りが鳴つて、人々が興冷めしたところに、難波三郎(経房)が申すには、私が恐れていたのはこのことだ。先年悪源太(義平)の最期の言葉に、ついに雷となつて蹴り殺してやるぞ」と言つて睨んだ眼差しが、いつも見えて気味が悪いのに、あの人が雷神となつたと、夢に見てしまつたのだ。ちょうど今手毬ほどのものが、辰巳の方角から飛んでくるのは、皆はご覧にはならないのか。それこそが義平の靈魂なのだ。きつと返りざまに、経房を襲うのだからと思われる。そうは言つても太刀を抜いていればどうだろうかと、言い終らないうちに、稲光が激しく、経房の上に黒雲が覆つと見えると、微塵になつて(経房は)死んでしまつた。太刀を抜いたが、鏢の根元まで戻り返つてしまつたのを、結縁のために寺造(菅の釘)の材料)に寄付した。恐ろしいなどと言ふもおろかなことである。入道は弘法大師のお書きになつたものをお守りにかけられていたが、恐ろしさの余りに、首にかけながら、しきりに打ち震えていらつしやつた。まことにお守りの功德だつたのだから、(黒雲は清盛にも)近づくように見えたが、結局空に上がつていった。悪源太(義平)は十三歳の年に鎌倉へと下り、先年十九歳で京に上り、特別な思い出もなく、生年二十にして、永暦元年(一一六〇年)一月二十五日に、ついに亡くなつてしまわれた。

「第六章 頼朝が生け捕られること」

同二月九日、義朝の三男前右兵衛佐頼朝が、尾張守(頼盛)の手のものによつて生け捕られて、六波羅に到着された。同じく次男中宮大夫進朝長の首も奉られる。それは、尾張守(頼盛)の家人の、弥平兵衛宗清が尾張から上洛したが、不破の関の向こうの、関が原というところで、育ちの良さそうな若侍が、宗清の軍勢に恐れて藪の陰に隠れたので、怪しんで探すと

ころ、隠れ場所もなく捕われなかつたが、宗清が見ると、兵衛佐殿(頼朝)であつたので、喜ぶ事は並々ならなかつた。すぐに伴つて連行し申すところ、青墓の大炊のもとに逗留した。ちよつとは聞き伝わつていたことがあつたので、何となく屋敷の後ろの庭へ出て見回すと、新しく壇を作つたところに、卒塔婆が一本立っている。そのままその下を掘らせたところ、若い人の首と亡骸が合せて埋めてあつた。これをとつて、事の仔細を尋ねると、仕方なく大炊はありのままに申し上げた。宗清は喜んで同じく持参したのであつた。そこで頼朝を、まず宗清に預け置いた。

その時、延寿から生れた姫君(夜叉御前)が、兵衛佐(頼朝)が捕らえられて、都へ上られたので、私も同じ義朝の子であるので、女子だからといつて、結局はまさか助かる事もあるまい。一人一人殺されるよりは、左殿(頼朝)と同じ道にせめてなつてしまおう」と、伏し沈んでいらつしやるのを、大炊、延寿がさまざまに慰めて(はやまるのを)おとどめ申した。その勢いもおさまつたので、大炊も延寿も安心してしまつたのだから、二月十一日の晩、夜叉御前はただ一人で青墓の宿場を出て、はるかに離れた杭瀬川に、身を投げて亡くなられた、十一歳とかいふことである。武士の子は、どうしてこう女子であつても勇敢なのだろうか、憐れみの心を起こさない者はいなかつた。母の延寿は、愛情の深かつた頭殿(義朝)にも先立たれ、その形見とも思つて心慰んでいた姫君にも死別したので、並みならぬ憂鬱に、同じ流れに身を沈めようと歎いていたのを、大炊がさまざまに慰めたので、母の心も傷つけがたく、せめての思いから尼になり、亡夫と姫君の後世を、専念して弔われたとかいふことである。

六波羅から左馬頭(義朝)の子たちが捜されたが、すでに三人出てきていた。兄二人は、すでに首を(獄門に)かけられていた。頼朝もすぐに誅されるであろう。このほかに、九条院の雑仕の、常葉の生んだ三人がいる。皆男子であるとか聞くと、問い合わせられたので、常葉はこれを聞いて、私は故頭殿(義朝)に先立たれ申してどうしようもなかつたが、この忘れ形見がいたからこそ、今日までも慰まれていたのに、もし敵に捕われたならば、片時も(この世に)生きつづけてはいられないだろう。だからといって、しつかりと逃れ隠れるような方法もない。我が身一つですら隠しがたいの、三人の子を引き連れては、誰がしばらくでも宿を貸してくれるだ

ろるか」と、泣き悲しんだが、さうばかり思いつくところもないままに、「長年お頼み申してきた観音に、歎き申し上げよう」と、二月九日の晩になって、三人の幼い子らを引き連れて、清水に参詣した。母にも知らせまいと思つたので、女の召使いの一人も連れずに、八つになる今若を先に立てて、六歳の乙若の手を引き、牛若は二つになつていたので懐に抱きながら、黄昏時に宿を出て、足にまかせてたどつてゆく、その心境が哀れである。

仏前に参つても、二人の子たちを脇に座らせ、たださめざめと泣くばかりであつた。夜もすがらの祈請にも、「私は九つの年から月ごとに参詣し、十五になるまでは、十八日ごとに三十三巻の普門品を読み申し、その年から毎月法華経三部を、十九の年からは日ごとにこの三十三体のみ仏の姿をお写し申してきました。このような志を、大慈大悲のお誓いで照らされご存知でいらつしやるのであれば、私のことはともかくも、ただ三人の子たちの弱弱しい命をお救いくださいませ」とお願いした。実に三十三身の春の花が、匂わない袖があるだろうか。十九説法の秋の月が、照らさないことがあるはずもないので、さすがに千手千眼も哀れとご覧になつていらつしやるのだから、と思われた。

次第に明け方になつてきたので、師の僧坊に入つたが、日頃は左馬頭(義朝)の最愛の妻であつたので、参詣の折々には、供の人々にいたるまで、美々しい格好であつた。今はそれに引きかえ、身をやつしてただけでなく、尽きない嘆きに泣き疲れた姿は、目も当てられないほどであつたので、師の僧はあまりの悲しさに、「長年のご恩情を、どうして忘れ申しませう。幼い方々もお疲れでしょうから、しばらくは隠れていらつしやませ」と申すと、「お気持ちは嬉しいのですが、六波羅が近いところですので、どうしてしばらくでもいることができませう。本当にお忘れにならないのですしたら、仏神のお憐れみの他には、頼りもございませぬので、観音によくよくお祈り申してくださいませ」と、また晩のうちに出たので、坊主も泣く泣く、「唐の太宗は仏像を礼拝して、栄華を一生の春の風のように開き、漢の明帝は經典を信仰して、寿命を秋の月のように延ばすと申すから、三宝のお救いは空しいものではありませんまい」と慰めた。

宇多郡を目指したので、大和大路を尋ねながら、南をさして歩いたが、馴れない旅の(身の上に降る)朝立ちの、露と争つように出てくる(自分の

涙)のせいで、袂も裾もくたびれてしまつた。二月十日のことであつたので、余寒もまだ激しく、嵐に凍る道芝の、氷に足は傷つき、血に染まる衣の裾のために、もう片方の袖もくたびれてしまつた。這うように伏見の叔母を訪ねて行つたものの、むかし源氏の大將軍の北の方などと言つていた頃は、親しく振舞つていた。今は謀叛人の妻子であるので、わずらわしいと思つたのだろうか、どこかに行つていると、けんもほろろな態度であつたが、もしかしたらとしばらくは待つていたが、待つ我慢も過ぎて立ち戻ると、日ももはや暮れてしまつた。また立ち寄るところもなかつたので、賤しい柴の戸の前になんとなく立つていたが、中から女たちが出てきて、温情を覚えて宿を貸してくれた。世に出られない身の旅寝であるから、節目がたくさん浮き出ている竹の柱に、生き長らえる甲斐もない命をもつて、一人歎いてしまふのだろうか昔の七輪と思う人はいない。しかし今夜も三輪にただ、伏見の里に夜を明かし、出ればすぐに木幡山、馬があればよいものの、徒歩であつても、あなたたちのことを思えば行くのだと、幼い子たちに語りながら、連れて行くと、この子たちは歩き疲れて倒れてしまつた。常葉は一人を抱いた上に、二人の子の手を引き、腰を抑えて苦労して行く様子は、目も当てられない。道を行く人も怪しんだので、これも敵の側の人であろうかと肝を冷やしたが、旅人も憐れに思つたので、会う人ごとに背負い抱いて助けてゆくうちに、泣く泣く大和国宇多郡龍門というところに辿り着いて、伯父を頼んで隠れ住まつた。

「第七章 頼朝が遠流に赦されること」

まだ兵衛佐(頼朝)は宗清のもとにいらつしやつたので、尾張守(頼盛)から、丹波藤三国弘という小侍を一人つけられた。もう今日明日にも誅されなさるであろうと噂だったので、宗清は、お命は助からないとは思ひにはなりませんのか」とお尋ね申したので、佐殿(頼朝)は、去る保元に多くの叔父、親類を失い、今度の合戦のために、父を討たれ、兄弟も皆亡くなつたので、僧や、法師にでもなつて、父祖の後世を弔いたいと思つたら、命は惜しい」とおつしやるので、宗清も憐れに思つて、「尾張守(頼盛)の母上は、池の禅尼と申し上げる方は、清盛にとつては継母でいらつしや

いますが、大変気にかげられていらつしやるので、あの方について申されたらば、もしかすると命は助かるかも知れません。あの尼上は若い時から慈悲深い人でいらつしやいます。そのうえ、ある日参上なさつた時に、『お前のところに頼朝がいるとか聞きますが、どういふ者です』とお尋ねになつたので、『お年のほどよりも大変大人びております。そのご様子は、早世してしまわれた』右馬助殿(平家盛)にひどく似ていらつしやいます』と申し上げると、たいそうお会いになりたそうにお思ひになつていらつしやるようでした』と申し上げたので、『それは誰が申し上げてくれるだらうか』とお尋ねになるから、『そうお思ひになるのですしたらば、かなわないうまでも私が申し上げてみましよう』と、池殿に参上し、『何者が申すのでしょうか、尼上はひじょうに慈悲深い方であらうしやるといふので、『ああ頼朝の命を請ひ受けなすつて下さいませ。父の後世を弔うたい』と頼朝が申されてはいますのが、いたわしゅうございます。そのようにお取り計らい下さいませ』と申し上げると、『そもそも頼朝に、尼が慈悲深いとは誰が知らせたのだらう。それはそれとして、故刑部卿 忠盛)の時には、多くの者を請ひ受けて赦免しましたが、今時はどうなのでしょう。それにしても右馬助(家盛)にひどく似ているというのは残念なことです。家盛さえいてくれれば、鳥になつて雲を飛び越え、魚になつて水に入り、まことに来世でも会えるのであれば、たった今死んでゆくことも思ひます。それで、頼朝はいつ斬られることになつたのです』とおつしやるので、『十三日ということだそうです』と申し上げると、『かなわないうまでも申し上げてみましよう』と、

小松殿(重盛)が、この時の勲功で伊予守になられていたのが、正月から左馬頭に転任なさつたのを呼び申して、『頼朝が尼に、命を請ひ受けて下さい、父の後世を弔いたいと申すのですが、あまりに不憫です。よいように申し上げてください。ことに家盛の幼い時に少しも違わないと聞くので、懐かしいのです。右馬助(家盛)は、あなたにとつても叔父でしょう。頼朝を請ひ受けて、家盛の形見に尼に見せてくださいな』とおつしやるので、重盛は参上して父にこのことを申し上げた。

清盛はこれを聞いて、『池(禪尼)殿のことは、故(忠盛)殿が通われた方と思ひ申すと、どのような無理無体な仰せであつても、従おうと思つたが、このことは大変な重大事である。伏見中納言(師仲)、越後中将(成

親)などのような者を、何十人助けおいても、大事はあるまい。)しかし、大方弓矢取る者の子孫は、それとは違つ上、義朝などの子どもたちは、幼くても問題があるというのに。とくに頼朝は、官加階も兄に越えたりと、たいへんなところがあるではないか。父も目をあけたからこそ、累代(の宝)の中から、取り分けて秘蔵する武具などを与えたのだらう。どうにせよ助けおくことはできないものだというのに』と、もつてのほかという様子である。

左馬頭(重盛)は戻つてきて、かないがたい願ひであることを申し上げたので、池(禪尼)殿は涙を流して、『ああ恋しい昔のことなのねえ。忠盛の時であれば、これほどに軽んじられはしなかつたでしょう。一門の源氏は皆滅んでしまいました。あの幼い者一人助けおいたところで、どれほどのことがあるというのでしょうか。前の世に頼朝に助けられたためなのでしょう。か、聞くに労しく不憫なことです。あなたもいよいよ加減だとは思ひませんが、一方では使ひとして申し上げるのですから、どうして熱心に説得して、それでもかなわずに結局亡くなつてしまふのでしょうか。右馬助(家盛)の面影に似ていると聞いてから、いつしか家盛のことに思われ、はつと胸が塞がり、湯水も喉を通らないので、自然、長くはあるまいと思われます。ああ尼の命を生かそうと思われのでしたら、兵衛佐(頼朝)を助けてください』とお嘆きになつたので、重盛も困惑なさつて、涙を抑えて、『それならば、もう一度ご決定について申し上げてみましよう。同じく尾張(守頼盛)殿も同道し申しましよう。一緒におおせのことを、詳しく語り申しましよう』と、頼盛とともに、重ねてこのことを申し上げたところ、清盛もさすがに石や木ではないのだから、考え悩まれたが、重盛は『女性があどけない心に思ひ沈んで申し上げなされることを、そのようにどうしておつしやることのできるのでしょうか。相応のご配慮をなさらなければ、お怨みも深くなられるでしょう。あの頼朝一人を誅しなすつても、尽きる筈のご果報が長久になりうるといふものでもありません。自家の運が末になれば、諸国のどの源氏が敵対しないでしょうか。また助け置いたとしても、栄華が子孫に及ぶのであれば、何の恐れがあるでしょうか』と、理を尽くして申し上げられたので、まず十三日を延期されたが、確かな返

事はしなかつた。

それで今日斬られる、明日亡くなるなどと噂になつたが、その日も延期になつたので、兵衛佐（頼朝）は、これもひとえに氏神八幡大菩薩のお助けである、いよいよ心中でお祈りの心を強くされた。こうして一日でも生き延びたので、念仏を申し、経も読んで、父の後世を弔おうと、卒塔婆を作ろうとなさつたが、人びとは、刀を（使うことを）許し申さなかつたので、丹波藤三をかたらつて、小刀と木ぎれを乞い求められたので、国弘は、「どうしたお手のすさびごとでしょうか。頭殿（義朝）を始めとして、ご兄弟も多く亡くなられたのに、お経もお読みにならないで」と申し上げられたので、兵衛佐（頼朝）は、「天下で思い悩んでいる者の中で、自分に勝る者はあるまいと思つた。去年の三月に母に先立たれ、今年の一月に父が討たれなさる。義平、朝長にも別れ申す。そこでこうした人々の菩提をも弔おうと思つて、卒塔婆であつたも作りたいたいと思つたのであつた。とりわけて故頭殿（義朝）の四十九日も今日明日のことである。四十九日も近づけば、特別な供物や、施僧の儀式はかなわれないとしても、卒塔婆をせめての志にしたいと思つたので、刀を求めたのである」とおっしゃると、国弘も憐れに思われて、弥平兵衛（宗清）も感動し申して、小さい卒塔婆を百本作つてさしあげる。自らも造立書写して、ある僧に用意させて、形式にのつとつた供養の儀式を遂げられた。池（禅尼）殿もこのようなことをお聞きになつて、いよいよいたわしくお思いになられたので、いろいろに申し上げられて、流罪に定まつた。

その時人々が申すには、大草香親王の御子であつたまよのおおきみ眉輪王は、七歳のときに、父の敵である、継父安康天皇を殺害し申し、栗屋川（厨川）次郎貞任の子の千代童子は、十二歳の年に、甲冑を身につけ、父と一緒に討死にした。頼朝はすでに十四歳だ。父が討たれたと聞いて、自害もしないで、尼に頼つて、つまらない命を延ばそうと歎くのは論外なことだ」と申すと、また別の人は、いやいや恐ろしい。義朝は不義の謀叛に組み合せて、没落する運命だというのは仕方ないことだが、つらつらことの真相を考えると、保元（の乱）には忠節抜群であつたが、恩賞は大したこともなく、大概清盛に劣つていた。だから勲功の薄いことを恨んで起こしたところの叛逆であるので、主君の政治がただしくないから起こしたものであるが、臣下として

主君を凌いだために、身を滅ぼして終つたのだ。だからといって、大きな忠節に対する勲功の余りというものは一家に留まつている。これからして氏族の中で、必ず一門を栄えさせる者があるのだ。頼朝は幼いといつても、あの父親の子であるから、こうしたことを心に秘して命を惜しむのだから、どんな名将や勇士も命あつてのことだ。だから（古代中国の）越王が会稽の恥を雪いだのも、命をまつとうしたからである。喩えて言えば異国でも、越王勾践と、呉王夫差といつて、両国の王は、互いに（相手の）国を併合しようとして争つたために、呉は越の長年の敵である。だから越王は在位十一年二月の上旬に、臣下の范蠡（はんらい）に向かつて、夫差は我が父祖の敵である。討たないで長年過し、人の嘲笑の的となつてゐる。今自分が向かつて呉を攻めようと思つた。お前は私にかわつて国を治めよ」とおっしゃると、范蠡が申し上げるには、越は十萬騎、呉は二十萬騎です、小勢は大軍勢にはかないません。また春夏は陽の時、忠臣に賞を行い、秋冬は陰の時、刑罰を行うべき時です。今は年の春の始めですから、征罰を行うべきではありません。隣国に賢人がいるのは敵国にとつては憂いとなることといひます。ましてや呉の国の臣下の伍仔胥は、深謀遠慮で人を手なづけ、はかりごとが途方もなく主君を諫めます。これが三つの（いくさをしては）いけない理由です。と諫めたので、勾践が重ねて言つたには、礼記には、父の仇とは同じ天下にはいられない。いくさの勝負は必ずしも軍勢の多少にはよらず、時の運によつて、その時にあつた計略を用いるものである。（第一の理由を言うが、それは違つ、なぜならば）これはおまえの軍略が足りないためだ。もし時機を待つて勝負を図るのであれば、天下の人は皆時機がきたことを知つて（から勝負するわけだから）、誰がいくさで勝たないことがあるだろうか（、しかし、そんなことはないだろう）。（第二の理由も違つ、）これはお前の知慮が浅いからだ。伍仔胥がいるうちは、討つことができないと言つたならば、奴と私との生死（の時期）はわからない、いつを時期とすればいいのか。（だから第三の理由も違つ、）お前の愚の三つ目だ」と言つて、ついに呉に向かつて、越王は負けて会稽山に引き籠もつたが、かないそうにもなかつたので、降伏して（呉王の）面前で縛られて、呉の姑蘇城に入つて、手かせ足かせをはめられて、獄中で苦しんでおられたが、范蠡は（このことを）聞いて心を痛め、筐（あじか）に魚を入れて、商人の真似をして、姑蘇城

に行き、一匹の魚を獄中に投げ込んだが、腹の中には一句が隠されていた。その言葉には、「昔の西伯は姜里じやうりに捕われ、重耳は翟てきに逃れたが、皆霸王となった、死を敵に許してはいけない」とあつた。勾踐はこの言葉を見てもまず命を重んじ、肝をなめて、本国に還る時に、行く道に蛙が飛び出してきたのを、下馬して拜んだ。国の人々がこれを怪しむのを知つて、范蠡が迎えに参上したが、「この君主は諷める者を賞しなざるぞ」と申ししたので、近隣の国の勇士たちも付き従つて、ついに呉王を滅ぼして国を併合した。だから俗の諺には、肝の味をなめて、会稽の恥をそそぐと言つのである。頼朝も命をまつとつしよつと思えばこそ、尼君にも頼り入道清盛にも従い、助かることが肝要であつたのだらう」と申しした。

「第八章 常葉が六波羅に参ること」

そつしているうちに、清盛は、義朝の子どもたちが、常葉腹に三人いると聞いて、しかも男子である、といつので、捜せと命令があつたので、常葉の母を呼び出して尋問したところ、左馬頭義朝殿が討たれなかつたと伝わつた日から、子どもたちを連れてどちらともなく迷い出てしまいました。どうして娘の居所を知つていましょうか」と申し上げたので、「何にせよ、その母を捕らえて尋問しろ」と、六波羅に呼び出して、いろいろに責めて尋問した。母が泣く泣く申し上げるには、私は六十を越す身です、今日明日とも知れない老いの身を惜しんで、まだ長い孫たちの命を、どうして失う事が出来るはずもないのですから、知つていられるとしても申し上げますまい。ましてや知らない行方を、どうやって申し上げることができませんようか」と繰り返したので、水責め火責めにも及ぼうといつのを、常葉は宇多郡でこのことを伝え聞いて、母がこのために酷い目にあおうといつのはどうしたことが、自分のために母が苦しみにあうといつのは悲しいことだ。仏神三宝もそこまで憎いとは思われまい。子どもたちは間違つたことをした人の子であるから、結局は亡き者にされてしまつたらう。隠してしまつた子どもたちのために、咎もない母の命を失つてしまつたこと悲しさよ」と思つたので、三人の子どもたちを引き連れて都へ上り、もとの住所に行つてみると人もいない。これはどうしたことかと尋ねると、あ

たりの人は、ある日六波羅に呼び出されなかつたが、まだ帰つていらつしやらない」と答える。

常葉はまず御所に参内して申し上げるには、女の心の浅墓さは、もしか片時でも夫婦であつてみると、この幼い人たちを引き連れて、片田舎に立ち忍んでいましたのが、自分のため、自分の行方も知らない老いた母が六波羅に呼び出されて、酷い目にあつていらつしやると聞いて、あまりに悲しくて、恥も忘れて参上したのです。早く幼い人たちとともに、六波羅に派遣なさつて、母の苦しみをやめさせて下さいませ」と申し上げたので、常葉の旧主である女院をはじめとして、ありとあらゆる人が、世の普通のものではあれば、老いた母を亡くならせたとしても、後世を弔うだけであらう。幼い子たちをどうして殺そうと思つはずもないのだが、子どもたちを失つたとしても、母を助けようと思つような孝行者の稀有なことよ。仏神もきつと憐れんでいらつしやるだらう。長年この御所に出仕しているとは、誰もが知つている」と、案内を出発させて、親子四人を美しい車で、六波羅へと遣わされた。

見慣れた宮の中も、今日が最後と思つと、涙もちつとも止まらない。名ばかりは聞いていた六波羅へと近づくと、層所に向かう羊の歩みというのは、自分の身一つに知られる。常葉が到着していたので、伊藤伊勢守景綱が取り次いで、女の心の浅墓さは、もしやしばらくでも夫婦であつたのですからと、幼い人たちを引き連れて、片田舎へと忍んでおりましたのに、行方もわからない母をお呼び出しなさつていらつしやると聞いて、お捜しの子どもたちを連れて参上いたしました。母を早くお助けくださいませ」と繰り返したので、聞く人はまず涙を流した。清盛はこのことを聞きになつて、まず子どもたちと一緒に連れて、参上したことは神妙であると、すぐに対面なされると、二人の子は左右の脇にいて、幼い子を抱いていた。涙を抑えて申し上げるには、母はもともと咎のない身でございます。私はこの子どもたちを失つては、つまらない命を、一時でも長らえていようとは思われませんので、まず私を死なせてから、子どもたちにもかくも配慮いただければ、この世の情け、後の世までのご利益は、これに過ぎたることとはございますまい。生き長らえて夜昼歎き悲しむであらうことは、罪深く思われます」と繰り返したので、六つの子乙若が、母の顔を見上げ

て、泣かずによく申し上げて下さい」と言うので、母はいよいよ涙に咽んだ。さしも心を鬼にしていらした清盛も、しきりに涙が流れるので、押し拭い押し拭い、相応な様子でもてなされたので、あれほど勇猛な武士たちも、皆袖をしぼった。我慢できない者たちが、多く座席を外したとかいうことである。

常葉はこの年二十三歳、梢の花が一方では散っていて、少し盛りは過ぎているけれども、かえって見所があるというのと同様であった。もともと見目形が人並み優れただけでなく、幼い時から宮仕えをして物慣れていた振る舞い、口調であったので、道理を正しく思う心（言い）続けた。緑のまゆずみが、紅の涙に乱れて、物思いにふけて日が経ったので、このことがなければ、どうしてこんな美人を見ることができたろう」と人々は皆申したので、ある人が言うには、美人だということのも本当にその通りだ。伊通大臣が、中宮（九条院）のもとに、美しい人を仕えさせようと、宮中得名を得た美人、千人呼ばれて百人を選抜し、さらにその百人から十人を選び、そのまた十人の中から一人と、この常葉をさし上げられたのだから、唐の（玄宗が寵愛された）楊貴妃、漢の（武帝が寵愛された）李夫人も、これには勝るまいものを」と言うので、見ても見ても、実に貴重なのも当然だなあ」と申した。

そうしているうちに、母は許されたが、この孫たちを失って、明日も知らない老いた身が、助かっても何になるだろう。情けない常葉だ。この老いた身を助けようというのか、あの子たちを何のために連れてまいつたのだ。四人の子や孫のことを思うから、ただこの老いた身を先に亡くしてください」と、泣き悲しんだのももつともだ。足音が乱暴にすると、もう命をとる使者であろうかと肝を消し、人が声高に物を喋るのも、ついにそのことだと魂も消し飛びそうであったのを、大武（清盛）がおっしゃるには、「義朝の子どもたちの（処刑された）ことは、清盛の個人的な考えではなく、主君のご命令を受けて執り行っただけのことだ。うかがって、朝廷の議定に従おう」とおっしゃるので、一門の人たちや武士たちは、どうしてそのように、心弱いことをおっしゃるのだろうか。この三、四人が成長なさるのはそのうちのことだろう。お子様たちのために、後の世が恐ろしいことではないと申したのだが、清盛は、誰もそのように思うが、大人びて

いる頼朝を、池殿のおおせに従って助けおいたのだから、兄を助けて、幼い者を誅するというわけにもゆかないから、仕方ないことなのだ」とおっしゃった。

常葉の子どもたちの命が今日まで延びたのも、ひとえに観音のご神慮と思つたので、ますます信心をして、普門品を読み申し、子どもたちには名号を唱えさせなされた。こうして露の命も消えずに、春もなけば過ぎたが、兵衛佐殿（頼朝）は、伊豆国へと流されるということであったので、自分の子どもたちはどちらへ流されるのだろうと、肝を冷やして伏し沈んでいたが、幼いからと、差し置かれて、流罪にまでは及ばなかった。

「第九章 経宗・惟方が遠流に処されること」

院は顯長卿の宿所にいらつしやつたが、いつもは御棧敷にお出でになつて行き交う人の往来をご覧になつて、心を慰めていらつしやつたが、二月二十日頃に、内裏からの使者といつて、棧敷を（打ち付けて）塞いでしまった。上皇のお憤りは深く、清盛をお呼びになり、主上は幼くていらつしやるので、このようなご計画をなさるとも思われぬ。これはしかしながら経宗、惟方の仕業と思われる、縛めて連行してこい」とご命令になつたので、畏まつて、かつての保元の乱では、親類を離れて、お味方に参上して忠義を尽くしました。去年もまた独力をもつて凶徒を誅戮しもうして、命を軽んじて君を位におつけ申しました。幾度であつても、院宣、勅定に従わなないことがございませうかと、すぐに官軍を差し遣わし、経宗、惟方の宿所に押し寄せたので、新大納言（経宗）のもとには、雅楽助通信、前武者所信安という者たちが、二人討死した。だが（経宗と惟方の）二人は別事なく捕らえられ、中庭の中に引き据えられた。

すでに死罪に定まっていたのを、法性寺の大殿（藤原忠通）が、かつて嵯峨天皇の弘仁元年九月に、右兵衛督（藤原）仲成を誅されてより、去る保元元年まで、御門二十五代、年にして三百四十七年、この間、死んだ者は二度と帰らない、不憫であるといつて、死罪を止めていたのに、後白河院のご治世に、少納言入道信西が政権を握っていたときに、はじめて執行したが、中二年を挟んで、去年大乱がおこり、その身もすぐに誅されてし

まつた。恐ろしいことではないでしょうか。公卿の死罪はどうしてあつてよいものでしょうか。その上、国内で死罪を行えば、天下に謀叛人が絶えないとも申しますので、両人の死罪一等を減じて、遠流に処されたらどうでしょうか」と申し上げられたので、もつとも大殿のおっしゃることはその通りだ」と、諸卿も同じく申し上げられたので、新大納言経宗を阿波国へ、別当惟方を長門国へと流された。官外記の記録には、「左近衛将監に仲成を禁裏にて射殺させた」と記してあるのだから、まさしく首を刎ねられたようなことは、ますます久しい（昔のこと）ではなからうか。

そうしているうちに、この人々の陰謀が次第に明らかになり、主上も無罪であるということをお聞きになつたので、信西の子どもたちを皆召し返される。ご政務について相談なさる相手がいないだけに、あの禅門のことを偲びなさる。師仲卿も結局は逃れるところもなく、播磨中将成憲の配所（であつた）、室の八島に流された。伏見源中納言（師仲）卿は、三河の八橋を渡るといので、

夢にだにかくて三河の八橋をわたるべしとは思はざりしを

（夢にさえこのように三河の八橋を渡るであらうとは思わなかつたのに）

と詠まれたのを、上皇がお聞きになつて、憐れに思われたので、「召し返せ」とお命じになつた。まことに詠歌の徳であるのだらう。

その後、新大納言経宗も阿波国から召し返されて、右大臣になる。人は阿波の大臣と申した。また大宮左大臣伊通公は、世の中に暮らしていると面白いことを聞くものだなあ。昔は吉備の大臣がいたとか聞くが、今は粟の大臣が現れた。いつか又稗の大臣が出てくるかも知れないなあ」と笑われた。大饗が行われるはずであつたが、尊者にこの左大臣（伊通）をお招きなさると、使者が聞いているのも憚らずに、「粟の大臣（経宗）が呼んで旅行帰りのような饗宴を催されるのか。伊通は参上できません」と申し上げられた。

別当入道（惟方）は、上皇の（ご）憤懣が深く、召し返されることはないであらうということが聞こえたので、心細く思われたのだらうか、故郷

に一首の歌を送られた。

此瀬にもしづむときけば涙川ながれしよりもぬるゝ袖かな

（この瀬にも沈むと聞く涙川は流れたのよりも濡れる袖だなあ）

と詠んだのを、聞く人も憐れになり、主上も感動なかつたので、ついに赦免を受けて、上洛なさつた。

「第十章 頼朝遠流のこと」

さて頼朝は伊豆国へと流され、ることとなつたので、池殿は、兵衛佐（頼朝）をお呼びになつて、泣く泣くおっしゃるには、「昨日までもあなた故に心を碎いてきました、配所が決まつて流されなさることになりました。尼は若くから慈悲深い者で、多くの者たちを請い受けてきました、今はこのような老尼の申すことが、かなつとも思われなかつたのに、左馬頭重盛（がよく）とりなし）申してくれて、やつと命が助かつたことの嬉しさよ。今生の喜びは、これに勝るものはありませんよ」と繰り返されたので、頼朝も、ご恩によつてつまらない命をお助けいただきましたことは、いくつもの来世・来生にも報恩できるかどうかかわらないようなこととございます。それにしても、はるばると下つてゆきます道中、私の見方の者は一人もございませんので、どうすればよいのでしょうか」と申されると、「まことにそれもいたわしいことです。親や祖父たちの代から召し使われる者も、世情を恐れて隠れていきましょう。今は減刑されたと公表してみましようか」と取り計らわれたので、すぐにそのことが風聞となつて、武士たちが少々出てきた。この武士たちは一緒に申し上げるには、「今はご出家のことを申し上げて、ご下向なされば、ご安心でございましょう。池殿もよく思われ、平家の人々もその通りだと思われ、ご申しあげよう」と申し勧めたが、頼朝源五盛安だけが、頼朝の（耳に）囁き申すには、「人がどのように申し上げましようとも、御髪を下ろされてはなりませんぞ。ご主君が助かられましたのは、ただごときはございません。八幡大菩薩のご神慮とも思わ

れます」と申し上げたので、そつと頷かれた。「ご出家なさい」と言うのも、なつてはいけません」と言うのにも、ともに返事もなさらない心のうちは大したものである。

永暦元年 一一六〇年(三月二十日、もう伊豆国に下らぬることになつたので、池の禅尼にお暇を申し上げに参上した。禅尼はつらつらとご覧になつて、「不思議にも命を助け申した心を察してくださいさるならば、尼の言葉の末も少しも違えることなく、弓矢、太刀、刀、狩漁などというようなことは、耳にも聞き入れてはなりませんよ。人は口さがらないものですから、あなたも再び取り沙汰されるようなことなく、尼にも重ねて悲しいことを聞かせませぬように」などと、こまごまとおっしゃるので、頼朝はこの年十四歳であつたので、言わば幼稚といえるような年頃ではあつたが、人の真心が真実であることを思い知つて涙に咽び、袖もしぼるほどでいらつした。だが、ややあつて、父母に死に遅れまして後は、同情をかけてくれる人もございませぬのに、熱心に真心をかけてくださるのはありがたいことです」と、しきりに泣きしずまれたので、禅尼も本当にその通りと心中を推し量られて、人はよい親の孝養を、真心こめてやるのが冥加もあり、寿命も長くなるということです。経を読み、念仏をも申し上げて、父母の後生を弔いなさい。尼は子と申つてこのように申すのですよ。それというのも、尼の子に右馬助家盛というものがおりました。その面影によく似ていらつしやるので、いとおしく思つたのです。すべて見目形、心遣いも人に勝つていて、鳥羽院に召し使われてご寵を受けておりましたが、この大式(清盛)殿がまだ中務少輔と申しました頃に、(清盛殿が)祇園の社で事件を起こし、社人の訴えがあつたので、山門の大衆が揃つて流罪になさいと、公家衆に申しましたが、主君がおかばいになつたので、弟家盛が邪魔立てするのであろうと、呪詛したという噂でしたが、まことに山王の祟りだつたのでしようか、二十三歳の年に亡くなつてしまいました。(私の)つまらない命は、長くあるものとも思われませんが、もう十一年にもなつてしまいました。なにごとにつけても思ひ出さない時はございせんが、あなたのことによつて、涙を流し心を尽くしたので、まず嬉しいこととございましたよ。あなたは将来長く、尼は明日をも知らない身ですので、名残惜しくございませぬ」と、心苦しげに歎かれたので、佐殿(頼朝)も、誠実な真心のほどを思つと、ど

うしたつてこの恩を報じられるとも思われず、夜もすがら泣き明かされた。三月二十日の明け方、池殿を出て、東路遙かに下られた。郎等も少々いたのも皆とどめられて、わずかに三、四人を連れて行つた。盛安も大津までと、馬、鞍を普通にしてお供していたが、佐殿(頼朝)は、およそ人が流されるといふのは大いなる嘆きであるが、頼朝の流罪は稀代の喜びである」とおっしゃつた。しかし内蔵人でもあつたので、宮中の交際も忘れがたく、皇后宮の宮司としてもお仕えしていたので、そのお名残も惜しかった。親でもない池の禅尼が、情けをかけてくださったのにもお別れ申したので、袂の乾く暇もない。渡り鳥が南枝に巢をかけ、胡族の馬が北風にいななくのも、生地を思うためである。東平王という者は、旅の空で亡くなつたが、墓の上の草も木も、故郷のほうへとなびいたとかいふ。生を変えての後までも、故郷の土は忘れられないのであるのに、追い立ての検非違使や、青侍季通は、粟田口から次第に、道中持つているものを奪い取つて、狼藉はことさら甚だしい。

盛安は大津までと申したが、人々がとどまつてしまつた上、勢田には橋もなく、船で向かいの地に渡りなかつたので、あれこれと心配で送り申すところに、社の見えたのを、何の神だろつ」とお尋ねになつたので、「建部明神です」と申し上げた。佐殿(頼朝)は、それならば今夜はこの御前で夜を過して、道中の祈りを申し上げよう」と、社壇にお泊りになつた。夜更け人が寝静まつてから、盛安が申し上げるには、都でご出家なさつてはいけないと申し上げましたのは、不思議な夢のお告げを受けたからでございませぬ。主君がご浄衣で八幡にお参りなさつて、大床にいらつしやいます。盛安はお供で、沢山の人が石畳の上にお立ちになっています。十二、三歳ほどの童子が、弓矢を抱いて大床にお立ちになっています。義朝の弓、箆を着けて参りました」と申し上げられますと、ご宝殿の中から、気高いお声で、「深く納めおけ。最後には頼朝に与えようぞ。これを頼朝に食わせよ」とおっしゃるので、天童がものを持つて御前にお置きになりました。何であるうと見申すと、打ち鮑と申すものです。「主君がおそれられてなかなか召し上がらないのを、それをいただきなさい」とおっしゃる。数えてご覧になると、六十六本あります。両方のお手で押し握つて、太いところを三口お召し上がりになつて、細いところを盛安にお投げになられたのを、取つ

て懐に入れるところで、はつと目が覚めましたのは、故義朝殿は一度朝敵となられました、御弓、箭を八幡のご宝殿に納めおかれ、最後にはご主君にさしあげようといふことになりました。また打ち鮑六十六本を召し上がったのは、六十六カ国をご支配なさることになりましたと、あわせて申して「申上げると、その返事をなさるすに、さあ、せめて鏡まで」とおっしゃったので、どちらまでもお供申ししようと思ひますが、八十を越す老母が、心配でございますので、今日明日もわからずでございます。どうにでも見取りましたらば、すぐに参上いたします」と申していましたが、人がいないからこそ、このようにおっしゃるのでしよう。母のことはどうにかなりましよう。伊豆までお供申します」と申し上げたので、そうは思わないことだ。気持ちには嬉しいが、お前の母が歎くであらうことは、私の間違いとなる。母を看取つた後に参れ」と、再三とどめられたので、仕方なく、泣く泣く都へ上つた。

兵衛佐殿(頼朝)は、尾張国の熱田大宮司季範の娘の腹である。男子二人女子一人いらつしやうた。女子は後藤兵衛実基が養うものとして、都に隠しおいた。もう一人の男子は、駿河国に香貫という者から召し出されて、平家のもとに連行されたので、希義まれよしという名をつけて、土佐国気良けらといふところに流されていらつしやうたので、気良冠者と申した。兵衛佐(頼朝)は伊豆国、兄弟東西へ分かれて行く、宿業のほどこそ悲しいことである。

「第十一章 牛若が奥州に下ること」

それにしても常葉を、清盛は寵愛して、近いところに置いて、通わせたと噂であった。そのためその腹の男子二人は流罪も逃れて、兄今若は醍醐寺(このぼり出家して、)、禪師公全濟、全成と申した。稀に見る荒くれ者で悪禪師と言つた。真ん中の牛若は、八条宮にお仕えして、卿公円濟、円成と名乗つて、坊官法師でいらつしやうた。弟牛若は、鞍馬寺の東光坊阿闍梨蓮忍の弟子(や)、禅林坊阿闍梨覺日の弟子となつて、遮那王と申した。十一歳の年だとかいふが、母が申したことを思い出して、諸家の系図を見ると、(自分は)実に清和天皇から十代のご末裔、六孫王から八代、多田満仲の末葉、伊予入道頼義の子孫、八幡太郎義家の孫、六条判官為義の嫡男

(である)、前左馬頭義朝の末子でありました。どうにかして平家を滅ぼし、父の本望を果たそうと思われたのは恐ろしいことであつた。昼は終日学問に精を出し、夜は終夜武芸を稽古なされた。僧正が谷で、天狗に夜な夜な戦ひ方を習うとか云々。そのため早足、飛び越えなどの武芸の技は、人間の仕業とも思われぬほどであつた。

母の常葉は清盛に思われて、姫君を一人もつけたが、遠ざけられてしまつてからは、一条大藏卿長成の北の方となつて、子どもがたくさん出来た。この遮那王を蓮忍も覺日も、出家なさい」といふのだが、兄二人が奉仕になつてしまつたのさえ無念であるのに、簡単にはなりません。兵衛佐(頼朝)に申し合せて「から考えます」などと申された。無理に「出家するよに」と言つと、突き殺すぞ、刺し違えるぞなどと、こつそりと言われるので、師匠も常葉も、継父の大藏卿(長成)もどうにもならず、ただ平家が(このことをどう)聞くのかをだけ歎いた。

ある時、奥州の金商人吉次という者が、京へ上つてきたついでに、必ず鞍馬(山)に参るのにお会いになつて、この私を陸奥国へ連れて行つてくれ。立派な人を知つているので、その礼には黄金を頼んで得られるように計らおう」とおっしゃると、お供申すことは、簡単なことですが、(鞍馬山の)大衆のお咎めを受けることになりませんか」と申すので、この私がいなくなりまして、誰が捜しましょうか。ただ土用の死人を、盗人が取つたようなものですよ」とおっしゃるので、(それならば)この上支障はございません」と約束したが、ただし出発の日は、同道の人の計画に従つて下さい」と申すところに、その人が参詣した。遮那王が寄つて話して、あなたはどこらの国の方で、何氏でいらつしやいますか」と、こまごまに尋ねられると、(その者は)下総国の者でございます。深栖三郎光重の子、陵助頼重と申しまして、源氏です」と答えたので、(遮那王は)それではなかなかの人ではないでしょうか。(主だった人の中では)誰と親しいのですか。(頼重が答えるには)源三位頼政と近しくございます」と申すので、(今となつては何を隠しましょうか。(私は)前左馬頭義朝の末子でございます。母も師匠も法師になれと申しますが、思うところがありません、今まで)法師にならずに)過してまいりましたが、始終都に近いようなところ(の住まいはいろいろと難しく思われます。まず下総までお下りください。そこ

から吉次を連れて、奥へ向かいます」と、こまごまと語られたので、支障ありません」と約束して、生年十六歳と申す、承安四年（一一七四年）三月三日の明け方に、鞍馬（山）を出て、東路はるかに思い立つ、心の程が可哀想である。

その晩に鏡の宿に着き、夜更けてから、自ら髻（おんげ）を取り上げて、懐から烏帽子を取り出し、ひたと置いて、明け方に「ご出発になったので、陵助（頼重）はもうご元服なさったのですか、お名前は何と」と尋ね申したので、烏帽子親もいないので、自ら源九郎義経と名乗ります」と答えて、連れ立って、黄瀬川について、頼朝に会うために（北条へ寄ろうと）義経が「おっしゃったのを、父でございませぬ深栖（光重）は、見参に入ってくださいませが、頼重はまだお目にかかってはおりませぬ。後日にお手紙でおっしゃったらいかがでしょうか」と申すので、そのままお通りになった。

（義経は）ここに一年ほど忍んでいらつしやうたが、武勇人に優れていて、山賊や強盗を捕らえなさることは、凡夫の仕業とも見えなかつたので、錐は袋を通すというので、結局平家に知られるのでは」と、深巢三郎（光重）も申すので、それならば奥州へ行こう」と、まず伊豆へと越えて、兵衛佐殿（頼朝）と対面し、このことを申し上げて、もし平家が聞いたならば、あなたのためによろしくしないでしよう。ですから奥州へ下ろうと思えます」とおっしゃると、佐殿（頼朝）は、上野国の、大窪太郎の娘が、十三歳の年に熊野詣でのついでに、故殿（義朝）にお目にかかってから下っていたが、父上に死に別れて後、人の妻となるのであれば、平家の者とは契りません。同じくなるのであれば秀衡の妻となりましよう」と、娘は夜逃げして奥州へ下ったところ、秀衡の郎等の（佐藤）信夫小大夫（元成）という者が、道で行き違つて横取りし、二人の子をもうけたと聞く。今も後家分をとつて、貧しくもなくしているとかいふことだ。それを訪ねてゆくとい」と、手紙を書いてお与えになる。（義経は）すぐに奥州へ向かわれて、お手紙をお渡しになると、夜になってから対面申し、尼は佐藤三郎次信（継信）、佐藤四郎忠信といつて二人の子を持っておりませぬ。次信は御用に立ち申す者ではございますが、酒飲みで、酒に酔つてしまいますと、少々喧嘩早くなつてしまいます。忠信は下戸で、生れついでに忠義者でございませぬ（お供に）おつけした。多賀の国府を越えて、吉次を訪ねて、秀衡のも

とに連れてゆけ」とおっしゃつて、平泉に行つて、女房を介して申し上げると、そのままお入れ申して、もてなしお世話申したら、平家にきこえて責めがあるだろう。お出ししてしまつたらば、弓矢（の家）にとつて長い不名誉となるであろう。惜しみ申して隠（せば、天下の乱れ）のもと）となるだろう。両国の間には、国司、目代のほか、みな秀衡の手のものである。しばらくは忍んでいらつしやるがいい。美貌の若武者殿であるから、姫を持つているような者は婿にもお取りしましうし、子がないような者は養子にもなさるでしよう」と（秀衡が）申し上げるので、義経もそのように思います。とはいえ金商人を言いくるめて、連れ立って下つて参りました。何でもお与え下さいませ」とおっしゃつたので、黄金三十両を取り出して、商人に取らせた。この時、上野国松井田というところに一泊なさつたが、家の主の息子をご覧になると、勇猛な者であると思われたので、後に、平家を攻めに上洛なさるとき、かたがつて仲間になさつた。伊勢国の目代となつて、上野へ下つたが妻をめぐつて留まつた者であるので、伊勢三郎と呼ばれ、私の烏帽子子の始めであるから、義の字を与えよう」と、義盛と名づけられた。堀弥太郎（景光）と申すのは、金商人である。

「第十二章 頼朝が義兵を挙げられること」

兵衛佐殿（頼朝）は、配所で二十一年の年月を過ぎたが、文覚上人の勧めによつて、後白河院の院宣をいただき、治承四年（一一八〇年）八月十七日に、（山木）和泉判官兼高（兼隆）を夜討にしてから後、石橋山、小坪、絹笠（衣笠）、といつところどころの合戦に身をまつとして、安房、上総の軍勢を従えて、下総国をなびかせ、武蔵国に出られたので、八力国でなびかない草木はなかつた（ほどの威勢をもつた）。

醍醐の悪禅師全濟、八条卿公円済も、このことを聞いて、関を固めない前にと、急いで馳せ参じられたので、平家はすぐに土佐へ流した希義を討つと、当国の住人の、蓮池次郎権守家光に命令を下したので、家光が参上して、兵衛佐殿（頼朝）が、坂東で謀叛を起こされたので、あなたをお討ちせよと、飛脚が参りました」と（希義に）申し上げたので、よく告げてくれた。私は毎日父のために法華経を讀誦してきたが、今日はまだ読み終

わっていない、しばらく待つてくれ」と、持仏堂に入り、御経二巻を読み終えて、腹をかき切つて亡くなられた。

九郎御曹司(義経)は、秀衡のもとにいらっしやうたが、佐殿(頼朝)がすでに義兵を挙げたと噂になってきたので、「出発なさろうとするところ、秀衡は、紺地の錦の直垂に、紅下濃の鎧と、黄金作りの太刀をそえてさしあげた。(また)馬は御用に從つてお乗りになるといい」と申し上げた。すぐに信夫にお着きになったので、佐藤三郎(継信)は、公私につけて処理をしてから参ります」と言つて留まり、弟の四郎(忠信)はそのままお供する。もう白川の関を固めていたので、那須に湯治にゆくためであるといつてお通りになり、兵衛佐殿(頼朝)が大庭野で十萬騎で、陣取つていらっしやうところ、屈強の武士たち百騎ほどで参上なさうた。佐殿(頼朝)が、何者か」とお尋ねになると、「源九郎義経」と名乗られたので、「かつて八幡殿(義家)の後三年の合戦の時、弟の義光が、刑部丞でいらっしやうたが、弦袋を陣の座に残して、金澤城に馳せ下られたのを、故入道殿(頼義)が再び生き返られたように思われる」と、鎧の袖を濡らされたとか聞く」と、しきりに喜ばれた。

甲斐源氏、武田(信義)、一条(忠頼)、小笠原(長清)、逸見(光長)、板垣、加々美次郎(長清)、秋山、浅利、伊澤(信光)らが、駿河国目代広政(橋遠茂?)を討つたので、平家の大将小松権亮少将維盛が、その軍勢五萬騎余りで、富士川のほとりに陣を構えた。頼朝は足柄、箱根を越えて、黄瀬河に到着される。その軍勢は二十萬騎である。平家の武士たちの中から、斎藤別当実盛が、源氏は夜討をしてくるやもしれません」と申し上げた。後に、富士川の沼に下りていた水鳥たちが、軍勢に怯えて飛び立つた羽音に驚いて、矢の一つも射ることなく、都へ(平家軍は)逃げ上うた。

養和元年(一一八一年)三月に、平家はまた墨俣で(侵攻を)食い止めた。卿公円濟は、義円と改名していたが、深入りして討たれた。醍醐悪禅師(全濟)は、後に有識に任じられ駿河阿闍梨と言つたが、僧綱に転任して阿野法橋と呼ばれた。

寿永二年(一一八三年)七月二十五日に、北陸道を攻め上うた木曾義仲が、まず都へ入ると噂であつたので、平家は西海に赴かれる。しかし池殿の息子たちは、皆都に留まられる。それは、兵衛佐(頼朝)が鎌倉より、故

尼御前がいると同じようにお考え下さい」と、たびたび申されたので、落ち行かずに留まつたのである。本領を少しの差異もなく安堵なさうたので、むかしの芳志を奉じなさるのだと思われた。

そうしているうちに、長田四郎忠致は、平家の侍たちに憎まれたので、西国へも行かなかうた。このままではすぐに国人に討たれてしまふと思つたのだらうか、父子十騎ほどで、尾羽を枯らして鎌倉殿に参上した。よく参つた」と、土肥次郎(実平)に預け置かれたが、範頼、義経の二人の弟を上洛させるときに、長田父子をも一緒に連れて行かせなさると、「身を全うして合戦の忠節を尽くせ。毒薬が転じて甘露となる、ということがあれば、勲功があるのであれば大いなる恩賞を与えよう」と約束なさうた。そこで木曾を退治し、平家の城、摂州のノ谷を攻め落とす(その進軍中の)注進のたびごとに、「忠致、景致は戦つているか」とお尋ねになると、「またとない勇猛な者でございます。向かつてくる敵を討ち、あたるところを破らないことがございませぬ」と申し上げるので、八島(屋島)の城が落ちたと報告があつたとき、「今は奴ら親子にいくさをさせるな。討たせよ」とおっしゃるが、いくさが終つて、土肥(実平)について帰つて参つたので、今度の振る舞いは立派であつたと聞く。約束の勲賞を取らせろ。しつかりと頭殿(義朝)の孝養をよくよくし申せ。成綱に命令しておいたぞ」とあつたので、喜んで退出すると、弥三小次郎(成綱)が押し寄せて、長田父子を捕らえ、磔にされた。土に板をしいて、土磔というものにして、なぶり殺しになさうた。平家の方へも落ち行かず、それならばと城に籠つて、矢の一つも射ることもなく、身命を投げ打つていくさして、欲しくもない恩賞だなあ。これもただ不義の結果、業報が果たすせいなのだ」と人々は申した。又何者がしたのだらうか。きらへども命の程は吉岐のかみ美濃尾張をば今ぞ給はる(嫌つてはいたけれども、命があつてのものだ生きてる吉岐守殿よ。あれほど欲しがつていた美濃や尾張のかわりに身の終わりを今いただいでしまつたよ)

かりとりし鎌田が首のむくいにやかかるうきめを今は見るらん

(鎌だからといって収穫が得られようと刈り取った鎌田の首、この首の報いなのだろうか、こんな酷い目に今はあつていふことだよ)

と詠んで、作者に鎌田政家と書いた高札を立てた。これを見る者見る者、憐れだとは言わずに、唇を返して憎まない者はいなかった。だから武道の道に、血気の勇者、仁義の勇者ということがあつて、いかにも仁義の勇者が本来あるべきものであるとする。忠致、景致も随分血気の勇者であつて、拔群の(軍功を立てた)者であつたけれど、仁義がないがために、譜代の主君を討ち申して、結局は我が身を滅ぼしたのだ。

ここに池殿の侍が、丹波藤三国弘と名乗つて鎌倉に参上したので、自分も捜したいと思つていたのだが、公私の多忙に紛れて、今まで無沙汰であつた」と、そのまま対面し、今納殿にある物を、みな取り出せ」とご命令になつたので、金銀絹布、さまざまの物を、山のように積み上げた。これはまずとりあえずの引き出物だ。土地争いはないか」と(頼朝が)お尋ねになると、(国弘は)丹波国細野と申すところは、相伝の私領でございませうということをおし上げたので、すぐにご命令書をお与えになつた。財宝を宿次に送れ」と(頼朝は財宝を)都まで送られた。あの時には、このような運を切り開くような人とは思わなかつたけれども、あまりにいたわしくて情けをかけて奉公したためである。兵衛佐(頼朝)がおつしやるには、首は故池殿に繋いでもらつたものだ。その御礼に、大納言(頼盛)殿をもとのままに置き申した。髻は頼源五(盛安)のおかげで切らずにすんだ。ただ盛安は双六の上手で、院中のお局にいつも呼ばれて、院もご覧になつてゐるのであるから、主上(後白河院)が遊びのお相手に(呼ばれていらつしやる者を、どうやって)鎌倉に(呼んだものかと思つて、考えているのだ」と語られたので、このことを源五(盛安)に告げたのだが、天性からの双六好きであるうえ、院中に参入していることを思い出だと思つたのだろうか、結局鎌倉には下らなかつた。

九郎判官(義経)は、梶原平三(景時)の讒言によつて、都に住むのは困難であつたので、また奥州に下り、秀衡を頼みにして過されたが、秀衡が亡くなつて後は、鎌倉から泰衡を騙して、判官(義経)を討たせ、後に

泰衡も滅ぼされてしまつたのは恐ろしいことである。こうして日本国を残るところなく従えなさつて、建久元年(一一九〇年)十一月七日、はじめて上洛なさつたが、近江国吉千の松原というところに到着されて、浅井の北郡の老翁を捜されると、二人の老人を連れて参る。土瓶二つを持参した。あれはどうしたのか」とお尋ねになると、あなたが昔、お召し上がりになつた濁り酒です」と申し上げるので、本當にそついつともあつた」と、三度傾けて、お前には、子はいないのか」とおつしやるので、ございませう」と申し上げる。すぐに連れてこられたが、足立(遠元)の子にされて、足立新三郎清恒として、近習の者に加えられた。それではこの翁に引き出物を与えよ」とおおせになつたので、白鞍を置いた馬を二匹、さまざまな貴重な宝を入れた長持を二合をお与えになつた。また昔の鶴飼いを呼び出して、小平をすぐにお与えになつた。

入洛なさると、そのまま院参なさると、(後白河)法皇もかつてのことを思い出されて、ことさらにしんみりとなさつた。髻切という太刀が、清盛のもとにあつたのを、お護りのためと院に取り置かれていたのを、この度頼朝に授けられた。三度拝していただいたとかいふことだ。

この太刀についてはさまざまの説がある。頼朝卿が原で捕われなさつた時に、隨身をなさつていたので、清盛の手に渡つて、院へ参つたのだと云々。またある説には、今のは本物の髻切ではない。本當の太刀は、以前から青墓の大炊のもとから召し上げたものだからである。その理由は、兵衛佐(頼朝)が、大炊(髻切を)預け置いたのを、頼朝が囚人となられた時に、(平家方は)この太刀を捜したが、今はこのようにしていてもどのようにかなるだろうか、いやなるまい)と思われたのか、ありのままに申された。そのまま大炊のもとに探しに行つたが、源氏の代々の太刀を、平家方へ渡してしまうことは悲しいことだ。兵衛佐(頼朝)が斬られなさつても、義朝のお子様方は多いので、まさか一門が絶えてしまうことはあるまい。まず隠してみよう)と思つたので、泉水といつて、同じくらしい太刀があつたのを、抜きかえてさし上げた。髻切は柄、鞘が円作りである。きつと佐殿(頼朝)に見せ申すだろう。佐殿(頼朝)と自分が一心になつて問題ないとおつしやれば、もよりのことだ。もしこれではないと申されれば、女のことですから、取り違えてしまいましたと申せば、大丈夫でしょ

う」と考えて、泉水をさし上げたのである。難波六郎経家が受け取って上洛して、すぐに頼朝に見せ申して、これかと訪ねられるたが、違う太刀だとは思われたが、長者（大炊）の心を推量して、それであると申された。清盛は大いに喜んで秘蔵されていたのを、院にさしあげたのである。本當の鬚切は、先年大炊のところから（頼朝のもとに）さし上げたとか云々。

その上洛のときに、盛安を呼んで、さまざまな財宝をお与えになり、どうして今まで下つて来なかつたのか。大きな所領を与えたいが、ちょうど空いているところがない。相応しいところがあつたらば与えよう」とおっしゃつた。まことに今まで参上しなかつたことは、私事ではない理由とは申しながら、不義の至りです、しかしながら微運の至極でございます」と、盛安も申した。

建久三年（一一九二年）三月十三日、後白河院が崩御されたので、すぐに盛安は鎌倉に参上した。頼朝は対面されて、最前も下向しておれば、相応な場所を与えたるうちに、今までの遅参のため仕方ないのだ。小さい所領だがまず馬でも飼え」と、多記の庄を半分お与えになつた。理由があることを申し上げたのだから、美濃国の中村というところも、同じくお与えになつた。

建久九年（一一九八年）十二月に、貢馬のついでに、明年一月十五日を過ぎたらば、急いで下つてきなさい。多記の庄を一円に授けよう」とお命じになつたが、明くる正治元年（一一九九年）一月十三日に鎌倉殿（頼朝）が御年五十三歳で亡くなられた。源五（盛安）はこれを知らず、十六日に京を出発し馳せ下るうちに、三河国で、早くもこのことを聞いたが、ことさらに下つて身なので、鎌倉に下着して、身の不運であることを語つたところ、昔の夢想の不思議なども申したので、齋院次官親能は、その鮑の尾を、食べるとすら見たのであれば、ますますめでたかつたろう。戴いて懐中しただけであれば、残る所もあるのだから」と申された。

それにしても清盛公は、兵衛佐（頼朝）を助けおかれた時に、まさかすぐさま家を覆そうという人だとは思われなかつたろう。同じように九郎判官（義経）が二歳で母の懐に抱かれていたのを、自分の子孫を滅ぼすような仇だと思つていたらば、どうして赦したるうか。これはしかしながら、八幡大菩薩、伊勢大神宮のご神慮と思われ。趙家の孤児（趙武）は、袴の

中に隠れて泣かなかつたし、秦の遺孫は、壺の中で養われて成人したと申すので、人の子孫が絶えないのも、このような不思議もあるといつのである。義朝は鳥羽院のご治世の、保安四年（一一二三年）癸卯の年に生れ、三十四歳で、保元元年（一一五六年）に忠節を尽くし、勲功を受け、朝恩に浴し、この度の謀叛に組みして身を滅ぼした。しかしまた、頼朝、義経の二人の子がいて、兵衛佐（頼朝）三十四歳、判官（義経）二十二歳で、治承四年（一一八〇年）に義兵を挙げ、会稽の恥を雪ぎ、ふたたび家を栄えさせなかつた。

頼朝は近衛院の久安三年（一一四七年）丁卯の年に誕生し、義経は二条院の平治元年（一一五九年）己卯の年に生れたので、三人ともに単閼の年の人である。中でも頼朝は平家を滅ぼし、天下を治めて、文治の始め（一一八五年）、諸国に守護を設置し、あらゆるところの莊園、郷保に地頭を補して、武士の仲間を諫め、廃れている家を興し、絶えていた跡を継いで、武家の棟梁となり、征夷將軍の院宣を受けた。卯は東方三支の中の正方として、仲春をつかさどる。柳は卯の木である。三春の陽氣を得て、天道のめぐみの眉を開き、営みも多く栄えるので、柳營の職）と漢語では言われる將軍職）には、卯の年の人は、実によりどころがあるものであるなあ。

